

【研究主題】

課題を解決するために必要な資質・能力を育成
する授業に関する研究
－主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して－

目 次

はじめに	1
第1章 研究主題に関する基本的な考え方	
1 研究の目的	2
2 本県の教員の意識や取組に関する実態	2
3 課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか	5
4 授業において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか	7
5 児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か	8
第2章 国語科における考え方と実践例	
1 国語科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか	10
2 国語科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか	11
3 国語科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か	12
4 小学校における研究実践例	14
5 中学校における研究実践例	16
6 高等学校における研究実践例	18
第3章 社会・地理歴史・公民科における考え方と実践例	
1 社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか	20
2 社会・地理歴史・公民科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか	21
3 社会・地理歴史・公民科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か	22
4 小学校における研究実践例	24
5 中学校における研究実践例	26
6 高等学校における研究実践例	28
第4章 算数・数学科における考え方と実践例	
1 算数・数学科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか	30
2 算数・数学科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか	31
3 算数・数学科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か	32
4 小学校における研究実践例	34
5 中学校における研究実践例	36
6 高等学校における研究実践例	38
第5章 理科における考え方と実践例	
1 理科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか	40
2 理科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか	41
3 理科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か	42
4 小学校における研究実践例	44
5 中学校における研究実践例	46
6 高等学校における研究実践例	48
第6章 外国語活動、外国語科における考え方と実践例	
1 外国語活動、外国語科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか	50
2 外国語活動、外国語科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか	51
3 外国語活動、外国語科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か	52
4 小学校における研究実践例	54
5 中学校における研究実践例	56
6 高等学校における研究実践例	58
第7章 研究の成果と今後の課題	60
おわりに	60
引用・参考文献	60

はじめに

現在の児童生徒が成人して活躍する頃の社会は、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化し、児童生徒が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになると指摘されている。そのような社会において直面する課題は、複雑であったり未知のものであったりし、答えが多様で正答の定まらないものであることが多いと言われている。

このような社会の変化を踏まえて行われた文部科学大臣から中央教育審議会（以下「中教審」という。）への諮問においても、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究していくことができる児童生徒を育成するための学習指導の在り方についての検討が求められている（資料1-1）。

そこで、本研究では、課題を解決するために必要な資質・能力とはどのようなものを明確にした上で、そのような資質・能力を育成するために、授業において解決に取り組ませるべき課題はどうあるべきか、児童生徒が主体的・協働的に学ぶためにはどのような工夫が効果的かについて、学習活動や評価の在り方から明らかにしようと、平成27年度から2年間にわたって取り組んできた。

中教審による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」という。）では、育成を目指す資質・能力として、学校教育法に規定された、いわゆる「学力の三要素」を踏まえた「資質・能力の三つの柱」が示された。併せて、このような資質・能力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善が示された（資料1-2）。

本研究は、このような教育の動向と方向性を同じくするものであり、未来の創り手となる児童生徒に日々の授業を通して課題を解決するために必要な資質・能力を育成することを目指したものである。各学校における授業改善の一助となれば幸いである。

資料1-1 文部科学大臣諮問（一部抜粋）

初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）

平成26年11月20日

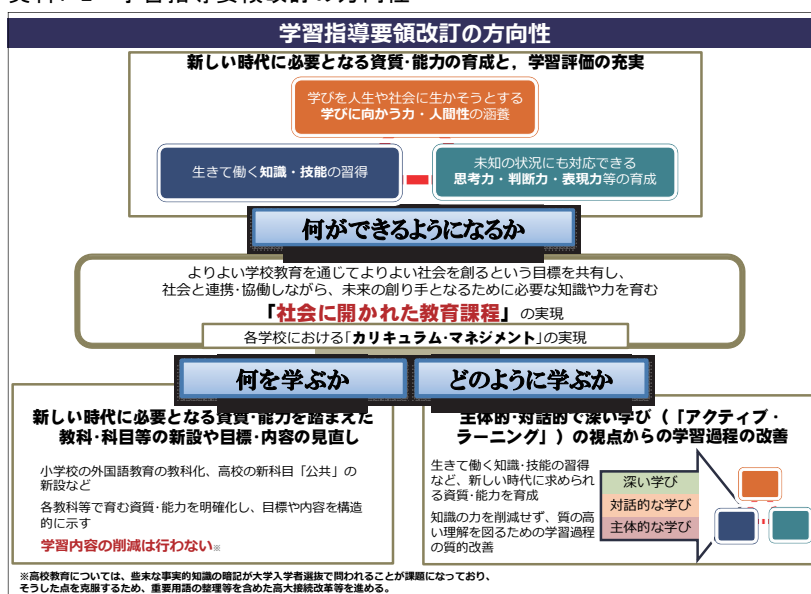
（前略）

これらの取組に共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点です。

そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。

（下線は筆者による）

資料1-2 学習指導要領改訂の方向性



※ 中央教育審議会答申（平成28年12月21日）補足資料から転載

第1章 研究主題に関する基本的な考え方

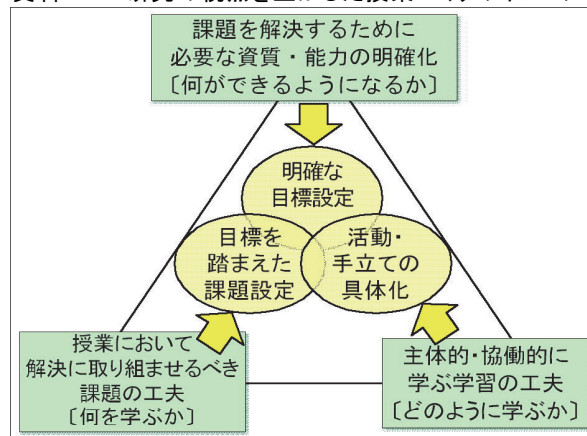
1 研究の目的

本研究の目的は、時代背景や教育の動向を踏まえ、課題を解決するために必要な資質・能力を授業を通して育成するために、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、授業改善に資することにある。そこで、まずは、児童生徒に育成したい課題を解決するために必要な資質・能力とはどのようなものかを整理し、明確にする。次に、そのような資質・能力を育成するためには、授業においてどのような課題に取り組ませるべきか、課題設定の考え方や工夫の視点について明らかにする。そして、児童生徒が課題解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の在り方について、考え方や工夫の視点を明らかにする。

このような視点から研究を進めることは、授業づくりの過程において、育成したい資質・能力を踏まえた明確な目標設定や、目標を踏まえた課題設定、学習活動や教師の手立ての具体化につながる事が期待できると考える（資料1-3）。

なお、本研究は、小・中・高等学校の国語科、社会・地理歴史・公民科、算数・数学科、理科、外国語活動・外国語科を対象としたものである。また、検証授業の実施に当たっては、現行学習指導要領に基づいて評価の観点を設定した。

資料1-3 研究の視点を生かした授業づくりのイメージ



2 本県の教員の意識や取組に関する実態

(1) 調査の目的

本県の教員は、児童生徒の資質・能力の育成にどのような課題を感じているか、また、授業で取り組ませる学習課題や学習活動に対してどのような意識をもって取り組んでいるかについて、実態を明らかにする。

(2) 調査の概要

ア 調査内容

- (ア) 児童生徒に身に付けさせたい力について
- (イ) 授業で取り組ませる学習課題について
- (ウ) 授業で取り組ませる学習活動について

イ 調査対象

研究協力員、短期研修受講者、研究提携校教員（小学校271人、中学校158人、高等学校65人）

ウ 調査期間及び調査方法

平成27年7月から12月において、質問紙調査法（選択式、一部記述）にて実施

(3) 調査の結果と考察

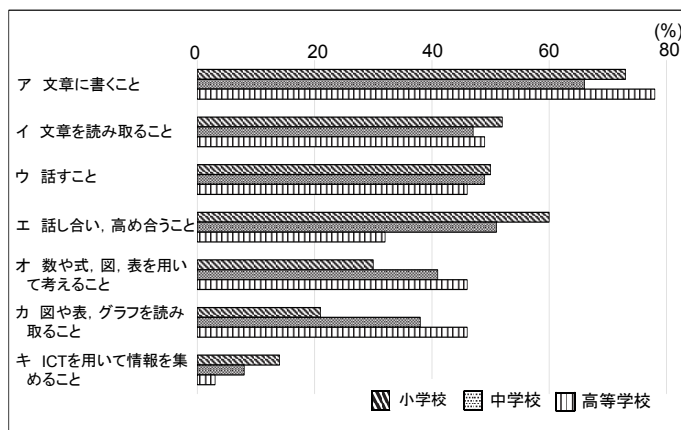
ア 児童生徒に身に付けさせたい力について

- (ア) 課題解決に必要な基礎的な力について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる基礎的な力の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について、不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても調べたことや考えたことを文章に書いたり話したりすることや文章を読み取ることが不十分であり、特に、小、中学校では、話し合いを通して考えを高め合うことが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-4）。このような傾向は、平成27年度全国学力・学習状況調査の分析でも指摘されており、児童生徒の思考・判断・表現を促す学習活動の工夫・改善が必要である。

資料1-4 不十分だと感じる基礎的な力

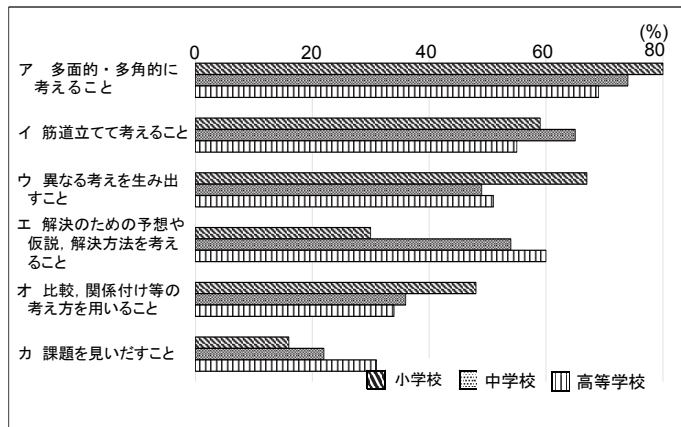


(イ) 課題解決において発揮される思考力について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる思考力の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について、不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても、多面的・多角的に考えることや筋道立てて考えることが不十分であり、特に、小学校では異なる考えを生み出すことが、中、高等学校では解決のための予想や仮説、解決方法を考えることが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-5）。このような力は課題解決的な学習を通して高まると考えられるものであり、一層の充実を図る必要がある。

資料1-5 不十分だと感じる思考力

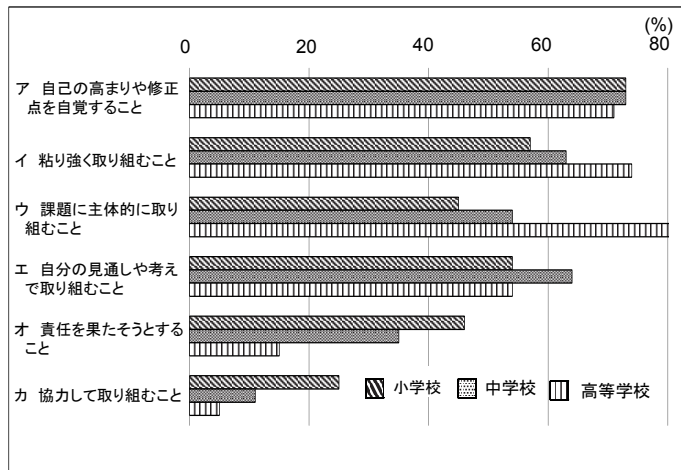


(ウ) 課題解決における学習態度について

次の各項目は、児童生徒に身に付けさせたいと考えられる学習態度の主なものです。これらのうち、あなたが現在授業を担当している児童生徒について不十分だと感じているものを三つ選んでください。

どの校種においても、自己の高まりや修正点を自覚することや粘り強く取り組むこと、自分の見通しや考えで取り組むことが不十分であり、特に、高等学校では課題に主体的に取り組むことが不十分だと感じている教員が多いことが分かった（資料1-6）。このことから、児童生徒が課題を自分に関係があることと受け止め、粘り強く主体的に取り組めるように工夫するとともに、見通しや振り返りを促す活動の充実を図る必要がある。

資料1-6 不十分だと感じる学習態度

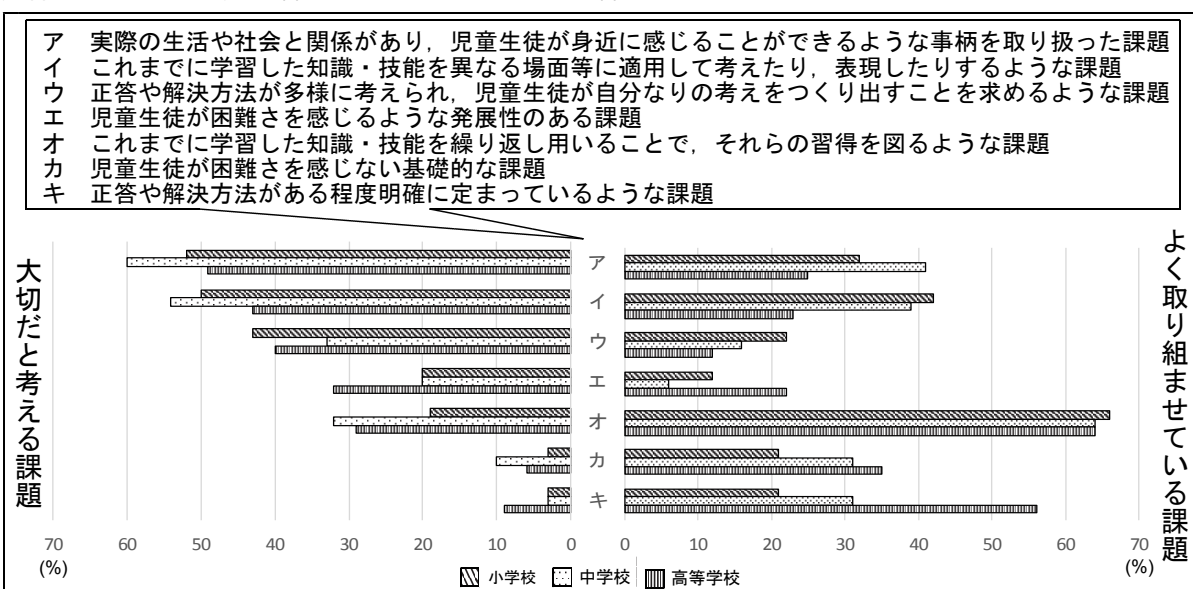


イ 授業で取り組ませる学習課題について

児童生徒の学習意欲を高め、主体的な思考や表現を促すためには、どのような課題に取り組ませることが大切だと考えますか。また、あなたがかねての授業においてよく取り組ませている課題は、どのようなものが多いですか。それぞれ三つ選んでください。

どの校種においても、ア実生活や実社会との関連を意識させる課題や、イ習得した知識・技能の活用を促す課題等が大切だと考えているが、かねての授業ではそのような課題にはあまり取り組ませておらず、オ知識・技能を反復することによって習得させる課題やキ正答や解法がある程度定まっている課題等に取り組ませている教員が多いことが分かった（資料1-7）。このことから、次世代を担う児童生徒に求められる課題解決に必要な資質・能力とはどのようなものか、また、それらを育成するためにはどのような課題に取り組ませるべきか見つめ直すとともに、単元の指導計画への適切な位置付けや効果について検討する必要がある。

資料1-7 大切だと考える課題とよく取り組ませている課題

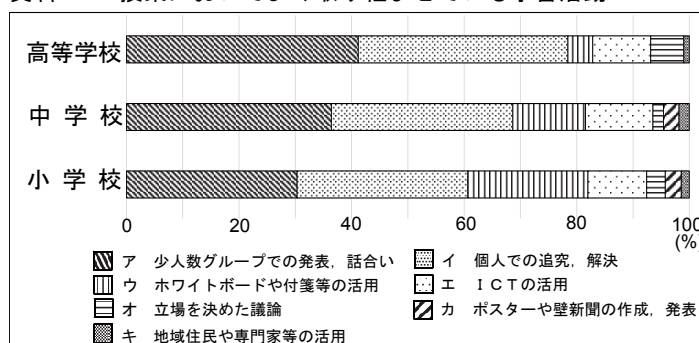


ウ 授業で取り組ませる学習活動について

あなたが、かねての授業において児童生徒によく取り組ませている学習活動は、どのようなものが多いですか。三つ選んでください。

どの校種においても、ア少人数グループで発表し合ったり、話し合ったりする学習活動やイ個人で追究し、解決を図る学習活動に取り組ませている教員が多いが、ウホワイトボードや付箋等の活用及び、エICTの活用、オ立場を決めて議論する活動の取組は少ないことが分かった（資料1-8）。このことから、

資料1-8 授業においてよく取り組ませている学習活動



児童生徒がグループや個人で思考・判断・表現する学習活動を設定してはいるものの、どのようにして思考させたり表現させたりするのか、教師の手立てが具体化されていない場合があることがうかがえる。そこで、児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的であるか明らかにする必要がある。

3 課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

(1) 学校教育法に基づく育成したい資質・能力

学校教育法第30条第2項が定める学校教育において重視すべき学力の三要素は「基礎的・基本的な知識・技能」,「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力（以下,「思考力・判断力・表現力等」）」,「主体的に学習に取り組む態度」である（資料1-9）。これを踏まえ,中教審答申においては,育成を目指す資質・能力の三つの柱が資料1-10のように示されている。当センターでは,この三つの柱を課題を解決するために必要な資質・能力と捉えている。

この三つの柱を児童生徒が授業を通して身に付けていくイメージを自動車を例に模式図で示すと,資料1-11のように捉えることができると考える。「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」は,車の両輪として捉え,バランスよく育成すべきである。「主体的に学習に取り組む態度」は,課題解決の原動力となるエンジンとして捉え,情意面の育成も重視すべきである。その際,児童生徒が生きていくこれからの社会の様相を考慮すると,課題解決に対して主体的に粘り強く,責任をもって取り組む態度や,考えの多様性を尊重しながら互いのよさを生かして協働する力やコミュニケーションを行う力,社会に参画したり環境へ配慮したりする姿勢がますます重要である。また,このような態度等の育成に当たっては,児童生徒自らが課題解決への見通しをもったり,解決の過程や結果を振り返ったりすることを通して,自己の高まりや修正点を自覚することが重要である。このような自覚は,課題解決への方向付けを図ることにつながることから,ハンドルの役割を果たすものと言える。主体的に学習に取り組む態度を養うためには,児童生徒自身が自らの考えの変容やそれに至るプロセスを客観的に捉え,学習することの意義を感じたり,自己の感情や行動を統制したりすることができる力を育成していく必要がある。

(2) 課題解決的な学習を通じた資質・能力の育成

授業を通してこれまで述べてきた資質・能力を育成するためには,基礎的・基本的な知識・技能を活用した課題解決的な学習を重視するとともに,児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習が促されるよう工夫する必要がある。なぜなら,思考力・判断力・表現力等は児童生徒が課題解決に取り組む中で発揮することによって高まる資質・能力であり,個別の知識・技能は課題解決の文脈や状況に応じて組み合わせられたり,関連付けられたりしながら活用されることによって体系化が図られ,理解を伴った知識・技能として定着が図られていくものだからである。また,他者と

資料1-9 学校教育法が定める学力の三要素

学校教育法第30条

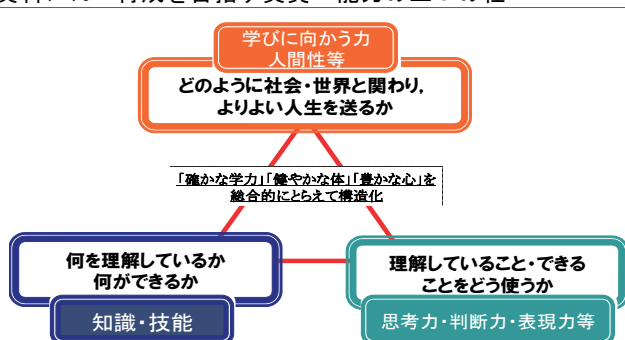
小学校における教育は,前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第21条各号に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

2 前項の場合においては,生涯にわたり学習する基盤が培われるよう,基礎的な知識及び技能を習得させるとともに,これらを活用して課題を解決するために必要な思考力,判断力,表現力その他の能力をはぐくみ,主体的に学習に取り組む態度を養うことに,特に意を用いなければならない。

(下線は筆者による)

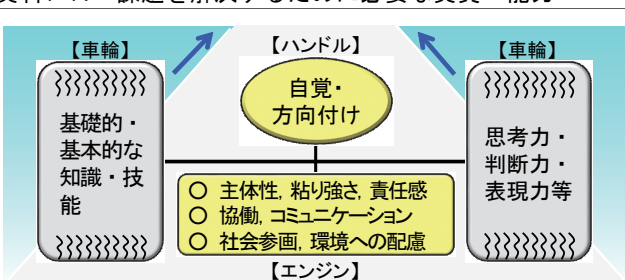
※ 第30条第2項は,中学校及び高等学校に準用

資料1-10 育成を目指す資質・能力の三つの柱



※ 中教審答申(平成28年12月21日)補足資料から転載

資料1-11 課題を解決するために必要な資質・能力



※ 白梅学園大学 無藤隆教授の考えを参考に作成

考えを比較・検討することによって互いの考えの相違点や共通点に気付き、そのことが問題意識を一層高めたり、自分の考えを見直し、新たな考えをつくり出したりすることにつながるなど、主体的な学習態度に関する能力の育成に好影響を与えることが期待できるからである。このような学習活動の充実は、学習指導要領においても重視されており、いずれの教科等においても思考力・判断力・表現力等の育成を目的とした学習活動として例示されている（資料1-12）。

そこで、このような課題解決的な学習を展開するに当たっては、どのような過程においてどのような資質・能力を重点的に育成するのかを明確にして授業に臨むために、表出させたい児童生徒の姿を資料1-13のように具体的に想定しておくことが重要である。その際、全国学力・学習状況調査等の分析を踏まえ、文章等から情報を正しく読み取ることや書いたり話したりするなど、表現を通して自分の考えを整理すること、考えの相互交流を通して自分の考えを多面的・多角的に検討すること、学習した過程や内容を振り返り自己の高まりを感じたり、次に生かすための改善点等を明確にしたりすることなどを特に大切にしたい。

資料1-12 学習指導要領における学習活動の例示

小学校及び中学校学習指導要領 第1章 総則 第4 2(2) 各教科等の指導に当たっては、 <u>体験的な学習</u> や <u>基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習</u> を重視するとともに、 <u>児童(生徒)の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習</u> が促されるよう工夫すること。					
	国語科	社会・地理歴史・公民科	算数・数学科	理科	外国語活動、外国語科
小学校	言語活動	問題解決的な学習	算数的活動	問題解決の活動	外国語による体験的なコミュニケーション活動
中学校	学習過程の明確化	課題追究的な学習	数学的活動	科学的に探究する学習	外国語による4技能にわたるコミュニケーション活動
高等学校		課題探究的な学習		探究的な学習活動	

資料1-13 課題解決的な学習^{*1}の過程における具体的な姿の例と資質・能力

学習過程 ^{*2}	具体的な姿の例	基礎的・基本的な知識・技能	思考力・判断力・表現力等	主体的な学習態度
課題の把握 (課題を見だし、追究意欲を高める)	・ 自ら対象に働き掛けたり、試行錯誤したりして、情報を収集することができる。	○ ^{*3}		○
	・ 既存の知識や経験と照らし合わせたり、友達の考えと比較したりして、課題を見いだすことができる。		○	○
	・ 見いだした疑問や課題を整理・焦点化するなどし、明確にすることができる。		○	
	・ 目標を自覚したり、学習する意義を見いだしたりすることができる。			○
情報の収集 (見通しをもって必要な情報を収集する)	・ 課題に対する予想や仮説を立て、検証方法を考えることができる。	○	○	
	・ 「整理・分析」に必要な情報を主体的に粘り強く収集しようとすることができる。			○
	・ 課題解決に必要な知識・技能を習得したり活用したりすることができる。	○	○	
整理・分析 (収集した情報を整理、分析する)	・ 情報や結果を目的に応じて図や表、グラフなどに整理・分類し、傾向や共通点、差異点を捉えることができる。	○	○	
	・ 自分の予想や仮説を見直し、必要に応じて修正したり、再度確かめたりすることができる。		○	○
まとめ・表現 (課題に対する考えをもち、適切に表現する)	・ 調べて得た事柄を基にして、自分の考えをもつことができる。	○	○	
	・ 自分の考えが相手に伝わるように、話し言葉や書き言葉で的確に述べることができる。	○	○	
	・ 自己の学習状況を振り返り、学んだことの価値や自己の高まり、今後の努力点等に気付くことができる。			○
	・ 実生活や実社会等へ適用して説明することができる。	○	○	○

*1 「課題解決的な学習」という表現は、「問題解決的な学習」と同義として用いている。

*2 学習過程は、総合的な学習の時間における探究的な学習の過程を参考にした。

*3 各過程において、特に発揮されていると思われる資質・能力に○を付けた。

4 授業において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

(1) 課題設定の視点

前述した資質・能力を授業を通して育成するためには、児童生徒が主体的・協働的に課題解決に取り組む必要性を感じることができる課題の設定が重要である。そこで、主体的な学びを促すという側面からは資料1-14の**ア**に示すような課題を、協働的な学びを促すという側面からは**イ**に示すような課題の設定が必要であると考えられる。例えば、「知識・技能の活用を促す課題」は、既習の知識・技能を活用することによって、見通しをもって課題解決に取り組み、その過程を通して知識・技能を確かに習得することが期待できる。また、「情報を多面的に収集、検討する必要がある課題」は、複数の情報を比較・検討する中で根拠を明確にするなど、論理的、批判的な思考の発揮が期待できる。このように、児童生徒にもたらされる効果を明確にした上で、課題を設定することが大切である。

(2) 課題設定に当たって

前述のような課題を設定するためには、資料1-15に示すように単元の系統性やねらい、教材や題材の特性を十分に把握した上で、本単元で育成したい資質・能力を評価規準の設定を通して明確にする必要がある。その際は、児童生徒にとってその教材を学ぶ価値や楽しさは何か、また、どのようなつまづきが想定されるかを検討することが重要である。その上で、児童生徒が自ら課題を見いだす力を高めることができるよう、提示する事象や場面、課題発見のきっかけとなる活動の設定等を工夫する必要がある。また、学習を進める中で児童生徒が必然的にもつ問いを取り上げ、課題として焦点化することも考えられる（資料1-16）。いずれの場合も、全ての児童生徒が課題意識をもって主体的・協働的に学ぶことができる課題であるか、難易度も含めて十分に検討する必要がある。課題解決を通して、一人一人に深い理解を促すことのできる課題設定が求められる。

資料1-14 考えられる課題設定の視点

- ア 児童生徒が自分の事として受け止め、学習意欲を高めることができるような課題**
- (ア) 知識・技能の活用を促す課題（見通しをもった課題解決、知識・技能の確かな習得）
 - (イ) 実社会や実生活との関連について認識を深める課題（学習内容の価値の実感）
 - (ウ) 自分なりの考えを導き出す必要のある課題（自己決定、自己判断の必要性の実感）
- イ 児童生徒が学び合うことの意義を感じ、協働して解決する力を高めることができるような課題**
- (ア) 情報を多面的に収集、検討する必要がある課題（論理的、批判的な思考の発揮）
 - (イ) 考えを出し合い、グループの意見として集約する必要がある課題（協働する力、創造的に思考する力の発揮）

資料1-15 課題の設定例（概要）

例：小学校理科 第6学年「水溶液の性質」

単元の位置とねらい
5年「物の溶け方」→ **本単元** → 中1「水溶液」
水溶液の性質や働きについて考えをもつ。

教材の特性
・ 水溶液にはそれぞれ固有の性質があり、それらの性質を生活に利用している、など。

本単元で育成したい資質・能力（評価規準）

関心・意欲・態度	思考・表現	技能	知識・理解
興味・関心をもって追究する。	推論しながら追究し、表現する。	実験器具を適切に用いて調べる。	水溶液は酸性、中性、アルカリ性に分けられる。

教師による事象提示や場面設定 ※単元末に設定

〇〇先生からの挑戦状
ラベルのついていない試験管の中には、塩酸、石灰水、アンモニア水、ミョウバン水が入っています。この中で、ミョウバン水はどれか見分けますか。

※ミョウバン水は、未習の水溶液である。

児童が見いだした課題と、解決への見通し
正体不明の水溶液を見分けるには、どうすればよいのだろうか。

- ・ まず、ミョウバン水の性質を調べ、その結果を基にして見分けるといいのではないかな。

資料1-16 児童生徒の問いが連続、発展する展開の例

例：数学Ⅰ「三角比」、数学Ⅱ「三角関数」

直角三角形において、 $\sin 30^\circ$ について学習

生徒がもつ問い「 $\sin 120^\circ$ など、 90° 以上の角では $\sin$ の値はないのだろうか。」

課題
90° 以上180° 以下の角の $\sin$ をどのように定義したらよいか。

結論
半径 r の円周上の点 (x, y) をとり、 $\frac{y}{r}$ で $\sin$ を定義する。

生徒がもつ問い「 $\sin(-30^\circ)$ など、負の角では $\sin$ の値はないのだろうか。」

課題
負の角や180° よりも大きな角の $\sin$ をどのように定義したらよいか。

結論
角度に回転の向きと大きさを考えて $\sin$ を定義する。

5 児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 実践上の課題を踏まえた工夫の視点

当課が実施した実態調査では、主体的・協働的に学ぶ学習は大切だと考えるが取り組ませることができていない理由として、ア、イ時間確保の困難さや、ウ学力差への対応の難しさ、エ、キ学力向上への懸念、オ、カ学習活動に必要な能力や態度の不足等を挙げる教員が多く見られた（資料1-17）。また、言語活動等の充実に当たっては、確かな成果が認められてきた一方で、活動の形骸化や希薄な議論など質的な深まりを欠く授業に陥ってはならないことが中教審等において指摘されている。

そこで、このような課題を踏まえ、次の三点から工夫することを提案する。

- ① 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定

② 意図的、計画的な指導と評価の一体化

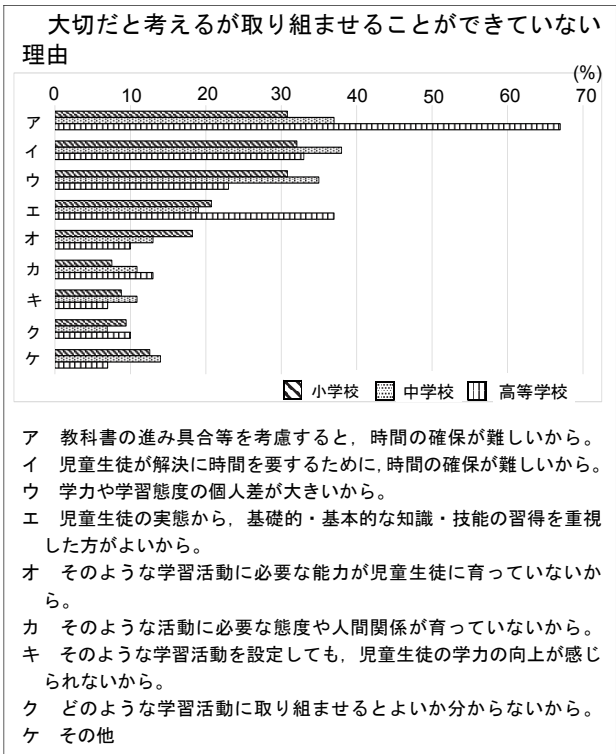
③ 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

(2) 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定

主体的・協働的に学ぶ学習を位置付けるに当たっては、言語活動の充実や、ペア又はグループ学習の推進、ICT及び外部人材の効果的な活用などが考えられるが、いずれの場合も単元や題材の目標を十分踏まえ、具体化を図る必要がある（資料1-18）。

そこで、授業においては、まず解決すべきことは何かといった目標を児童生徒に明確に捉えさせることが大切である。そして、何を手掛かりにどのように考え議論するのか、また、思考の過程や結果をどのように整理し表現させるのかを明確に捉えさせる必要がある。特に、グループで考えを集約させる場合は、個人にあらかじめ考えをもたせるとともに、どのような手順、方法で協議を進めるのかを明確にする必要がある。また、集団による学び合いが充実するためには、活動の意義や目的、ルールを共有させたり、相手意識のある話し方や聞き方を理解させたりしながら、実際の活動を通して互いに学び合い、高め合うことのできる人間関係を築いていくことが重要である（資料1-19）。

資料1-17 主体的・協働的に学ぶ学習の実践上の課題



資料1-18 言語活動の充実の視点と活動例

場面	視点	活動例
考えを深める場面	一人一人が自分の考えをもち、他者の考えとの共通点や相違点を意識しながら考えを深めていくような言語活動の充実	・ ペアやグループで意見を交換する。 ・ 付箋を用いて、考えを書き出したり整理したりしながら話し合う。 ・ ホワイトボードや模造紙を使って話し合う。
発表する場面	自分でまとめた事柄などについて説明したり、相手の立場や考えを互いに尊重して話し合ったりするような言語活動の充実	・ 調べたことや考えたことを説明する。 ・ 製作物を使って発表する（ポスターセッション）。 ・ 立場を決めて議論する。
書く場面	集めた情報を整理・分析し、論理的にまとめて表現するような言語活動の充実	・ レポートにまとめる。 ・ 新聞にまとめる。 ・ ICTを活用してまとめる。

※ 文部科学省「言語活動を通じた授業改善のイメージ例」を基に作成。

資料1-19 学習活動設定上の指導の要件と工夫例

指導の要件	工夫例
問題意識の焦点化	・ 図表等を用いた考えの可視化を通じた差異点、共通点の明確化
考える手掛かりや考え方の明確化	・ 手掛かりとなる情報（観察、実験や取材等の情報収集の結果、既習事項、教師が提供する資料等）の明確化 ・ 比較、関連付けを図る対象と着眼点の明確化
表現方法の明確化	・ ジグソー学習等による交流とまとめ ・ 図表を用いた考えの整理、集約
学び合う集団づくり	・ 学び合う意義や目的の共有 ・ 相手意識のある話し方や聞き方に関する理解の促進

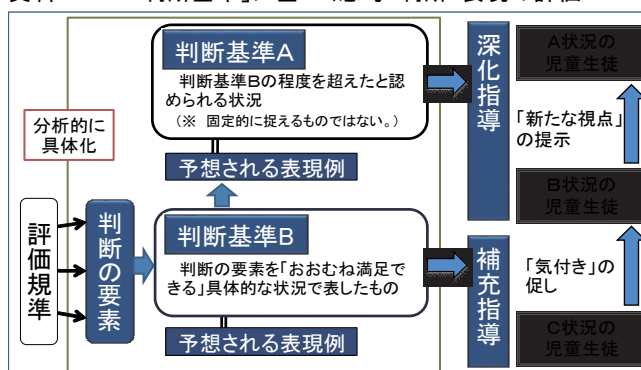
(3) 意図的、計画的な指導と評価の一体化

主体的・協働的に学ぶ学習の設定に当たっては、単元レベルで意図的・計画的に指導と評価の一体化を図ることが効果的である。そこで、単元の指導計画を立案する際に、目標を達成するためにはどの時間にどのような指導と評価を重点化するか検討する必要がある。そして、児童生徒が思考力・判断力・表現力等を発揮している様子を適切に評価し、指導に生かしたい。当センターではこれまで、児童生徒の思考や判断の結果が表現される「説明」や「論述」等の言語活動において、目標の達成状況を判断する具体的な尺度として、評価規準に基づいた「判断基準」の設定を提案してきた。主体的・協働的に学ぶ学習においても、思考・判断・表現の状況を的確に見取り、個に応じた補充指導や深化指導に生かすためには「判断基準」の設定が重要であると考えられる。その際、予想される表現例を「おおむね満足できる状況（B状況）」並びに「十分満足できる状況（A状況）」について想定することが、教材研究や授業中の指導と評価をより確かなものとするのである（資料1-20）。そこで、授業構想に当たっては、習得、活用を図る知識・技能を明確にした上で読み取りや解釈、説明などの思考・表現する活動を適切に位置付けたい（資料1-21）。

(4) 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

自らの見通しに基づいて課題解決に取り組むと、その妥当性を検討し、判断する必要性が生じる。また、他者と協働して取り組むと、相手の反応により自分の考えのよさや不十分さに気づきやすくなる。このように、主体的・協働的に学ぶ学習には、自己の学習状況について自覚を促す働きがあると考えられる。そこで、より効果的なものとするために、振り返りを促す活動や働き掛けを重視したい。その際、今の自分の状態を知るだけでなく、これから自分はどのようにしていけばよいかを考えさせ、よりよい方向に自分を変えていこうとする力が高まるよう支援したい（資料1-22）。

資料1-20 「判断基準」に基づく思考・判断・表現の評価



資料1-21 主体的・協働的に学ぶ学習を位置付けた授業構想

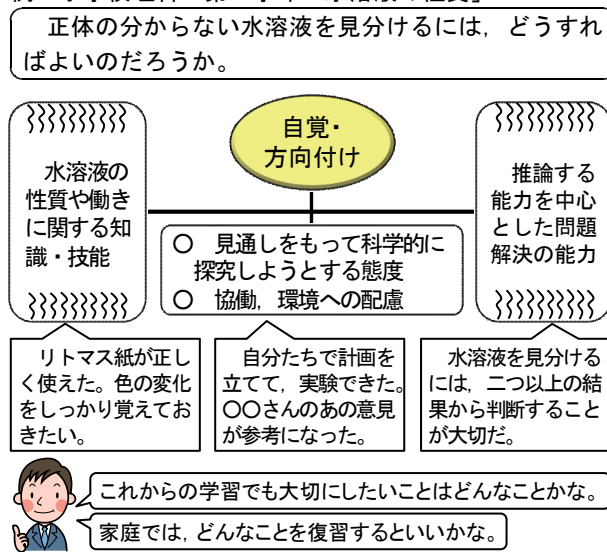
例：中学校社会科 第3学年「人権と共生社会」

課題解決のための主な学習活動の流れ		形態	主体的・協働的に学ぶ学習
導入 課題設定	「関心・意欲」の喚起 「憲法に社会権が規定されているのはなぜだろうか。」	一斉	読み取り 資料を基に生徒が設定。
展開 課題追究	「基礎的・基本的な知識」 ・社会権の種類 ① 生存権 ② 教育を受ける権利 ③ 勤労の権利 ④ 労働基本権 ・社会保障制度の充実	一斉・個	読み取り 教科書記述や憲法条文から生徒がリストアップ。
習得 活用	「資料活用の技能」 【資料】 ア 憲法第25条① イ 小学校入学の日の様子 ウ 生涯学習（料理教室）の様子、外	グループ	読み取り・解釈 資料から読み取った情報の意味を考察。
	「思考・表現」 資料を基に考え、説明する ・生存権等が定められている理由 ・社会保障制度の充実が必要な理由	グループ	解釈・説明 知識・技能を活用して説明し合う。
終末 課題解決	予想される生徒の表現例 「全ての社会権は、人々が人間らしく生きるために必要な権利であるから。」	個・一斉	説明 各自でまとめの案を作り全体へ説明。

このような表現に加えて、精神的、経済的に充実した生活の保障について言及している場合などは、A状況と判断できる。

資料1-22 育成したい資質・能力を踏まえた振り返りの視点

例：小学校理科 第6学年「水溶液の性質」



第2章 国語科における考え方と実践例

1 国語科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

国語科の目標において規定される資質・能力は資料2-1に示すように、①国語による表現力と理解力、②伝え合う力、③思考力や想像力及び言語感覚、④言語文化に対する関心、国語を尊重する態度の4点である。次期学習指導要領改訂に向けた中教審答申においては、国語科において育成を目指す資質・能力を「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の「三つの柱」に沿って整理を行っている。

この「三つの柱」は、学校教育法に規定される「学力の三要素」に基づくものである。「学力の三要素」及び「三つの柱」と現行学習指導要領の国語科の目標に規定される資質・能力との関連を踏まえ、国語科における課題を解決するために必要な資質・能力を資料2-2のように表すことができる。これは、児童生徒が、授業を通して身に付けていくイメージを自動車を例に模式的に表したものである。

国語科の学習は、「国語への関心・意欲・態度」をエンジンとして、「言語についての知識・理解・技能」と「話す・聞く能力、書く能力、読む能力」の両輪を働かせながら課題解決していくイメージで捉えることができる。

これらの資質・能力は、学習過程における課題解決の場で発揮される学習活動を通して相乗的に高まることが期待できる。

このような学習過程においては、児童生徒自らが課題解決の見通しをもったり、解決の結果や過程を振り返ったりして、自己の高まりや修正点を自覚することが重要である。このような自覚が、自己の学習の方向付けや価値付けを可能にする。まさに自動車のハンドルの役割を果たすのである。

また、資料2-3に示すように国語科は、実生活や各教科等の学習につながる具体的な言語活動を通して指導事項を身に付ける教科

資料2-1 国語科の目標

【小学校】

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

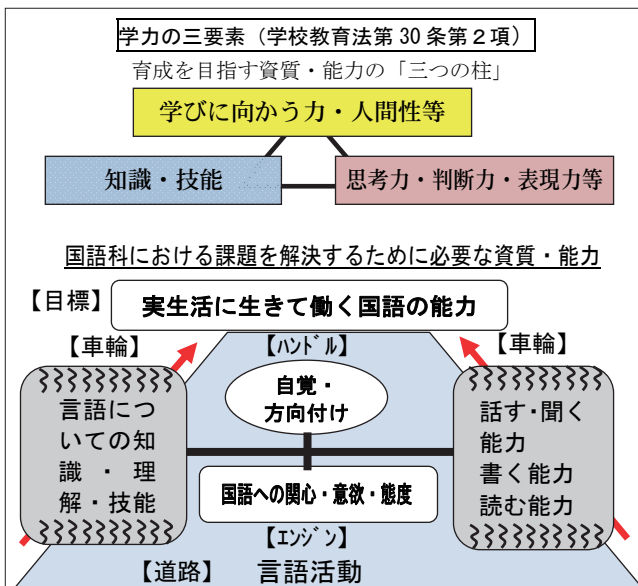
【中学校】

国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

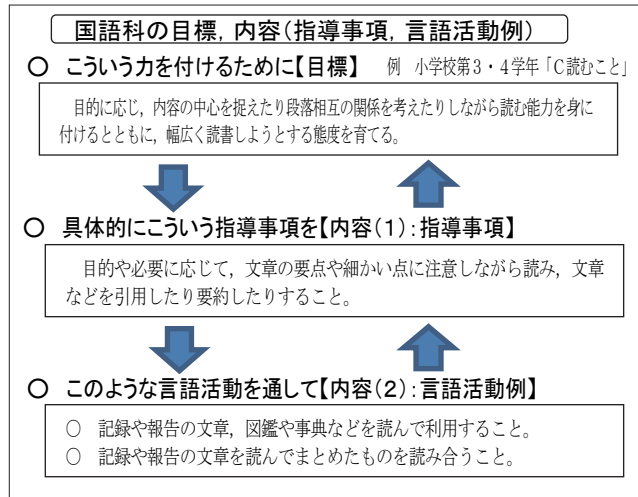
【高等学校】

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。
(※下線は筆者による。)

資料2-2 課題を解決するために必要な資質・能力



資料2-3 国語科の目標と内容の関連



である。このことから、課題を解決するために必要な資質・能力の育成に当たっては、児童生徒に課題解決的な言語活動を、主体的・協働的に展開させることが重要である。

このような課題解決的な学習を展開するに当たっては、資料 2-4 に示すように、どのような学習過程において、どのような資質・能力を重点的に育成するのかを明確にし、授業を展開したい。そのために、表出させたい児童生徒の姿を具体的に想定し、教師の働き掛けを具体化しておくことが重要である。

課題解決のそれぞれの過程において、児童生徒自らが、既習の「言語についての知識・理解・技能」や「話す・聞く、書く、読む能力」を発揮しながら課題を発見し、解決の見通しをもち、主体的・協働的に課題解決する中で、これらの能力は更に高まっていく。

そして、課題解決の過程の中で、児童生徒自らが自己の高まりや修正点を自覚することで、「国語への関心・意欲・態度」も、更に高まることが期待される。

資料 2-4 国語科における課題解決的な学習の過程における具体的な姿の例

過程	具体的な姿の例	言語についての知識・理解・技能	計・数・動・書・読能力	国語への関心・意欲・態度
課題の把握・追究の見通し	・ 目的意識や相手意識をもち、主体的に言語活動に取り組もうとしている。			◎
	・ 目的とする言語活動を実現するために、解決すべき課題を見いだすことができる。	○	◎	○
	・ 既習事項を基に、課題解決に必要な知識や技能を選択することができる。	◎	○	
課題の追究	・ 課題解決に必要な情報を的確に取り出し、統合することができる。	◎	○	
	・ 課題解決に必要な情報（非連続型テキストによる情報を含む。）を比較したり、関連付けたりしながら、自分なりの考えをもつことができる。	○	◎	○
	・ 自他の考えの共通点や相違点からものの見方・考え方を広げたり、深めたりすることができる。【協働的な学び】		◎	○
課題の解決	・ 調べたり、交流したりして学んだことを基に適切に解釈したり、表現したりすることができる。	○	○	◎
	・ 自分の学習状況を振り返り、学んだことの価値や自分の高まりに気付くことができる。	○		◎
	・ 学習したことを自分の言語生活に生かそうとしている。			◎

（ ◎ 主に育成される資質・能力 ○ 付随して育成される資質・能力 ）

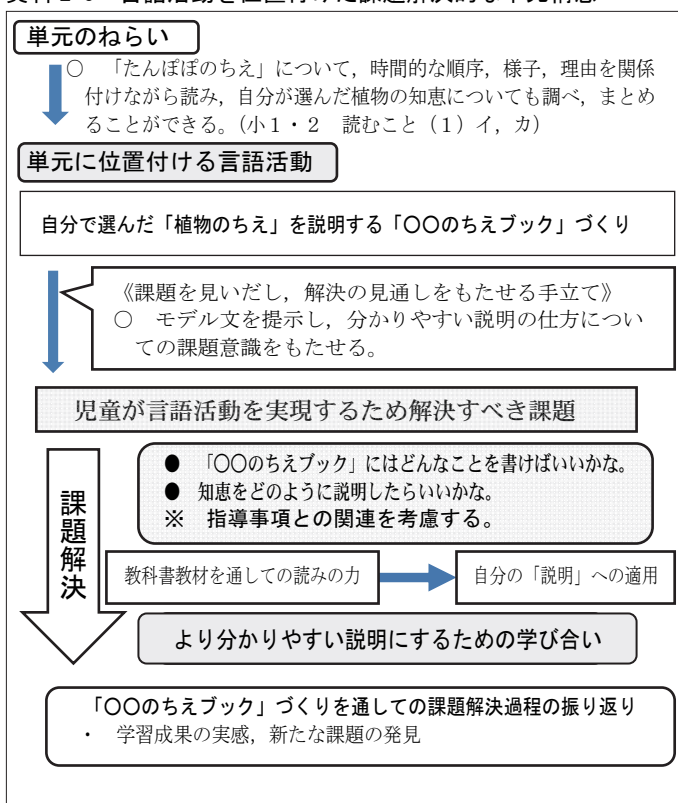
2 国語科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

言語活動を通して指導事項を指導するという国語科の特性を踏まえ、課題解決的な単元構想（資料 2-5）になるよう工夫したい。

そこで、国語科において取り組ませるべき課題を全体論（p. 7）の課題設定の視点を踏まえて設定することが大切である。児童生徒が主体的に言葉と関わりながら解決すべき課題を見いだしたり、よりよい解釈や表現を協働的に追究したりできるような課題を設定することが重要である。

このような課題を設定するために、重要なポイントになるのが、単元に位置付ける言語活動である。児童生徒が言語活動の実現に向け、主体的・協働的に課題解決していく学習過程を実現する言語活動の要件として、資料 2-6 の 3 点が挙げられる。

資料 2-5 言語活動を位置付けた課題解決的な単元構想



資料 2-6 主体的・協働的な学習過程を実現する言語活動の要件

- ① 課題解決に向けて主体的・協働的に学習に取り組む中で、当該単元のねらいを実現できる言語活動（指導事項との関連が図られた言語活動）
- ② 目的意識や相手意識が明確であり、児童生徒が既存の知識・技能を基に解決すべき課題を見だし、実現の見通しをもつことができる言語活動
- ③ よりよい表現や解釈の追究を目的とした、児童生徒が協働的に思考・判断・表現できる場を設定することができる言語活動

3 国語科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 工夫の視点

国語科では、様々な事物、経験、思い、考え等をどのように言葉で理解し、どのように言葉で表現するかという、言葉を通じた理解や表現を追究しながら自分の思いや考えを形成し深めることを重要な学びとしている。

このような学びを実現するためには、児童生徒自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、自分自身の言葉についての理解や考え方を振り返りながら解決すべき課題を見いださせたり、追究の見通しをもたせたりする場を工夫することが大切である。

課題追究においては、他者と知見や考えを伝え合ったり、議論したり協働したりすることで多面的・多角的な思考や表現を実現させる言語活動を行う学習場面を計画的に位置付けたい。

また、授業を通して身に付けた国語の能力を実感できるよう、自分の学びや変容に気付くなど、自覚化につながる振り返りの場を工夫することも効果的である。

(2) 「判断基準」の設定に基づく評価

授業においては、課題解決的な学習やペアやグループでの協働的な学習活動が形式的に展開されることのないよう留意したい。

国語科の授業においては、目的とする言語活動の実現を通して、どのような資質・能力（指導事項）を身に付けるのかを明確にしておかなければならない。そのためには、児童生徒の言語活動をどのように評価するのかを具体化しておく必要がある。そこで、当センターが提唱している「判断基準」の設定による指導と評価を授業づくりに活用したい。資料 2-7 に「判断基準」設定の具体例を示す。教師が、「判断基準」に基づく課題解決を実現した児童生徒の学習状況をあらかじめ想定することにより、的確な評価や個に応じた補充指導、深化指導を具体化することが可能になる。このような指導と評価の一体化を図ることが、国語科として身に付けさせたい資質・能力の育成につながるのである。

資料 2-7 「判断基準」設定の具体例

評価規準（「思考・判断・表現」）	
○ 読む能力 「たんぼのちえ」について、時間的な順序を表す言葉、様子、理由を関係付けながら内容の大体を読み、自分が選んだ「植物のちえ」について時間的な順序、様子、理由を関係付けながら説明している。（読むこと イ）	
思考、判断に基づく表現内容（評価の対象）	
○ 自分で選んだ「植物のちえ」を説明する「○○のちえブック」（ワークシート）	
判断の要素	
ア 時間的な順序 （時間的な順序を表す言葉）	
イ 様子と理由の因果関係 （様子や理由を表す言葉）	
判断基準B（おおむね満足できる状況）	
ア 時間を表す言葉を見付け、様子（～のです。）と理由（～からです。）を区別しながら、「たんぼのちえ」の内容の大体を読んでいる。 時間を表す言葉を「ちえブック」にまとめている。	
イ 「問い」と「答え」の関連を手掛かりにしながら「たんぼのちえ」の内容の大体を読んでいる。 植物が、ちえを働かせる様子と、その理由を「ちえブック」にまとめている。	
評価を生かした指導（C状況の児童に対して）	
○ 「たんぼのちえ」の構成を振り返らせ、時間的な順序で段落を並べ替えさせ、つなぎ言葉について助言しながら文章を書かせる。 ○ 様子、理由の関係を「問い」と「答え」の関係に着目するよう助言する。	

(3) 言葉による見方・考え方を働かせ、自覚・方向付けを促す学習指導の工夫

国語科の授業において、主体的・協働的な学習が、児童生徒にとって深まりのある学習になるためには、資料2-8に示すような児童生徒が既存の言葉による見方（言葉の意味、言葉の働き、使い方の理解など）・考え方（自己の考えを形成するための考え方・感じ方など）を働かせ、解決すべき課題を見いだしたり、解決の見通しをもったりすることが重要である。学習の見通しをもたせるためには、単に学習の進め方を確認させるだけでなく、これまでの学習（課題解決の過程）を振り返らせることにより、「自分は何ができるようになり、何が分からないのか、何を解決すべきなのか」を十分に認識させることを大切にしたい。学習の振り返りにおいても学習の結果のみを評価させるのではなく、「どのようにして自分の考えを形成できたのか」、「どのような言葉についての気づきから自分なりの考えや表現を成立できたのか」という学習の過程を振り返らせることにより、自分自身の学習の価値付けができるように工夫することが効果的である。

資料2-8 自覚・方向付けを促す学習指導の展開例 小学校第5学年「書くこと」

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け（※評価）
つかむ・見通す	1 前時を想起し、グラフを読む。 2 モデルのグラフと考察文を比べて読み、問題点がないか探す。 この考察文は正しいような気がするけれど・・・。	5	○ 前時の学習を想起させやすくするため、紙板書やノートの前時のまとめに注目させる。 ○ 本時の学習課題を焦点化させるために、教師自作のモデルを提示する。 ◎ 「このモデル文には問題点があります。このモデル文をよくするためにどうすればよいのかを考えて読みましょう。」
調べる・深める	3 学習課題を立てる。 どうすれば、自分の意見と理由にぴったりの根拠になるのだろうか。 4 モデルのグラフから読み取れること（事実）を書く。 5 自分の考え（考察）を書く（付箋）。 6 モデル文の問題点を話し合う。 グラフの表題は、「5月に読んだ本の冊数の推移」と書いてある。このグラフから「読書はなはだ起きていない」とは考えにくいなあ。	14	○ 児童が主体的に問題を解決できるようにさせるため、モデルと問題点を関連付けながら学習課題を立てるようにする。 ○ 前時の学習を生かしながらグラフを読み取らせるようにするため、読み取る視点を示しておくようにする。 ※ 事実とモデル文の書き手の考え（意見）の区別をさせるため、考察部分にサイドラインを引かせる。 ○ 考察文のどこに問題点があるのかを見付けさせるため、児童が用いたグラフから読み取ったこと（事実）と、考察部分（意見）を比べさせる。
まとめる・生かす	7 学習のまとめをする。 グラフから読み取ったことが自分の意見の裏付けとなっているか確認する。そのために、グラフ全体を見たり、一部を詳しく見たりする。 また、グラフから読み取ったこと知っていることをつなげて予想できることを書くことよい。	7	○ 効果的なグラフや表の用い方にも気付かせるために、同じ表やグラフであっても、「どの部分」を「どのように価値付ける」かにより伝わる内容が変わることも紹介する。また、理由付けを明確にするために、資料の用い方だけではなく、説明の際に使う言葉の使い方にも気付かせるようにする。
振り返る	8 自分の考察メモを見直す。 このグラフからは、長島町の商業に携わる人の一人当たりの年間商品販売額は増えていることが分かる。その一方で、商業事業所が減っているということが分かる。この二つのことから、くらしやすいとはいえないかもしれないなあ。他のグラフを使う必要はないかな。	14	※ 重点評価項目 主張とグラフから読み取れることを比べたり、関連付けたりしながら、整合性の取れた考察文の書き方を知り、自分自身の考察メモに生かすことができている。
	9 学習の振り返りをする。	5	◎ 「今後の学習で使ってみたいことや、覚えた語句、心に残った言葉などを使ってノートに書きましょう。書き方の例を参考に書いてもよいです。」

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- 資料からの正確な情報の読み取り
- 根拠となるデータと理論の展開の適切さ

前時までの学習（課題解決の過程）を振り返り、学習の見通しをもつ場

- グラフから情報を読み取るポイントや読み取ったことを説明する言葉の使い方を基に提示されたモデル文を読み、本時の学習課題を見いだす。

【具体的手立ての工夫】

- 学習計画表の提示
- 前時のワークシート
- モデル文の提示

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- グラフから読み取ったことが、考察（意見）の裏付けとなっているかについて協議しながら納得解を追求していく。

【具体的手立ての工夫】

- ワークシート
- ホワイトボードの活用
- 付箋の活用

「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- 修正した考察文
- 学習の価値付け（言葉掛け）

4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、小学校学習指導要領国語科第5学年及び第6学年の内容(C 読むこと)ウ「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨を捉えたり、事実と感想、意見などの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」を受け、絵と文章とを対照しながら読み、筆者のものの見方を捉えた上で、自分のものの見方をまとめていくことをねらいとしたものである。

教材「『鳥獣戯画』を読む」は、「鳥獣人物戯画」の一場面について述べた説明的な文章である。本単元では、筆者が何に注目し、どのように評価しているか、自分の考えをどのように述べているかについて読み取らせ、解説文を書く言語活動を通して自分のものの見方を広げていく学習を展開する。これらの学習を主体的・協働的に取り組ませることで、課題を解決するために必要な資質や能力の育成につなげていくことを意図した実践である。

(2) 研究の実際（第6学年 単元名「筆者のものの見方をとらえ、自分の考えをまとめよう」）

ア 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
絵や絵巻物に対する筆者の見解に興味をもち、文章を読もうとしている。	- 筆者がどのようなことを根拠として考えを述べているかを捉えている。 - 筆者の意図と表現の工夫との関連について考えている。 - 自分と他者とのものの見方や感じ方の共通点と相違点を明らかにし、自分の考えを深めている。	文末表現や助詞の使い方など、語句に着目して読み、語句と語句との関係を理解している。

イ 単元の指導計画（全6時間）

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け
課題の把握・追及の見直し	1 題名を知り、絵を「読む」とはどういうことか考える。 2 筆者を知り、教材文の前文を読み、筆者の絵の見方や感じ方を読み取る。 3 学習課題を設定し、学習計画を話し合う。 『鳥獣戯画』の見どころを探ろう。	1	- 教材文の「読む」の意味を考えさせたり、筆者の経歴等を紹介することで、教材文に興味をもたせる。 - 隣県で開催されている「鳥獣戯画展」のパンフレットを見せ、単元のゴールイメージをもたせ、学習課題を設定させる。また、リード文から読みの目的をもった学習計画を立てさせる。 《単元に位置付ける言語活動の設定》 『鳥獣戯画』の一場面の解説文を書く
課題の追及	4 筆者が、絵や絵巻物について、どんな感じ方や評価をしているか、絵と文章を照らし合わせながら読み取り、自分の考えや感想をまとめる。 5 筆者の『鳥獣戯画』に対する思いをまとめる。 6 筆者が主張を捉え、考えを効果的に伝えるための表現や構成の工夫について考える。	3	「どの部分の」、「何に着目して」、「どのような言葉で評価しているか」という観点で絵と文章を対応させてまとめさせる。 また、自分の考えをまとめる際も、同じ観点で書き、グループで交流させる。 「『鳥獣戯画』は、（ ）なのである。」の一文にまとめるため、グループで（ ）に当てはまる言葉を文章中から考え、発表する。 - 学習経験から表現の工夫について、想起させ「書きだしの工夫」、「文末の工夫」、「語りかけ」を見付けさせる。また、この教材文独特の「絵の出し方」、「漫画、アニメとの比較」についても気付かせ、その効果を考えさせる。
課題の解決	7 『鳥獣戯画』の三匹の応援蛙を読み、解説文を書く。【本時】 8 グループで解説文を作成し、発表したり感想を伝え合ったりする。	2	- 今までの読み取りの観点や気を付けてきた内容を想起し、自分のものの見方・感じ方を解説文で表現させる。 - まとめたものをグループで助言し合わせ、自分の伝えたいことを確認させる。 - 前時で作成した解説文を基にグループで解説文を作成し、互いに鑑賞させる。同じ絵を解説した文章や違う絵を解説した文章を読み合い、それぞれの感じ方や考え方に違いがあることに気付かせたり、自分の考えの深まりや広がりを実感させたりする。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫

8 本時の実際 (5/6)			
(1) 目標 『鳥獣戯画』の絵(「三匹の応えん蛙」)について、 <u>筆者のものの見方や感じ方を生かして絵を読み、自分の考えをまとめることができる。</u>			
(2) 主体的・協働的に学ぶ工夫 ・『鳥獣戯画』の中で筆者が触れていない絵の部分に焦点を当てることで、筆者を意識させながら「自分だったら」という意欲をもたせ、課題解決を図らせる。 ・解説書をグループで読み合うことで、自分とは違う観点で絵を分析したり評価したりしていることに気付かせ、深めたり広げたりさせる。 ・筆者の文章と比較させたり、友達の文章を読んだことを中心に学習を振り返らせたりすることで、本時の学びの自覚化を図り、学びの深まりを実感させる。			
(3) 展開			
時	学 習 活 動	時 間 配 分	指 導 上 の 留 意 点
つかむ	1 前時までの学習を想起する。 2 学習課題を立てる 「三匹の応えん蛙」のすばらしさはどこだろう。	3 (全)	・前時まで読み取ってきた筆者のものの見方や感じ方を想起する中で、「すばらしい」とだけ述べていた「三匹の応えん蛙」に着目し、課題を設定する。
見通す	3 学習の進め方を確認する。 ・学習内容を確認する。 ・課題を解決するための方法を確認する。	7 (全)	・すばらしさを伝えるための、解説文を書くことを意識させ、解説文に必要なことを教材文から確認させる。
調べ	4 『鳥獣戯画』三匹の応えん蛙」を解説する文章を書く。 ・絵の中で着目する部分を決める。 ・絵と文章を対応させながら、評価の言葉を入れて解説する文章を書く。	15 (個)	・絵の中で着目する部分に印を付けさせ、絵と対応した文章を書かせる。 ・「全体の説明」→「着目点」→「解説」→「自分の考え(評価)」の構成で記述させる。 ・活動が停滞している児童には、筆者の書き方をヒントとした助言を行う。
深める	5 グループで作成した解説文を発表する。 ・絵と文を対応させながら友達の解説文を読む。 ・自分の解説文に加除修正を加える。	13 (グ)	・友達の考えや書きぶりを自由に質問できる雰囲気作りを行う。 ・友達の解説書と自分の解説書と比較して気付いたことを基に、自分の解説文を加除修正する。
ふり返る	6 学習のまとめを行う。 ・着目した点をはっきりさせる。評価の言葉を使うことで絵のよさを伝えられる。 ・表現を工夫すると楽しく分かりやすく伝えられる。 7 学習の振り返りを行う。 ・教材文と自分の文章を比較する。 ・協働学習を通し、自分の考えの深まりや広がりを振り返らせる。	7 (全) (個)	・「よさを伝えられる」、「分かりやすく伝えられる」という言葉をキーワードにまとめを行う。 ・再度、筆者の教材文と比較させることで、自分の解説文への評価を行わせる。 ・グループでの交流を通した自分の考えの深まりや文章の高まりを自覚化させる振り返りを行わせる。
判断基準			
ア 「三匹の応えん蛙」のどの部分に着目して分析したのか書いている。			
イ 取り上げた部分について、絵と文が対応して解説されている。			
ウ 自分の見方や感じ方が、評価の言葉で書かれている。			
【予想される児童の表現例】 この絵は、蛙ががえを投げ飛ばしたシーンである。周りで笑っている三匹の蛙の格好 図に注目してほしい。 三匹とも大笑いである。指を指して笑っている蛙。尻もちをついて笑っている蛙。地面に手をついて笑っている蛙もいる。それぞれの笑い方の格好がちがうのである。えが蛙に投げ飛ばされたのが、おもしろかったのだろうか。それとも、投げ飛ばした蛙のポーズがおもしろかったのだろうか。とにかく、大笑いしている様子が伝わってきて、笑い声まで聞こえてきそうだ。図様々な笑い方を表現することによって、この絵を見る方も思わず笑顔になってしまう楽しい絵だ。図			

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- ・絵に対する着眼点
- ・絵と文章の対応
- ・評価と根拠の整合
- ・評価の内容と表現の工夫

【主体的・協働的に学ぶ学習の工夫】

前時までの学習(課題解決の過程)を振り返り、学習の見通しをもつ場

- ・前時までに学習した筆者の解説文の書きぶりを振り返り、「どの部分の」、「何に着目し」、「どのような言葉で評価しているか」の観点で解説するという学習の見通しをもたせる。

【具体的手立ての工夫】

- ・学習計画表の提示
- ・前時のワークシート
- ・モデル文の提示

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- ・絵の着眼点、絵と文章の対応、評価の言葉について相互に評価し合い、友達の評価を自分の解説文に反映させる。

【具体的手立ての工夫】

- ・ワークシート
- ・付箋の活用(レビューカード)

「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- ・修正した解説文
- ・学習の価値付け(言葉掛け)

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

(ア) 前時までの学習過程を振り返りながら、解説文を書くための視点や手順についての見通しを明確にしたことで、主体的な学習への取組が見られた。

(イ) 本時の評価規準に基づく「判断基準」の設定により、期待する児童の表現例をあらかじめ想定したことで、学習が停滞している児童やグループでの意見交流が停滞しがちな児童に具体的な指導(助言や資料提示など)ができた。

イ 今後の課題

評価の言葉について吟味できるようなグループでの協働的な学習を充実させることにより、新たな言葉への気付きや表現の深まりを期待できるような更なる課題設定の工夫が必要である。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、中学校学習指導要領国語科第3学年の内容(C読むこと)ア「文脈の中における語句の効果的な使い方など、表現上の工夫に注意して読むこと。」を受け、和歌に詠まれた背景を想像しながら、情景や心情を読み取ることをねらいとしたものである。

教材「和歌の世界―万葉集・古今和歌集・新古今和歌集」は、優れた和歌を取り扱っている教材である。それぞれの和歌には、どのような思いがどのように詠まれているのか読み取り、歌物語を創作する言語活動を通して自分のものの見方や考え方を広げさせていく。これらの学習を主体的・協働的に取り組ませることで、課題を解決するために必要な資質や能力の育成につなげることを意図した実践である。

(2) 研究の実際（第3学年 単元名「古典に学ぶ―作品の情景や心情を読み取る―」）

ア 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
作品の情景や心情を考えながら、自分なりの歌物語を創作しようとしている。	- 和歌に詠まれた背景を想像しながら情景や心情を読み取っている。 - 和歌の形式や表現の特徴を捉え、その効果を自分の考えに生かしている。	歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しんでいる。

イ 単元の指導計画（全5時間）

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け
課題の把握・追究の見通し	1 和歌の意識を基に、和歌の背景や心情について考える。 2 単元に位置付ける言語活動について理解する。	1	- 和歌が現在の私たちにとっても身近な心情を基に詠まれていることに気付かせ、学習意欲をもたせる。 「つぶやき」として提示された和歌の意識を基に、その「つぶやき」を漏らした人物の人物像や置かれている状況、心情を想像させる。 《単元に位置付ける言語活動の設定》
	和歌の「歌物語」を創作しよう。		和歌の情景や心情を踏まえた歌物語を書く
課題の追究	3 和歌の歴史的背景や形式・表現の特徴を捉える。	1	- 万葉集・古今和歌集・新古今和歌集それぞれの歴史的背景や特徴についてまとめさせる。 - 和歌の形式・表現の特徴などをまとめさせる。
	4 共通の和歌で、歌物語を書いて交流する。【本時】	1	- 共通課題「君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」を通して、歌物語の書き方について理解させる。 - 人物・時・場所や出来事・気持ちなどを想像させ、構成メモに整理させる。 - 構成メモを基に歌物語を創作させる。 - 創作した歌物語を相互に交流させる。
	5 和歌に詠まれた情景を捉え、心情を考える。	1	第2時で捉えた歴史的背景や特徴、和歌の形式・表現の特徴などを基に、共通課題の和歌に詠まれた情景や心情を捉えさせる。
課題の解決	6 選択した和歌で歌物語を書いて交流する。	1	5首の和歌を提示し、課題を選択させる。 - 第3時の活動を振り返り、歌物語の書き方を確認する。 - 歌物語の交流を通して、お互いのよいところを伝えさせる。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫

授業の実践（3／5）

(1) 本時の目標

「君待つと吾が恋ひをれば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く」について、和歌に詠まれた背景を想像しながら情景や心情を読み取り、歌物語を作成することができる。

(2) 指導に当たって

和歌に詠まれた情景や心情を読み取るために、叙述を基に人物・時・場所や出来事・気持ちなどを想像させたい。そして、個人で考えた歌物語を、相互に鑑賞し、気が付いた点をアドバイスし、良い点を認め伝え合うようにする。

(3) 展開

表題	主な学習活動	時間	指導上の留意点
導入	1 百人一首をする。	10 (全)	- 百人一首のうち 20 首を用い、歴史的仮名遣いや、和歌のリズムに慣れさせる。 - 前時の学習を振り返り、歌集の歴史的背景や特徴、和歌の形式・表現の特徴等について確認する。 - 学習課題を設定し、本時の学習の流れについて確認する。
	2 前時を想起する。		
	3 学習課題を立てる。		
和歌の背景を想像して歌物語を作り、交流しよう。			
展開	4 共通題材を基に、歌物語の書き方を学習する。	15 (個) (全)	- 個人で、歌物語の構成メモを作成させる。 - 全体で、校正メモの内容について確認する。 - 歌物語の書き方について説明する。
	5 歌物語を作成する。	5 (個)	
	6 作成した歌物語をもとに相互に交流する。	15 (グ)	
終末	7 本時のまとめを行う。	5 (全)	相手の文章に対するアドバイスを通して、自分が作成した文章の良い点、足りない点の気づきを白覚化させる振り返りを行わせる。
判断基準			
ア 作者の心情や情景を物語として簡潔に表現できている。			
イ 解釈した内容を歌物語の形で適切な語句を使って表現している。			
【予想される生徒の表現例】			
「あの方は私のところにきてくださらないのだろうか。」			
そんな風に思っていると、視線を落としていた私の目の端ですだれが動いた。顔を上げたけれど目の前には、秋の風によってかすかに揺れているすだれがあるだけ。今日も訪れることのないあの人を待っている。			

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- ・ 語句の解釈
- ・ 背景の想像
- ・ 情景や心情の読み取り
- ・ 和歌の表現形式

【主体的・協働的に学ぶ学習の工夫】

前時までの学習（課題解決の過程）を振り返り、学習の見通しをもつ場

- ・ 歴史的背景や和歌の形式・表現の特徴を振り返り、本時の学習への見通しをもたせる。

【具体的手立ての工夫】

- ・ 学習計画表の提示
- ・ 前時のワークシート

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- ・ 作成した歌物語を相互に鑑賞し合い、気が付いた点を伝えたり、良い点を認め合ったりする。

【具体的手立ての工夫】

- ・ ワークシート
- ・ 付箋の活用

「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- ・ 生徒の発言
- ・ 加筆・修正したワークシート
- ・ 学習の価値付け（言葉掛け）

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- 導入の工夫により、和歌への関心をもち、積極的に学習に取り組む生徒の姿が見られた。
- 前時までの学習を振り返り、歌物語を書くための視点や手順についての見通しを明確にしたことで、主体的な学習への取組が見られた。
- 本時の評価規準に基づく「判断基準」の設定により、学習が停滞している生徒や相互での意見交流が停滞しがちな生徒に具体的な指導（助言）ができた。
- 協働的に学ぶために、生徒が相互に関わり合う場面を設定することで学習意欲の高まり、教え合いによる学習内容理解の深まり、自分とは違った視点の気づきが見られた。

イ 今後の課題

評価の内容や協働的な学びの中で学習した内容について、個々が再確認する過程を十分に確保するために課題設定を工夫する必要がある。

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、高等学校学習指導要領国語科現代文Bの内容（読むこと）イ「文章を読んで、書き手の意図や、人物、情景、心情の描写などを的確に捉え、表現を味わうこと」、ウ「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて自分の考えを深めたり発展させたりすること。」及び、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕オ「語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色を捉え、自分の表現や推敲に役立てること。」を受け、連句の創作を通して、句に込められた心情や情景などを的確に捉えてものの見方を豊かにし、自分自身の思いを表現することをねらいとしたものである。本単元では、生徒が級友たちと相互に句を詠み合うことを通して、句に込められた心情や情景などを的確に捉え、言語文化に対する理解を深めるとともに、自分のものの見方、感じ方、考え方を豊かにさせることをねらいとした学習活動を展開した。これらの学習に主体的・協働的に取り組ませることで、課題を解決するために必要な資質や能力の育成につなげることを意図した実践である。

(2) 研究の実際（第3学年 単元名「連句を楽しむ」）

ア 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解
級友の詠んだ句を鑑賞し、句に込められた心情などを理解するとともに、自らの人生について考えようとしている。	① 言葉や表現技法、展開に注目し、句に込められた思いを正しく理解し、表現を味わっている。 ② 主題を押さえながら連句を味わい、自分のものの見方を深めている。	連句の特色を捉えた上で、表現の仕方を工夫して自らの思いを表現している。

イ 単元の指導計画（全7時間）

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働き掛け
課題の把握・追究の見直し	・ 短歌や俳句に向き合う姿勢を養わせる。 連句を詠み味わおう	1	・ 指導者が詠んだ短歌や俳句を鑑賞させた上で、実際にどのような思いをどのように表現したものか解説する。
課題の追究	・ ワークシートを用いながら、自分自身の思いを短歌の形式で表現する。 ・ 意見交換を行う。	1	・ 韻文に対する苦手意識を払拭させるべく、まず二百字程度の散文を書くことから取りませ、表現したい感動の中心を整理し、よりよく伝えるための表現について考えさせる。 ・ 話し合う際の視点を提示し、それぞれが詠んだ句について、ペアで話し合わせる。
	・ 班分けを行い、連句を作成する。	3	・ 前の句の内容を的確に把握させる。 ・ 生徒が詠んだ句について、その感性を生かしつつ、教師による助言を行う。 ・ 図書室を活用し、創作活動にふさわしい環境を保つ。
	・ グループ学習形式で連句を解釈し、意見交換を行う。（本時）	1	・ 語句の意味や修辞を意識させながら句に込められた心情や情景などを的確に捉えさせ、ものの見方を豊かにさせる。
課題の解決	・ 本単元を振り返る。	1	・ 単元全体を振り返り、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことについて、八百字程度の文章にまとめさせる。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫

7 本時の実際（6／7）

(1) 目標

句に込められた心情や情景などを的確に捉えてものの見方を豊かにする。

(2) 主体的・協働的に学ぶ工夫

- 自分達の班で詠んだ連句が、それぞれどのような思いで詠まれたものであるかについて、役割を決めて他のグループに説明させる。

(3) 展開

過程	主な学習活動	教師の具体的な働きかけ
導入 3分	本日の学習内容について確認する。 自分達の班で詠んだ連句を、他の班の級友たちに伝え合おう。	前時までの班活動で自分たちの班が詠んだ連句について、各自が他の班に説明することを意識させる。
展開 44分	- 前時までの各班から一人ずつ集まって班を作り、自分たちの班の句の解釈を説明する。 - 他の班から聞いた説明を前時までの班に持ち帰り、共有及び意見交換を行う。	- 話し合いの時間を指示して、句の解釈を説明させる。 - 表現に注目させながら、各句の主題を捉えさせる。 - 他の班から聞いたことを自分たちの班で伝える際のポイントを示し、話し合いの中で話題になったことや、級友たちが関心をもったことや、どのように句を詠んだのか理解させる。 - 連句全体を俯瞰的に味わうことによって、ものの見方を深めさせる。
まとめ 3分	本時の学習内容を振り返りつつ、次時の予告を行う。	本単元で学習した内容について振り返り、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことを想起させる。

本時の学習で働かせるべき言葉による見方・考え方

- 和歌の修辞法とそこに込められた心情について
- 連句の形式と主題について

【主体的・協働的に学ぶ学習の工夫】

前時までの学習（課題解決の過程）を振り返り、本時の学習の見通しをもつ場

- 前時までに班で詠んだ連句の解釈について他の班の級友たちに説明するという本時の活動を確認する。

【具体的手立ての工夫】

- 前時までの学習内容を想起させ、本単元のねらいを説明し、共通理解する。

言葉による見方・考え方を働かせた協働的な課題解決の場

- 各班から集まって六つの班を編成し、自分たちが詠んだ連句の主題や表現技法に込めた思いについて説明し、質疑応答を行う。その後、各班に持ち帰り、共有する。

【具体的手立ての工夫】

- 表現に着目して説明することや、説明時間の細かな指示を行う。

学習の過程の振り返りによる自己の変容の実感

【具体的手立ての工夫】

- 教師によるまとめ

エ 「判断基準」による思考・判断・表現の的確な見取り

本単元の7時間目に、一連の学習活動を振り返らせ、班における連句作成のことだけではなく、各班の作品を連句として味わいながら、連句作成や鑑賞を通して感じたことや考えたことについて800字以内の文章にまとめさせた。評価に当たっては、読む能力の評価規準から、「ア 連句に詠まれた心情を効果的に伝える表現技法について記述している。」、「イ 句を作成することについて自らの言葉で表現している。」、「ウ 連句を通しての自身のものの見方や考え方の変容について記述している。」という「判断基準」を設定して行った。

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 現代でも身近な教材を工夫することで、生徒が自分に関わるものと捉えて主体的に取り組む様子が見られた。
- (イ) 自身の考えをまとめ、グループで交流して発表する学習を通して、各自の思いを伝え合うことの喜びや楽しさを味わわせることができた。

イ 今後の課題

交流の場面において、全員に説明させる時間を確保するために、教師主導になり十分な意見交換ができなかった部分があった。効果的な交流のさせ方について工夫が必要である。

第3章 社会・地理歴史・公民科における考え方と実践例

1 社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

(1) 教育基本法等に見る資質に関する目標から

我が国の教育は、教育基本法を頂点とした法体系の下で行われる。教育基本法第1条には「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」が明記されている。この条文は、社会・地理歴史・公民科の目標にも示されているものであり、その意味で社会・地理歴史・公民科教育は、教育基本法が示す教育の理念に直接的に迫る崇高な使命をもっていると言える(資料3-1)。

このことから、社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要とされる資質とは、教育基本法及び学習指導要領に示された「公民的資質」であると捉えることができる。

(2) 学習指導要領解説に見る能力に関する目標から

「公民的資質」を養うためには、社会・地理歴史・公民科において、どのような能力が必要であろうか。

『小学校学習指導要領解説社会編』には、社会科の能力に関する目標が資料3-2のように示されており、「社会的事象の意味について考える力」、「調べたことや考えたことを表現する力」など、「社会的な思考・判断・表現」をする力の育成が求められている。これらの能力は、中学校社会科、高等学校地理歴史・公民科においても同様に求められている。

社会・地理歴史・公民科において課題を解決するために必要な能力とは、評価の観点で示されている「社会的事象への関心・意欲・態度」、「社会的事象についての知識・理解」、「資料活用の技能」、「社会的な思考・判断・表現」の4能力を統合したものであると捉えることができる。

したがって、授業においては、知識や資料活用の技能を習得させるとともに、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力をバランスよく育成する必要がある(資料2-3)。

資料3-1 「教育基本法」と「社会・地理歴史・公民科の教科目標」の関連

【教育基本法（第1章 教育の目的及び理念）】

第1条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

【学習指導要領（小学校 社会科）】

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

【学習指導要領（中学校 社会科）】

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

【学習指導要領（高等学校 地理歴史科）】

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

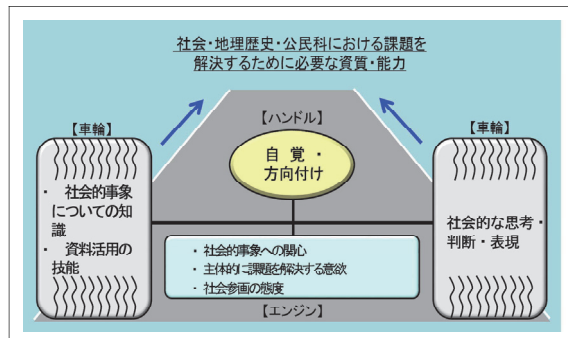
【学習指導要領（高等学校 公民科）】

広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。 (※ 下線は

資料3-2 社会科の能力に関する目標

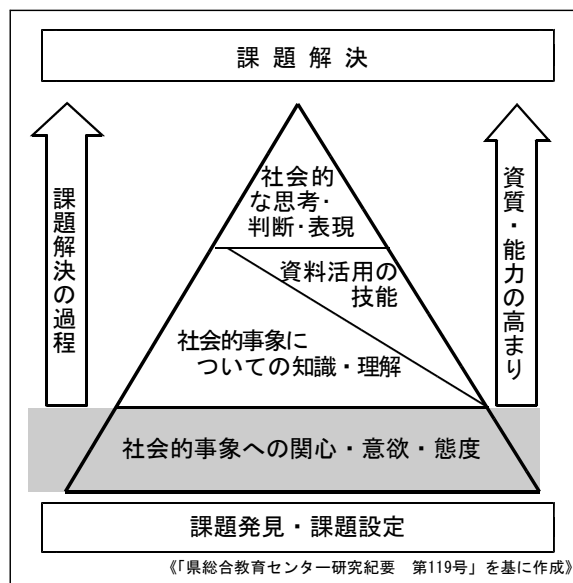
- 第3学年及び第4学年
地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。
- 第5学年
社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。
- 第6学年
社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

資料3-3 課題を解決するために必要な資質・能力



なお、社会・地理歴史・公民科における課題解決に必要な資質・能力は、児童生徒が課題解決の状況を自覚しながら高めていくイメージでも表すことができる（資料3-4）。まず、課題発見・課題設定によって、社会的事象への関心・意欲を高める。次に、課題追究に必要な知識を習得し、社会的事象に関する事実について各種の資料を基に読み取ったり、社会的事象のもつ特色や意味、意義について解釈したりする。そして、これらを活用して思考・判断・表現することで課題解決を図る。本研究は、このような学習の過程で児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習を通して、課題解決に必要な資質・能力の育成を目指している。

資料3-4 課題解決の過程における資質・能力の高まりのイメージ



2 社会・地理歴史・公民科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

社会認識の深まりの度合いは、資料3-5に示すように学習課題の問い方によって変わるため、社会認識形成の段階に応じて設定すべきである。

まず、「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何を」といった問い方は、社会的事象についての事実を知識として直接的に導くものである。

次の段階の「どのように」という問い方は、社会的事象の一般的な傾向や法則性について考察させるものであり、「なぜ」という問い方は社会的事象間の因果関係や事象の理由などについて考察させるものである。

さらに、「どうすべきか」という問い方は、社会的事象について学んだことを活用して、より深く考察させ、判断を求めるものである。

資料3-6に、中学校地理的分野「日本の過疎・過密問題」における学習課題例を示す。資料中に見えろどの学習課題例でも、課題解決的な学習を展開することが可能であるが、【学習課題例1】は、社会的事象についての事実を知ることにとどまる課題であり、【学習課題例2】は、社会的事象の一般的な傾向や法則性を考察させる課題である。

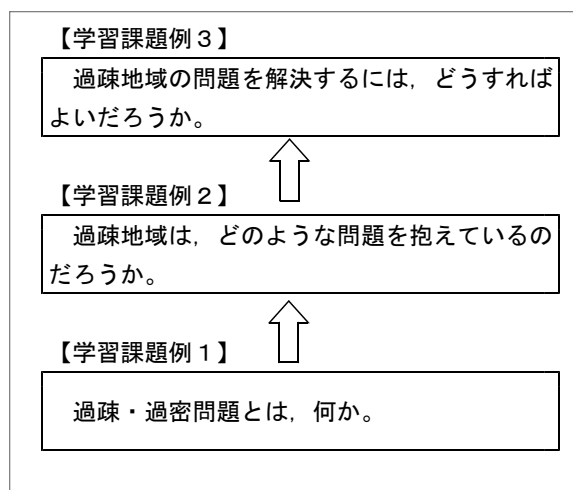
これらに対し、【学習課題例3】は、社会的事象について、私たちが今後どうすればよいかということの判断を迫り、主体的・協働的に学ぶ必要性のある課題となっている。

資料3-5 社会認識形成の段階に応じた学習課題

学習課題の問い方	社会認識形成の段階	社会認識の深まり
・ どうすべきか	・ 学んだことを活用して社会的事象について判断できる。	社会的事象について、より深く理解（認識）する。
・ なぜ	・ 社会的事象間の因果関係等について考察できる。	↑
・ どのように	・ 社会的事象の一般的な傾向や法則性について考察できる。	
・ 何を ・ 誰が ・ どこで ・ いつ	・ 身近な社会的事象についての事実を知る。	社会的事象について、事実を知る（認識する）。

《県総合教育センター指導資料 社会 第112号を基に作成》

資料3-6 中学校地理的分野「日本の過疎・過密問題」における学習課題の設定例



3 社会・地理歴史・公民科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 工夫の視点

社会・地理歴史・公民科においては、これまでも課題解決的な学習を行う中で、児童生徒が主体的・協働的に学ぶための工夫を大切にしてきた。そのことは、言語活動の充実を図る上でも同様であった。しかし、課題解決的な学習の型だけを重視するあまり、学習課題や学習活動が形骸化した授業も散見された。

前述のように児童生徒が、課題解決に必要な資質・能力を身に付けるためには、課題解決的な学習の中で、習得した知識・技能を活用して思考・判断・表現することが大切である。児童生徒が、主体的・協働的に学ぶ学習を行う中で、「活動あって学びなし」とならないようにするためにも、資料3-7に示すように習得と活用の過程を板書上でも構造的に位置付けることで、児童生徒の深い理解につなげていく工夫が必要である。

(2) 「判断基準」を設定した指導と評価の一体化

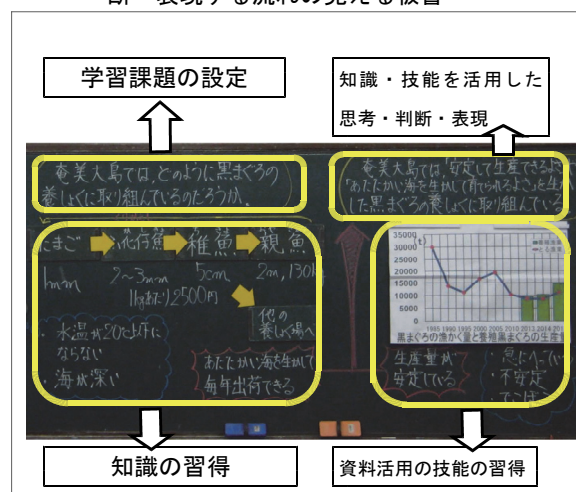
「判断基準」とは、「児童生徒の思考や判断の結果が表現される『説明』や『論述』等において、目標の達成状況を判断する具体的な尺度」のことである（資料3-8）。

資料3-9は、「判断基準」を設定して行った授業実践例である。これは、解決すべき課題や、課題を解決するために必要な知識・技能を明らかにし、習得した知識・技能を活用してどのように課題を解決させるかを計画したものである。

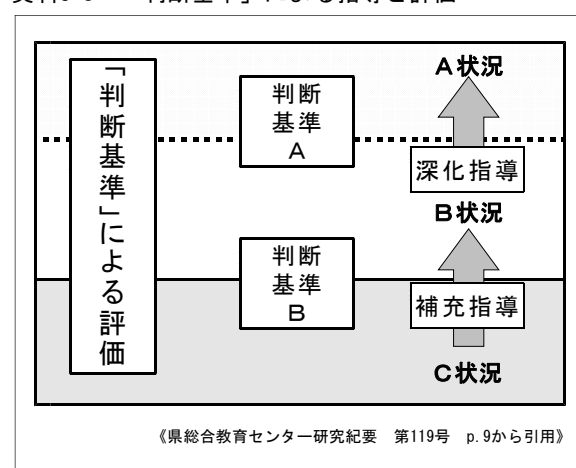
この授業では、様々な資料を基に「ごみ」に関する知識を習得させ、主体的・協働的に課題を解決させることを意図しているため、児童の表現例の中に、「ごみ処理の計画的な取組」、「ごみ減量のための行政、企業の協力」が表現されていれば、おおむね満足できる状況（B状況）であると判断する。この判断の尺度が判断基準Bであり、資料3-9では、吹き出しの部分に示している。

このように「判断基準」を設定した指導と評価は、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習に対しても効果的に用いることができると考える。

資料3-7 習得した知識・技能を活用して思考・判断・表現する流れの見える板書



資料3-8 「判断基準」による指導と評価



《県総合教育センター研究紀要 第119号 p.9から引用》

資料3-9 「判断基準」を設定して行った授業実践例（小学校第4学年「ごみのしりと利用」）

過程	課題解決的な学習における習得と活用	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 鹿児島市のごみを減らすには、どのようなことが必要だろうか。	
展開	学習課題解決のために習得させたい「基礎的・基本的な知識」 ○ 鹿児島市は、様々なごみ減量の取組を行っている。 ○ ごみ袋の有料化や細かい分別を行っている市町村がある。 ○ 企業は、簡易包装やリサイクルなどの取組をしている。 ○ 市民は、3R運動を実施している。 学習課題解決のために習得させたい「資料活用の技能」 ○ 鹿児島市のごみの種類の割合、処理にかかる費用 ○ ごみの有料化の成功事例と課題に関する文書資料 ○ 大崎町のごみ分別数 ○ リサイクル推進課の方の話 習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 鹿児島市では、ごみ処理のために、市の計画に沿って様々な取組が行われている。市民や企業が協力して、更にごみの減量化に努めていく必要がある。	※ 前時までに学習してきたことを踏まえ、鹿児島市で実施した方がよいと思われるごみ減量化のための取組を各自で考える。 ※ 各自で考えたごみ減量の取組の中からグループで選び、その理由についても話し合う。
終末	予想される児童の「表現」例 鹿児島市のごみを減らすには、市の計画に沿った市民一人一人の努力に加え、市や企業の協力が必要である。	ごみ処理の計画的な取組 ごみ減量のための行政、企業、市民の協力

(3) 自覚・方向付けを促す学習指導の工夫

社会・地理歴史・公民科における自覚・方向付けとは、課題解決的な学習を展開する中で、児童生徒が自分の学習がどのような状況にあるかを自覚し、課題解決のための思考の方向性を決定付けることを意味している。このことは、自分自身で導いた課題解決の案と、他者の案とを比較・検討し、深めることで形成されていくと思われる。

資料3-10は、高等学校現代社会「市場経済のしくみ」の授業実践を示したものである。この授業では、展開前段で学んだ学習内容を生かして、新たな課題【学習課題2】に取り組ませ、複雑に関係した社会的事象の因果関係を追究させるとともに、「市場のしくみ」について深く考察させることを求めている。

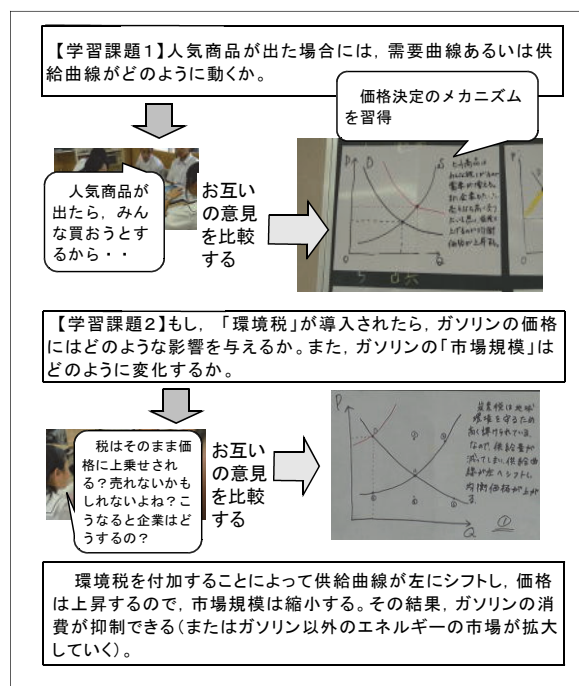
このように複数の学習課題を設定して、後から「より高次の問い掛け」を行い、児童生徒がお互いの意見を比較・検討して議論することは、児童生徒自身に新たな視点を気付かせることになる。

資料3-11に学習課題を2題設定した場合の高等学校における授業展開を示す。まず、本時の【学習課題1】の課題解決案について考察し、表現する。次に、【学習課題2】についての課題解決案について考察し、主体的・協働的に学ぶ学習を通して、考えを深める。

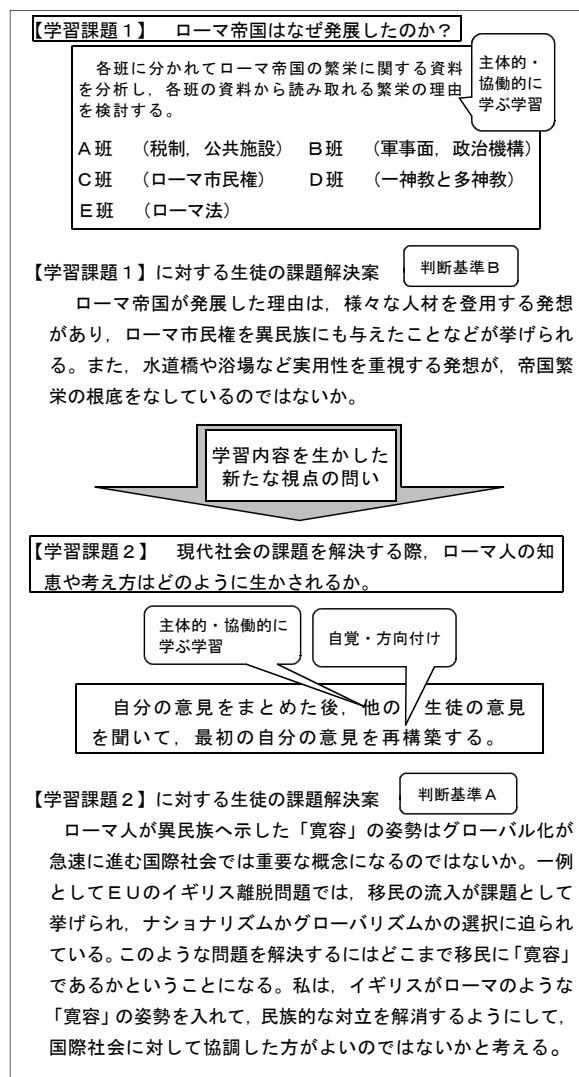
「判断基準」の設定の考え方に基づいてこの展開を当てはめると、【学習課題1】で判断基準Bに到達することを求め、【学習課題2】で判断基準Aに到達することを求めることになる。これまで「判断基準」の設定に当たっては、判断基準Bを重視していた。これに加え、判断基準Aを設定して授業を計画することは、生徒が課題追究の状況を自覚し、課題解決への方向付けを行うための学習指導として効果的であると思われる。

これまで述べてきたように、社会・地理歴史・公民科においては、主体的・協働的に学ぶ学習を効果的に取り入れて、いかに児童生徒に課題解決する能力を身に付けさせ、「公民的資質」を高めさせるかが重要である。

資料3-10 高等学校現代社会「市場経済のしくみ」授業実践例



資料3-11 学習課題を2題設定した場合の授業展開



4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して知識・技能を高め、児童が深い学びに向かうよう授業の視点(「学習課題の設定」,「主体的・協働的に学ぶ学習」,「判断基準」,「児童の思考の変容」)を通して実践し、課題解決に必要な資質・能力を明らかにするとともに、日常の社会科授業を充実させることを目的としている。これらの視点を意図した授業を展開することを通して、思考力・判断力・表現力等の資質・能力が身に付き、学習課題に対してより具体的な解決策を提案し、公民的な資質の基礎を養うことを目指している。

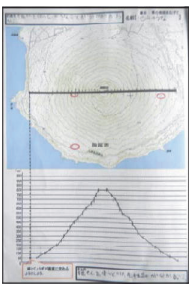
以上のことを踏まえ、第4学年における小単元「県の地図を広げて」の実践を通して検証するものである。

(2) 研究の実際(第4学年 小単元名 「県の地図を広げて」)

ア 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用技能	社会的事象についての 知識・理解
鹿児島県の広がりや、隣接県、方位・縮尺・等高線等に関心をもち、既習事項を生かして取り組もうとする。	鹿児島県の広がりや、隣接県、地形の特色等について、広がり様子と地形条件とを関連付けながら考えたり、分かったことを絵図や文に表現したりできる。	方位・縮尺・等高線の読み方や使い方を理解し、地勢図や断面図等で扱うことができる。	鹿児島県は日本の南に位置し、南北600kmの広がりや地形条件の違いがあることなどを理解できる。

イ 単元の指導計画(全6時間)

次	主な学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	鹿児島県内や奄美群島内の地形	○		○	○	- 衛星写真を見て県内の土地の様子について意欲的に話し合う。 - 地図上の色に着目して土地の様子を読み取ることができる。 - 県内の土地の様子について「地形」や「色」の違いを基に地図を読み取ることができる知識を身に付けている。
2	市町村の位置	○		○		- 衛星写真に関心をもち、地勢図の色分けの違いについて理由を明らかにしようとして話し合う。 - 県内の土地について調べる内容及び調べる方法や資料を基に追究の柱を話し合っている。
3				○	○	- 県内全域の地勢図から、本土においては桜島、奄美群島においては奄美大島を中心とした位置や方位の読み取りができる。 - 行政区分図において、桜島を中心として奄美市の位置を捉え、方位や桜島からの距離の表し方等の知識を身に付けている。
4	県内の土地の様子【本時】		○	○		- 写真と地図を比較し、等高線に着目して傾斜や高さの違いを読み取ることができる。 - 等高線の間隔と断面図の傾きを関連付けて考え、等高線が土地の高さや傾斜を表していることを説明できる。   開聞岳の写真 断面図作成用ワークシート→
5	鹿児島県の広がり	○	○			- 県内にある地域の地形を示す写真に関心をもち、場所や山の高さや傾斜等の特色について意欲的に調べようとする。 - 県内の三つの地域の地形の特色を比較することで、類似点や相違点について説明することができる。
6	47都道府県の位置と名称	○			○	- 鹿児島県や日本列島全体の地形に関心をもち、47都道府県の位置や名称を進んで調べようとする。 - 鹿児島県の43市町村、全国の47都道府県の位置や名称及び7地方について視野を広げ、知識を身に付けている。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

課題解決のための主な学習活動の流れ		主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 等高線を使うと、どんなことが分かるのだろうか。 （等高線を使って作った断面図を作成すると、地形のどのような様子分かるのだろうか。）	開聞岳の写真と地図とを提示し、地図中の等高線に着目させて比較することで等高線について関心をもたせた学習課題を設定する。
	「基礎的・基本的な知識」の習得 (1) 等高線に関する知識 ・ 海水面を高さの基準としていること <-----> ・ 太い線は50m間隔で引かれていること (25,000の1地形図) <-----> (2) 断面図に関する知識 ・ 稜線の傾き（山の形）を表していること <-----> ・ 等高線の間隔の広狭が土地の傾きを表していること <-----> (3) 言葉に関する知識 ・ 開聞岳が「薩摩富士」と呼ばれること <----->	学習課題設定に必要な知識を資料から読み取らせ、不足する知識は補足して理解を深めさせる。 読み取り
展開	「観察・資料活用」の技能の習得 ア 開聞岳の地形図 <-----> イ 開聞岳の写真 <-----> ウ 作成した断面図（ワークシート）と地図ソフト <-----> ㊦ 富士山の写真 <-----> ㊧ 富士山の断面図（地図ソフト） <----->	資料やICTを活用した断面図を基に、地形の高さや傾きの特徴をペアで読み取らせる。 ※ <---->は、資料活用と知識の習得の関係性を示す。
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ア～ウの資料を基に、等高線の間隔と断面図の傾きとを関係付けて考えさせ、等高線を使うことで分かることを説明させる。 ↓ ㊦、㊧の資料を基に、等高線や断面図から分かることを関係付けて地形の様子を協働的に考察させる。	ペア・グループごとに習得した知識や技能を活用して、断面図から地形の特徴について話し合わせる。 解釈 、 説明
	予想される児童の「表現」例 等高線を使うと、土地の高さや、等高線の間隔によって傾きに違いがあることを読み取れる(判断基準B)。 （等高線を使って作った断面図を作成すると、ある方向から見た山全体の形を明らかにすることができる(判断基準A)。）	学習課題に対するまとめ（解決）をノートに記述させ、発表させる。 説明 、 論述

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 主体的・協働的に学ぶ学習を取り入れることによって、断面図の作成（より高次の学習課題）に対しても、児童の関心・意欲を高め、判断基準Bに到達させることができた。
- (イ) 等高線と断面図を関連付けて考察させるなど、より高次の発問を用意したことで、児童の課題解決の状況に応じた深まりのある学習に取り組ませることができた。

イ 今後の課題

児童が思考する過程において、児童自身による振り返りができるワークシートの作成やノートの書き方の指導を工夫する必要がある。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して深い学びにつなぎ、そこから課題解決に必要な資質・能力とは何かということを明らかにするとともに、そのような資質・能力を育成する授業をどのように行えばよいか、日常において実践することを目的としている。生徒が、社会的な事象に興味・関心を高くもち、見通しをもって学習に取り組み、協働的な活動を通して自らの考えを深めるためには、学習意欲を高める学習課題を設定することと、課題を解決するために必要な知識・技能を習得させることを、より効果的に関連させることが重要であると考え。実生活での宗教との関わり方から、習得した知識・技能を活用して、生徒が深い学びを実現するように授業づくりを行い、生徒の思考がどのように変容したかについては、「判断基準」の設定による評価を通して検証する。

(2) 研究の実践（第1学年地理的分野 単元名「世界各地の人々の生活と環境」）

ア 単元の評価規準

社会的な事象への 関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用・技能	社会的な事象についての 知識・理解
様々な地域における気候と生活のつながりに関心をもち、意欲的に追究したり、話し合ったりしている。	各地域に住む人々の生活の特徴について、自然環境や文化面から多面的・多角的に考察し、自分の考えを述べたり、ワークシートにまとめたりしている。	雨温図や写真等から、各気候の特徴と人の生活のつながりについて読み取り、まとめ、発表している。	世界の人々の生活や環境の多様性について基礎的な知識を身に付けている。

イ 単元の指導計画（全9時間）

次	主な学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	雪と氷の中で暮らす人々	○	○		○	- 雨温図の読み取り方についての知識を身に付けている。 - 寒帯に住む人々の工夫について意欲的に話し合っている。 - イヌイットの暮らしが以前の暮らしと比べてどのように変化したか、意見交換したり文章でまとめたりしている。
2	寒暖の差が激しい土地に暮らす人々		○	○		- 寒帯の雨温図と冷帯の雨温図を比較することで、冷帯の特徴を読み取り、分かりやすくまとめている。 - 冷帯で暮らす人々が行っている生活の工夫を、気候の特徴に触れながら適切に表現している。
3	温暖な土地に暮らす人々		○	○		- 日本とイタリアの雨温図を比較し、それぞれの特徴について違いに触れながら読み取り、まとめている。 - 地中海沿岸の人々の暮らしの中で、気候の影響が見られる例を意見交換したり、文章でまとめたりしている。
7	世界に見られる様々な気候と広がり		○	○		- 森林が形成される気候と形成されない気候の特徴について、学習した雨温図や写真から読み取り、分かりやすくまとめている。 - 各気候帯と緯度経度にはどのような関係が見られるか、分布図や地図を比較しながら自らの考えをまとめ、表現している。
8	人々の生活に根づく宗教 【本時】		○		○	- 三大宗教の開祖・経典・分布等について理解し、知識として身に付けている。 - 資料から、信仰している宗教と人々の生活がどのように結び付いているか具体例を通して考え、適切に表現している。
9	伝統的な生活とその変化	○	○			- 世界各地の暮らしがどのように変化してきているか、過去と現在の写真から比較して読み取り、分かりやすく表現している。 - なぜ衣食住をはじめとする文化が変化してきているのか、身近な生活と関連付けながら意欲的に話し合っている。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

課題解決のための主な学習活動の流れ		主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	課題設定	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 寺院やお盆の写真を提示し、身近な宗教的行いと生活の関連性について考えさせながら学習課題を設定する。
	展開	「基礎的・基本的な知識」の習得 (1) 宗教の特徴及び生活の違い ○ 仏教（開祖:シャカ，経典:経，発生時期:紀元前5世紀）←----- ・ 東南アジアや東アジアに分布 ・ 托鉢，寺院での参拝等 ○ キリスト教（開祖:キリスト，経典:聖書，発生時期:1世紀）←----- ・ ヨーロッパや南北アメリカに分布，休日の設定，教会での礼拝 ・ イースターやクリスマス等の行事等 ○ イスラム教（開祖:ムハンマド，経典:コーラン，発生時期:7世紀）←----- ・ 北アフリカや西アジアに分布 ・ 1日5回の礼拝，巡礼，ラマダン（断食），豚肉食の禁止等 ○ ヒンドゥー教（インドの古くからの信仰）←----- ・ 多くの神が存在，ガンジス川での沐浴，牛は神聖な動物 (2) 日本にホームステイに来た外国人への対応 ←----- ・ 食事や行動に関して配慮できることがあるかの確認 (3) 神社にいる外国人への声掛け ←----- ・ 神道と呼ばれる日本固有の宗教の存在，「二礼二拍手一礼」 ・ 神道は八百万の神を信仰，神仏習合（神道と仏教の融合） ※ <----> は，資料活用の技能と知識の習得の関係性を示す。 「資料活用の技能」の習得 ア 歴史年表（教科書） ←----- イ 開祖・経典・習慣に関する資料（教科書） ←----- ウ ヒンドゥー教（教科書） ←----- エ 世界の宗教分布図（教科書） オ 日本でのホームステイの写真（インターネット） ←----- カ 神社にいる外国人の写真（インターネット） ←----- キ 日本の宗教について（資料集，インターネット） ←----- 資料や分布図を基に，各宗教の習慣や分布の特徴を読み取らせる。読み取り 習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ア～エの資料を基に，信仰している宗教と人々の生活がどのような部分で影響を与えているか考察させる。 ↓ オ～キの資料を基に，自分と異なる宗教を信仰している人とどのように関わっていく必要があるか，協働的に考察させる。 班ごとに習得した知識や技能を活用して宗教と生活の結び付きと異教徒との関わり方について深く討議させる。解釈，説明
終末	課題解決	予想される生徒の「表現」例 世界で信仰されている様々な宗教は，分布や歴史的背景等から，衣食住や生活習慣，生き方や考え方に大きな影響を与えている（判断基準B）。異なる宗教を信仰している人と接する時は，その宗教の考え方や行為，習慣等に配慮する必要がある（判断基準A）。 学習課題に対するまとめ（解決）をノートに記述させ，発表させる。説明，論述

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 実社会や実生活と関連付けた（生徒が「知りたい」と思うような）学習課題を設定することで，主体的に学習しようとする意欲を高めることができた。
- (イ) 予習によって習得した「基礎的・基本的な知識」と，写真やICTを活用した効果的な資料提示が，生徒による協働的な学習活動を展開する上で重要であることを再確認できた。
- (ウ) (ア)・(イ)を意識した授業実践を重ねるにつれて，生徒が進んで予習に取り組むようになった。その結果，判断基準Bに到達できる生徒が大幅に増え，判断基準Aへ思考を深化させるための話合いが活発になった。

イ 今後の課題

一人で考えることが難しい生徒へ配慮するために，グループ活動のみを重視しがちになる。ペア学習や自力解決の時間をとるなど，学習形態のバランスを取る必要がある。

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、生徒たちが課題解決的な学習の中で、習得した知識・技能を活用し、思考力・判断力・表現力の育成を図ろうとするものである。具体的には、公民科倫理において、生徒たちが主体的・協働的に学ぶ学習を行う中で、思想家の作品から知識を習得した後、その知識を活用して、現代社会の課題について思考・判断・表現を行わせるものである。

これまで倫理においては、先哲の思想を知識として捉えて終わることが多く、習得した知識を活用して、具体的な事例に当てはめて考察する学習活動は、十分ではなかったと思われる。

このような反省から、倫理の科目としての目標である「他者と共に生きる主体としての自己の確立」を図る必要がある。本実践では、生徒が主体的・協働的に取り組む実践を通して、課題解決に必要な資質・能力がどのように育成されたか、「判断基準」の設定による評価を通して検証する。

(2) 研究の実践（第3学年倫理 単元名 「近代的自我の確立」）

ア 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用・技能	知識・理解
漱石の作品に直接触れることで、その思想から日本の近代化が抱える問題点を把握し、現代社会の課題についての解決策を積極的に考えようとしている。	漱石の指摘した日本の近代化が抱える問題点について、他者との意見交換を通じて、自分自身の意見を再構築し、漱石の思想を基にして、現代社会の課題の解決策を考察している。	漱石の作品から、彼が近代化する日本の問題点をどのように考えていたかを読み取り、学習に役立つ情報を適切に選択して有効に活用している。	漱石の近代化に関する基本的な考え方について、当時の社会的背景と照らし合わせながら理解し、その基礎的な知識を身に付けている。

イ 単元の指導計画（全3時間）

次	主な学習内容	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	ロマン主義	○			○	- 明治期において、封建的な考え方から自我の確立に移行する過程の学習課題に対して意欲的に取り組む。 - 明治における国家体制建設の進展を背景にしたロマン主義の台頭について基礎的な知識を身に付けている。
2	日本近代化への反省【本時】		○	○		- 夏目漱石の思想内容についての資料（原典）を基に、「個人主義」や「他者の個性の尊重」について読み取っている。 - 日本の近代化が抱える問題点について、夏目漱石と森鷗外を基にして考察している。
3	大正デモクラシーと女性解放のあゆみ		○		○	- 大正デモクラシーと女性解放運動の展開について基礎的な知識を身に付けている。 - 日本の近代化がどのように進展していったかについて考察している。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

課題解決のための主な学習活動の流れ		主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	学習課題の設定による学習への「関心・意欲」の喚起 夏目漱石は「日本の近代化が抱える問題点」をどのように考えたか。 漱石が批判した「他人本位」、「エゴイズム」という観点から、現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等使用）をどのように解決すればよいのか。	授業の目的（主体的・協働的な課題解決学習）、本時の目標、タイムテーブル、態度目標（グループ・クラスで全員ができるまで）を理解させる。
	「基礎的・基本的な知識」の習得 Q 1 日本の近代化の特徴とは。 <-----> A 1 日本の近代化は「外発的開化」である。 Q 2 日本の近代化が抱える問題点とは。 <-----> A 2 日本人は「空虚の感」や不安の中に生きている。 Q 3 これからの日本人はどうあるべきなのか（二つ）。 <-----> A 3 ① 「自己本位」に生きる個人主義を掲げ、「内発的開化」へと変化させていく必要がある。 ② 他者の個性も尊重できるような倫理性の高い個人主義が求められている。 Q 4 「自己本位」の問題点とは何か。 <-----> A 4 強すぎる自我意識の形成により、利己心（エゴイズム）に陥る危険性がある。 Q 5 晩年の漱石が求めた東洋的な心の境地とはどのようなものであったか。 <-----> A 5 エゴイズムを捨て、自我を超越した自然（天）の在り方に則して生きるという無我の境地（則天去私）。 「資料活用技能」の習得 Q 1 『現代日本の開化』 <-----> Q 2 『現代日本の開化』 <-----> Q 3 『私の個人主義』 <-----> Q 4 『吾輩は猫である』、『三四郎』、『こころ』 <-----> Q 5 『草枕』『断片』 <-----> 習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ○ 漱石が批判した「他人本位」、「エゴイズム」という観点から、現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等の使用）をどのように解決すべきかについて思考・判断する。	それぞれの課題について、資料（原典）を基に、グループ内で話し合い、出された意見をワークシートに記入させる。 グループのリーダー同士で、それぞれのグループ内で出た意見を共有させ、それぞれのグループに戻って、自分たちのグループでは出なかった意見について説明させる。 ワークシートの課題ごとに、班のリーダーが、資料を用いながら意見を発表させる。他の生徒は、各グループの発表と教師の補足説明を聞きながら、問いの答えをまとめさせる。 ※ <-----> は、資料活用技能と知識の習得の関係性を示す。
展開	「基礎的・基本的な知識」の習得 Q 1 日本の近代化の特徴とは。 <-----> A 1 日本の近代化は「外発的開化」である。 Q 2 日本の近代化が抱える問題点とは。 <-----> A 2 日本人は「空虚の感」や不安の中に生きている。 Q 3 これからの日本人はどうあるべきなのか（二つ）。 <-----> A 3 ① 「自己本位」に生きる個人主義を掲げ、「内発的開化」へと変化させていく必要がある。 ② 他者の個性も尊重できるような倫理性の高い個人主義が求められている。 Q 4 「自己本位」の問題点とは何か。 <-----> A 4 強すぎる自我意識の形成により、利己心（エゴイズム）に陥る危険性がある。 Q 5 晩年の漱石が求めた東洋的な心の境地とはどのようなものであったか。 <-----> A 5 エゴイズムを捨て、自我を超越した自然（天）の在り方に則して生きるという無我の境地（則天去私）。 「資料活用技能」の習得 Q 1 『現代日本の開化』 <-----> Q 2 『現代日本の開化』 <-----> Q 3 『私の個人主義』 <-----> Q 4 『吾輩は猫である』、『三四郎』、『こころ』 <-----> Q 5 『草枕』『断片』 <-----> 習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ○ 漱石が批判した「他人本位」、「エゴイズム」という観点から、現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等の使用）をどのように解決すべきかについて思考・判断する。	それぞれの課題について、資料（原典）を基に、グループ内で話し合い、出された意見をワークシートに記入させる。 グループのリーダー同士で、それぞれのグループ内で出た意見を共有させ、それぞれのグループに戻って、自分たちのグループでは出なかった意見について説明させる。 ワークシートの課題ごとに、班のリーダーが、資料を用いながら意見を発表させる。他の生徒は、各グループの発表と教師の補足説明を聞きながら、問いの答えをまとめさせる。 ※ <-----> は、資料活用技能と知識の習得の関係性を示す。
	予想される生徒の「表現」例 日本の近代化は外発的開化であり、日本人は不安の中に生きている。これからの日本人は、自己本位で主体的な自我の確立（個人主義）と、他者の個性も尊重する高い倫理性が必要である（判断基準B）。 ○ 「他人本位」の事例 周囲からの孤立を恐れるあまり、自分を出せない若者が増えていく。こうした風潮が、いじめなどの社会問題につながっていると考えられる。他人を傷つけるものでなければ、他人と異なることを恐れず、もっと自分の意見を言ったり、自分が正しいと思う行動をとるべきだと考える。 ○ 「エゴイズム」の事例 位置情報ゲームアプリ等の使用により、個人的な欲求からゲームに熱中することによる事件や事故が多発している。公共の空間においては、周囲に迷惑をかけない範囲で、個人の欲求の追求を行うべきだと考える（判断基準A）。	現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等の使用）に関する記事を基に、その解決方法について、習得した漱石の思想を活用させながら、グループ内で話し合わせ、ワークシートに記入させる。 代表者に、グループで話し合われた意見について発表させる。 本時を振り返らせる。
	「基礎的・基本的な知識」の習得 Q 1 日本の近代化の特徴とは。 <-----> A 1 日本の近代化は「外発的開化」である。 Q 2 日本の近代化が抱える問題点とは。 <-----> A 2 日本人は「空虚の感」や不安の中に生きている。 Q 3 これからの日本人はどうあるべきなのか（二つ）。 <-----> A 3 ① 「自己本位」に生きる個人主義を掲げ、「内発的開化」へと変化させていく必要がある。 ② 他者の個性も尊重できるような倫理性の高い個人主義が求められている。 Q 4 「自己本位」の問題点とは何か。 <-----> A 4 強すぎる自我意識の形成により、利己心（エゴイズム）に陥る危険性がある。 Q 5 晩年の漱石が求めた東洋的な心の境地とはどのようなものであったか。 <-----> A 5 エゴイズムを捨て、自我を超越した自然（天）の在り方に則して生きるという無我の境地（則天去私）。 「資料活用技能」の習得 Q 1 『現代日本の開化』 <-----> Q 2 『現代日本の開化』 <-----> Q 3 『私の個人主義』 <-----> Q 4 『吾輩は猫である』、『三四郎』、『こころ』 <-----> Q 5 『草枕』『断片』 <-----> 習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 ○ 漱石が批判した「他人本位」、「エゴイズム」という観点から、現代社会における問題（孤立を恐れる若者意識、位置情報ゲームアプリ等の使用）をどのように解決すべきかについて思考・判断する。	それぞれの課題について、資料（原典）を基に、グループ内で話し合い、出された意見をワークシートに記入させる。 グループのリーダー同士で、それぞれのグループ内で出た意見を共有させ、それぞれのグループに戻って、自分たちのグループでは出なかった意見について説明させる。 ワークシートの課題ごとに、班のリーダーが、資料を用いながら意見を発表させる。他の生徒は、各グループの発表と教師の補足説明を聞きながら、問いの答えをまとめさせる。 ※ <-----> は、資料活用技能と知識の習得の関係性を示す。
終末	課題解決	

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 学習課題を複数設定することによって、より高次の課題への追究意欲を高めることができた。
- (イ) 主体的・協働的に学ぶ学習を行うことにより、自己の学習状況を自覚させ、課題追究への方向付けを行わせることができた。

イ 今後の課題

判断基準Bの達成状況から判断基準Aへの深化を促す発問を、更に工夫する必要がある。

第4章 算数・数学科における考え方と実践例

1 算数・数学科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

中教審は、学校教育を通じて児童生徒が身に付けるべき資質・能力として、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を示している。

算数・数学科においては、その目標（資料4-1）から、育成したい資質・能力を、「数量や図形に関する知識・技能」、「数学的な思考力・表現力」、「それらを進んで活用する態度」と整理することができる。

中教審から示された育成を目指す資質・能力の三つの柱と算数・数学科の目標から捉える資質・能力の関連を整理し、課題を解決するために必要な資質・能力としてまとめると資料4-2のように表すことができる。つまり、児童生徒が、「算数・数学への関心・意欲・態度」を原動力として自己の学習状況を自覚し、学びを方向付けながら、「数量や図形に関する知識・技能」と「数学的な思考力・表現力」をバランスよく身に付けることで、「数学的な見方・考え方」を一層高めることができるようになると捉えられる。

なお、これらの資質・能力は、「数学的な見方・考え方」を働かせる算数的・数学的活動を通して育成される。

これらの資質・能力は、主に数学的に問題解決する過程を通して育成される。そこで、どのような資質・能力を重点的に育成するのか、児童生徒の具体的な姿を学習過程ごとに想定し、整理した（資料4-3）。例えば、「課題把握」の場面において、「日常生活や社会の事象から数量等に着目して数学的な問題を見いだそうとしている」ことは、主に「数学的な思考力・表現力」を育成することになる。また、「まとめ・表現」の場面において、「過程や結果を吟味し、評価・改善を図ろうとしている」ことは、主に「算数・数学への関心・意欲・態度」を育成することになる。

このように、児童生徒の具体的な姿を想定し指導していくことで、算数・数学科において課題を解決するために必要な資質・能力を児童生徒に身に付けさせることができると考える。

資料4-1 算数・数学科の目標

〔小学校〕

算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。

〔中学校〕

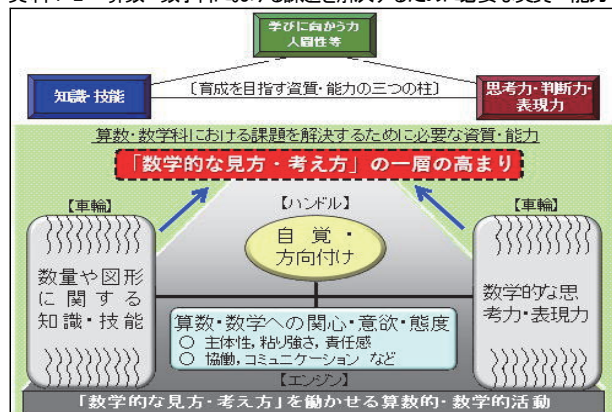
数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を知り得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりしようとする態度を育てる。

〔高等学校〕

数学的活動を通して、数学における基本的な概念や原理・法則の体系的な理解を深め、事象を数学的に考察し表現する能力を高め、創造性の基礎を培うとともに、数学のよさを認識し、それらを積極的に活用して数学的論拠に基づいて判断する態度を育てる。

（※下線は筆者による。）

資料4-2 算数・数学科における課題を解決するために必要な資質・能力



資料4-3 数学的に問題解決する過程における具体的な姿と資質・能力

① 数量や図形に関する知識・技能 ② 数学的な思考力・表現力
③ 算数・数学への関心・意欲・態度

学習過程	具体的な姿	①	②	③
課題把握	日常生活や社会の事象から数量等に着目して数学的な問題を見いだそうとしている。		○	◎
	数学の事象から問題を見いだそうとしている。			
	事象の特徴を捉えて数学的な表現を用いて表現している。	○	◎	
	得られた結果を基に拡張・一般化している。	○	◎	
情報の収集	数学的な問題の本質を見いだし、解決するための見通しをもっている。	○	◎	
	多面的に考え、粘り強く問題の発見や解決に取り組んでいる。		○	◎
整理・分析	目的に応じて、数や式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順にしたがって数学的に処理している。	◎	○	
	数学的な見方や考え方を基に、的確かつ能率的に処理している。	◎	○	
	論理的に推論している（帰納、類推、演繹）。	○	◎	
	数学的な表現を用いた説明を理解したり評価したりしている。	◎	○	
まとめ・表現	目的に応じて、自分の考えなどを数学的な表現を用いて説明している。	○	◎	
	得られた結果を元の事象に戻して、その意味を考えている。		◎	○
	様々な事象に活用している。		◎	○
	数学的な見方や考え方のよさを見いだしている。		◎	○
	得られた結果を基に批判的に検討し、体系的に組み立てている。	○	◎	
	見いだした事柄を既習の知識と結び付け、概念を広げたり深めたりしている。	◎	○	
	統合的・発展的に考えている。	○	◎	
	過程や結果を吟味し、評価・改善を図ろうとしている。		○	◎

※ 主に育成する資質・能力を◎、それに準じて育成する資質・能力を○として表記しているが、一例であり、指導目標等によって変わることもある。

2 算数・数学科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

(1) 児童生徒が主体的・協働的に学ぶための学習課題

算数・数学科では、学習課題として教材等を提示し、児童生徒の様々な「気付き・発想」（思いや願い、疑問など）を共感的に受け止めるとともに、本時で学習したいことを児童生徒に考えさせる中で、学習問題の焦点化を図ることが児童生徒の主体的・協働的な学びの上で重要となる。

そこで、児童生徒が、主体的・協働的に学ぶ算数・数学の授業を展開するためには、

資料4-4のような児童生徒の反応例を想定した視点から学習課題を工夫し、作成することが重要である。例えば、小学校第6学年「速さ」の学習課題（資料4-5）については、日常生活の場面を設定することで、児童生徒の興味・関心を引き出すことができる。また、児童生徒の能力や既習事項を考慮した上で「10:00に自宅を出発し、13:10発の飛行機に乗る。」という条件を付加することで、児童生徒に適度な困難さを感じさせたり、多様な考えで解決させたりすることができるようになる。さらに、解決結果を条件と照らし合わせると、「海岸道路は条件に合うと言えるのかな。」という新たな疑問を引き出すことができる。

このように、児童生徒にとって切実感・必要感のある学習課題を工夫することで、学習意欲を持続しながら課題解決に取り組むようになる。さらに、身の回りの具体的事象を数理的に捉えることができるようになる。

(2) 学習問題を設定するための観点

学習問題を設定するときには、学習課題に出会ったときの「気付き・発想」を基に設定することが重要である。例えば、児童生徒が学習課題を見て、既習内容と比較し、「前に学習したことと、ここが違うぞ。」という「気付き・発想」をもった場合は、「〇〇のときは、どのようにすればいいのだろうか。」という学習問題を設定する。

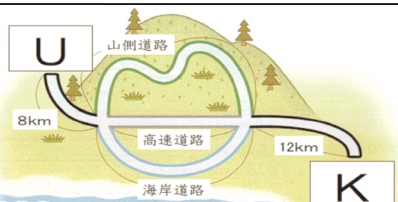
このように、児童生徒の「気付き・発想」を学習問題につなげるための観点を資料4-6のようにまとめた。

資料4-4 学習課題を工夫する際の視点

教師の視点	児童生徒の反応例
ア 児童生徒から疑問、矛盾を引き出せるもの	なぜかな。おかしいぞ。
イ 児童生徒に適度な困難さを感じさせるもの	これは難しそうだな。
ウ 児童生徒から多様な考えを引き出せるもの	いろいろな方法がありそうだ。
エ 児童生徒の興味・関心を引き出せるもの	面白そうだ、やってみよう。
オ 児童生徒の能力、既習事項を考慮したもの	これまで学習したことが使えそう。
カ 操作などの活動を通して解決できるもの	活動しながら考えを広げたり深めたりできそう。
キ 解決の見通しをもたせられるもの	このことを解決していけばいい。
ク 解決の成就感や成功感をもたせられるもの	分かったぞ。やっとなってきたぞ。

資料4-5 学習課題の工夫例（小学校第6学年「速さ」）

【学習課題】
家族で鹿児島空港から13:10発の飛行機に乗って韓国へ行きます。内之浦にある自宅（U）から鹿児島空港（K）までは車を使うことにしていますが、高速道路は時速80km、それ以外の道路は時速40kmで走ります。それぞれの道のりは、次の表のとおりです。10:00に自宅を出発しようと計画していますが、どの道路を使った方がよいのでしょうか。



道路名	道のり
山側道路	120km
高速道路	80km
海岸道路	100km

【児童の反応例】
 [山側道路] $(8 + 120 + 12) \div 40 = 3.5$
 [高速道路] $(8 + 12) \div 40 = 0.5$
 $80 \div 80 = 1$
 [海岸道路] $(8 + 100 + 12) \div 40 = 3$
 山側道路を使うと間に合わないけど、高速道路を使ったら間に合うね。
 海岸道路を使うと、到着が13:00になるけど、飛行機に乗れるのかな？

資料4-6 児童生徒の「気付き・発想」を学習問題につなげるための観点

観 点	児童生徒の「気付き・発想」	学習問題例
課題を見て、既習内容との比較を基にした観点	前に学習したことと、ここが違うぞ。	〇〇のときは、どのようにすればいいのだろうか。
試行した結果から、見いだした規則を基にした観点	こんなきまりがありそうだぞ。本当にそうかな。	見付けたきまりは、本当にそうだろうか。
既習内容を生かして試行したが、できなかったことを基にした観点	この考えでできると思ったのに、できないぞ。	〇〇ではできないときは、どのようにすればいいのだろうか。
試行した結果、明確にできなかったことを基にした観点	みんな違うぞ。はっきりしないなあ。	はっきりするには、どうすればいいのだろうか。
簡単な解決方法を追究したいという意識を基にした観点	できたけど、面倒くさいな。	もっと簡単に解決する方法はないだろうか。
更に対象を変えて、同じ活動に取り組みたいという意識を基にした観点	今の学習を他のことでもやってみたいな。	〇〇でやったら、どうなるのだろうか。

(1) 工夫の視点

例えば、小学校第5学年「立体の体積」の授業では、主に算数への関心・意欲・態度を育成するために、終末の場面でグループによる学習活動を取り入れ、頑張ったことや分かったこと、相互の学び方などの学習状況を振り返り、次時への学習意欲を高めさせる。中学校第1学年「文字式」の授業では、主に数学的な思考力・表現力を育成するために、展開の場面でグループによる学習活動を取り入れ、自己の理解状況を把握しながら他者との話し合いを行うことで、自己の考えを深め、幅広い考え方で物事を捉え直させる。高等学校第3学年「媒介変数で表された関数のグラフ」の授業では、主に数学への関心・意欲・態度を育成するために、終末の場面で他のグループの人と話し合う活動を取り入れ、自己の理解状況を自覚しながら、主体的な学びを更に深めさせる。

児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習において、数学的な思考力・表現力の発揮の状況を見取るためには、評価規準に基づいた「判断基準」の設定を通して児童生徒の具体的な表現例を想定しておくことが重要である。この「判断基準」を活用することで学習状況を的確に見取り、補充指導や深化指導に生かす（資料4-8）といった指導と評価の一体化を図ることができる。

① 数量や図形に関する知識・技能 ② 数学的な思考力・表現力
③ 算数・数学への関心・意欲・態度

	主体的・協動的に 学ぶ学習	期待される学習効果	①	②	③
予習 形態	反転授業	新たな学習内容を、宿題として自宅でビデオ授業等を視聴して学び、教室では、従来宿題とされていた演習について取り組む授業方法である。教師が個々の児童生徒に合わせた指導を行ったり、児童生徒が他の児童生徒と協動的に課題に取り組んだりすることができる。	○		◎
	教科書利用	教科書を使って取り組む予習で、自ら教科書を読み、例題や問題を解いて学ぶことができる。	○	○	◎
協働 学習 の 形態	ペア学習	隣の人と話し合う活動で、短時間で考え方を共有できる。	○	◎	○
	グループ学習	4人程度のグループで話し合う活動で、グループ内での活動を通して、自己の理解度を把握したり、他者との話し合いを通して考えを深めたり、幅広い考え方で物事を捉え直すことができる。		◎	◎
	他のグループの人 と話し合う活動	特定のグループに固定されず、他のグループの人と話し合うことで、主体的な学習活動ができる。	○	◎	
	知識構成型ジグ ソー法	あるテーマについて、複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読み、自分なりに納得できた範囲で説明をつくって交換する。交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築したり、テーマに関連する課題を解いたりする活動を通して学ぶ授業方法である。学習者を中心とした、協働的な学習ができる。	◎	○	◎
個人内解決		課題に対して、課題解決の見通しを立てたり、問題を解いたりして、自己解決を図ることができる。	○	○	◎
整理・ 分類 活動	広幅用紙等を用いた活動	グループ内で、広幅用紙に気付いたことを自由に書き出す表現活動で、表、矢印、色分けなどによって、意見を整理、分類しながら、グループの考えをまとめることができる。	○	◎	○
	付箋を用いた活動	気付いたことを付箋に書き出した上で個々の考えを表現する活動で、グループ内で全員が意見を述べることができる。また、出された付箋を並べ替えたりグループ化したりすることで、意見を整理、分類しながら、グループの考えをまとめることができる。		○	◎
表現 活動 の 形態	ICT機器を用いた表現活動	タブレット端末等で取り込んだ画像をプロジェクトで投影することで、クラス全体に表現する場面に利用できる。	○	◎	◎
	ホワイトボードを用いた表現活動	グループ活動において、自分の考えを提示して説明したり、グループの意見を書いてクラス全体に提示したりするなど、表現の場面に利用できる。	○	◎	○
	児童生徒による黒板での説明	児童生徒の考えを黒板に書き、児童生徒自らが説明することで、より主体的・能動的な活動に結び付けることができる。	○	◎	○
リフレクション (振り返り)		互いに授業内容を振り返って、何を学び、何を理解したかを共有する。授業での疑問を解決したり、理解が不十分な内容を補い合ったりできる。	○	○	◎

資料4-8 「判断基準」に基づいた指導例（中学校第3学年「2次方程式」）

評価規準【数学的な思考力・表現力】	
- 身の回りの具体的な事象の中で数量の関係を捉え、2次方程式をつくることができる。 - 求めた解や解決の方法が適切であるかどうかを振り返って考えることができる。	
評価の対象	
活動している場面や発言内容、レポート、ノートやアイデアシートの記述、グループで話し合っている内容	
尺度	判断基準
B	前時に2次方程式を利用して求めた花壇の問題から発想を膨らませ、新たなアイデアを考えることができる。 (予想される表現例)
C 状況の生徒への指導	【補充指導】 他のグループのアイデアを示し、同じような考え方で花壇が作れないか考えさせる。
A	2次方程式の解を吟味することで、学習問題の条件に合う花壇を見付けることができる。
B 状況の生徒への指導	【深化指導】 2次方程式を利用して、条件に合う花壇を見付けさせる。

資料4-9は、「判断基準」を基に作成した、小学校第5学年における「表現モデル作成シート」の例である。このように、事前に解決の状況についての児童生徒の表現例を想定しておくことで、児童生徒一人一人の考えを的確に見取り、それを比較し類型化することで思考を深める展開が可能となるなど、効果的な指導につながる。

(3) 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

算数・数学科において、自覚・方向付けを促すためには、児童生徒が①自己の学習状況の変容、②変容した場面、③変容の要因に気付くことが重要である。そこで、これらの要素を数学的に問題解決する過程に取り入れるようにした。資料4-10は、小学校第6学年「並べ方と組み合わせ方」における各過程での自覚・方向付けを促す手立てである。このような手立てを講ずることで、主体的・協働的に学ぶ学習を通して、児童生徒は自己の考えを深めながら、数量や図形に関する知識・技能を新たに獲得したり、数学的な思考力・表現力を高めたりするなどの手応えを感じ取ることができ、算数・数学を学ぶ価値や意義を実感することにつながると考える。

特に、まとめの段階では、「分かったこと」や「前よりできるようになったこと」などの知識・技能、「考えが深まったこと」や「新たな考えに気付いたこと」などの数学的な思考力・表現力、「友達と学び合ってよかったこと」や「うれしかったこと」などの算数・数学への関心・意欲・態度に関する視点で振り返らせ、その内容を全体で共有することが効果的である。例えば、中学校第2学年「平行と合同」では、振り返りの視点を明記したシートに毎時間記入させる。その結果、児童生徒は自己の学習状況の変容や友達と学び合うことのよさなどを実感するようになり（資料4-11）、振り返りの充実を図ることができる。

資料4-9 「表現モデル作成シート」の例（小学校第5学年「体積」）

〈表現モデル作成シート〉

学 年	第 5 学年	月・日・校時	10 月 9 日 5 校時
題材名	体 積		第 8 時 / 全 13 時
表現させたい課題の内容	複合図形の体積の求め方を考える。		

学習課題

① $3 \times 3 \times 3 = 27(\text{cm}^3)$
 ② $1 \times 1 \times 1 = 1(\text{cm}^3)$
 ①+②を足すと、 $27+1=28(\text{cm}^3)$

① $3 \times 2 \times 4 = 24(\text{cm}^3)$
 ② $3 \times 1 \times 4 = 12(\text{cm}^3)$
 ①+②を足すと、 $24+12=36(\text{cm}^3)$

① $5 \times 2 \times 8 = 80(\text{cm}^3)$
 ② $5 \times 5 \times 4 = 100(\text{cm}^3)$
 ①+②を足すと、 $80+100=180(\text{cm}^3)$

① $(7+2) \times 5 \times 4 = 9 \times 5 \times 4 = 180(\text{cm}^3)$

表現モデル
言葉
数式
図表
グラフ
など

多様な考えが思いつく。
 たて・横・高さの長さを決めることが出来る。
 図や表を使って説明することが出来る。
 多様な方法は出来るが、他の方法でも使えるようにしよう。

あきなり
 (全体) $7 \times 5 \times 8 = 280(\text{cm}^3)$
 (部分) 上層 $5 \times 5 \times 4 = 100(\text{cm}^3)$
 (全体) (部分)
 $280 - 100 = 180(\text{cm}^3)$
 (全体) $(7+2) \times 5 \times 8 \div 2 = 9 \times 5 \times 8 \div 2 = 180(\text{cm}^3)$

組み合わせ
 複合図形を分けて、それぞれに直方体の公式を使い、その合計(たて×横×高さ)の公式を使うことが出来る。

資料4-10 自覚・方向付けを促す手立て（小学校第6学年「並べ方と組み合わせ方」）

過程	主な学習活動	(自覚・方向付けを促す手立て)
課題の把握	1 これまでの学習を振り返る。 2 学習課題を受け止める。 6年生の4クラスでバスケットボールの試合をします。どの組とも1回ずつ試合をします。全部で何試合になるでしょうか。 3 学習問題を話し合う。 どのようにすれば二つの組合せを調べることができるでしょうか。	・ 既習事項を生かして試しの組合せをさせ、順序よく図にいかしていくことで試合の組合せが明らかになることに気付かせ、解決の方向付けをする。
	4 解決の見通しを立てる。	・ 組み合わせ方を見付けるために、並べ方の学習を活用できないかという視点をもたせる。
	5 見通しに基づいて、解決する。 6 他の問題にも適用できるか確かめる。 小学校のバザーで7種類の雑貨の中から2種類を買います。組合せは全部で何通りあるでしょうか。	・ 組合せを求める意味や方法を捉えさせるために、それぞれの方法を吟味させたり、これまでの既習事項との相違点を考えさせたりする。
まとめと振り返り	7 本時の学習をまとめる。 重なりは数えないようにする。 数が少ない→図 数が多い→表 8 本時の学習を振り返る。	・ 本時のまとめは、簡潔性、明瞭性、正確性の視点から児童の言葉を用いながらまとめる。 ・ 自己の学習状況の変容に気付かせる。

資料4-11 振り返りシート（中学校第2学年「平行と合同」）

月/日	授業内容・分かったこと	感想・疑問・次はこんなことを	自己評価
			① ② ③ ④
	授業の振り返り、授業のポイントや大切なところ、分かったことなどを自分なりにまとめる。	友達の意見で参考になったこと、友達と学び合ってよかったこと、疑問に思ったこと、今後考えてみたい課題などの視点で記入する。	[本時の自己評価内容] ① ブーメラン型の図形の性質を理解できたか。 ② 様々な方法で問題を解くことができたか。 ③ 自分の考えを相手に分かりやすく伝えることができたか。 ④ 分からないときは、「分からない、教えて」と尋ねることができたか。また、友達に考え方をアドバイスできたか。

4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

計算等の表現・処理は比較的得意としているが、幾つかの立式が必要となるような複数の考え方や思考を組み合わせで解決を図ったり、筋道を立てて考えや理由を説明したりすることに苦手意識を感じている児童が多い。そこで、本研究では、起こり得る全ての場合を適切な観点から捉えて、「固定して考えるもの」と「変化していくもの」の二つの見方から課題解決を図ることで思考を深め、自分のグループや他のグループの人に図や表を用いながら分かりやすく説明することで、考えたことを多様に表現することを目的として実践を行う。

(2) 研究の実際（第6学年 単元名「並べ方と組み合わせ方」）

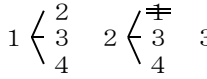
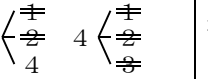
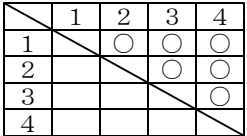
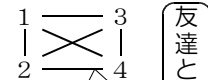
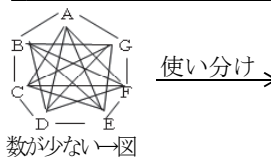
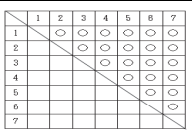
ア 題材の評価規準

算数への意欲・関心・態度	数学的な考え方	数量や図形についての技能	数量や図形についての知識・理解
具体的な事柄に即して、図、表などを用いて表すなどの工夫をしながら、落ちや重なりがないように、順序よく調べていこうとしている。	具体的な事柄を整理する際、落ちや重なりがないように、図や表を適切に用いたり、名前を記号化して端的に表したりして、順序よく筋道を立てて考えている。	具体的な事柄について、落ちや重なりがないように、起こり得る場合を順序よく整理して調べることができる。	起こり得る場合を落ちや重なりがないように調べるには、ある観点に着目したり、図や表などにかき表したりするとよいことを理解している。

イ 単元の指導計画（全8時間）

小単元	次	主な学習内容	評価の観点				評価規準〔観点〕
			関	考	技	知	
並べ方	1	○ 落ちや重なりがないように調べる方法を工夫する。 ○ 表や図を用いて並べ方を調べる方法を理解する。	○	○			・ 落ちや重なりがないように調べる方法を工夫して考えている。 ・ 落ちや重なりがないように順序よく調べるには、表や図を使うと便利なのに気づき、進んでこれを使おうとしている。
	2	○ 条件がある場合の並べ方が何通りあるかを考える。			○		・ 条件がある場合の並べ方が何通りあるかを求めることができる。
	3	○ 並べ方について、落ちや重なりがないように調べる方法について理解を深める。			○		・ 並べ方について、落ちや重なりがないように順序よく整理して調べることができる。
組み合わせ方	4	○ 組合せが何通りあるか調べるときに、落ちや重なりがないように調べる方法について考える。 ○ 表や図を用いて組み合わせ方を調べる方法を理解する。		○		○	・ 書き出したり図や表を使ったりしながら、工夫して組合せを考えている。 ・ 組合せの意味、並べ方との違いを理解している。 ・ 総当たり戦の組合せが全部で何通りあるかを求めることができる。 【本時】
	5	○ 5種類の中から2種類を選ぶ組合せを順序よく考える。		○		○	・ 書き出したり図や表を使ったりしながら、工夫して組合せを考えている。 ・ 菓子の組合せが全部で何通りあるかを求めることができる。
チャレンジ	6	○ 組み合わせ方の考えを用いて身の回りの事象について考え、理解を深める。		○			・ 組み合わせ方の考えを、問題解決に活用している。
練習	7	○ 既習事項の理解を深める。 ○ 勝ち抜き戦の試合数について考える。		○			・ 表を基に勝ち抜き戦のときの試合数を考えている。
力だめし	8	○ 既習事項の確かめをする。					

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	主な学習活動	時間	主体的・協働的な学びを促す手立て
つかむ	1 これまでの学習の振り返りをする。 2 学習課題を受け止める。 6年生の4クラスでバスケットボールの試合をします。どの組とも1回ずつ試合をすると、全部で何試合になるでしょうか。 3 学習問題を話し合う。 どのようにすれば二つの組合せを調べることができるか。	8分	- 並べ方の学習を振り返る活動を通して、落ちや重なりがないように調べるには一つを固定してその他を変えていくという見方ができたことを確認する。 - 既習事項を生かして試しの組合せをさせてみる。学習問題の設定につなげるために、順序よく図に書いていくことで試合の組合せが明らかになることに気付かせ、解決したいという意欲を高めるようにする。
見通す	4 解決の見通しを立てる。 ・ 順序よく調べていけばいいよ。 ・ 図や表を使うと分かりやすいかも。	3分	組み合わせ方を見付けるために、並べ方の学習を活用できないかという視点をもたせる。
見付ける	5 見通しに基づいて、解決する。 1  2  3  4  ① まず、並べ方と同じように図をかく。 ② 次に、同じ組合せを消す。 ③ 最後に、残った組合せの数を数える。 ・ 図に書けば、組合せが分かるね。 ・ 同じ組合せは、消せば重なりなく調べていくことができるね。 ・ 他の図や表でもできるよ。  1  落ちや重なりを考えなくても分かる。 対角線+辺 重なりがすぐ分かる。 ・ 重なりは考えない。 6 他の問題にも適用できるか確かめる。 小学校のバザーで7種類の雑貨の中から2種類を買います。組合せは全部で何通りあるでしょうか。  数が少ない→図 使い分け →  数が多い→表	26分	- 多様な考えを収集したり、自らの考えを確かめるために、交流の場を設定する。  答えはどうなった？ 何でかな？ そういうことか！ - 主体的に数学的な考え方を働かせた算数的活動をさせるために、それぞれの児童に捉えやすい方法を選択させて取り組ませる。 - 考えたことを図や言葉で表し、他の友達にも分かりやすいように説明できるようにさせる。  図で考えました。辺と対角線の数を数えれば、重なりをいちいち考えなくてもよいからです。 扱う数を大きくして、あえて適用しにくいようにする。「これまでと違って変だな、もう一度考えたい」という意識の高まりを捉え、再思考させるようにする。 「判断基準B」 起こり得る場合について、落ちや重なりがないように調べている。 「判断基準A」 判断基準Bに加えて、図や表を適切に用いたり、使い分けたりしながら順序よく調べている。
まとめる	7 本時の学習をまとめる。 重なりは数えないようにする。 数が少ない→図 > 使い分け 数が多い→表 8 練習問題に取り組む。	8分	- 自分や友達の考えのよさを実感させるために、どの考えで組合せを求める方法が明確になったかを振り返らせながら、学びの変容を明確にする。 - 本時の学習のまとめは、簡潔性・明瞭性・正確性の視点から児童の言葉を拾いながらまとめるようにする。

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

自らの考えをもち、友達と一緒に考えを比較・検討する主体的・協働的に学ぶ学習を通して、一つの解決方法がよいと結論付けるのではなく、場合によっては他の解決方法で考える方がよいというように考えが変容した姿が見られた。

イ 研究の課題

対話活動は時間を要するので、終末の時間が不足する傾向にある。また、授業ごとに話し合うメンバーが固定化する傾向も見られた。今後は、学習内容の精選や対話活動のバリエーションを変えて、多様なメンバーや考えに触れる機会を設定していく必要がある。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

対象の生徒は、そのほとんどが落ち着いた態度で意欲的に授業に取り組んでいる。しかし、少し考えて分からないと、考えることを止めて答え合わせを待っている生徒や、課題が解決できると時間をもて余す生徒の姿も見られる。また、課題を解決できても、考え方を他者に分かりやすく説明することに苦手意識をもっている生徒も少なくない。このような実態を踏まえ、分からないことは友達に聞き合う学び合いの時間や、友達の考えを聞き新たな気づきを得たり、自分と友達の考えを比較し考えを深めたりしていく時間を設け、協働的な学びを充実させた。また生徒が主体的に取り組めるように、多様な考え方ができ、既習内容を利用して解決できる課題を設定した。

(2) 研究の実践（第2学年 単元名「平行線と角」）

ア 単元の評価規準

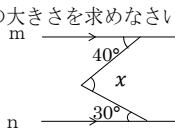
数学への関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	数量や図形などについての知識・理解
様々な事象を平行線の性質、三角形の角の性質、三角形の合同条件などで捉えたり、平面図形の基本的な性質や関係などを見いだしたりするなど、数学的に考え表現することに関心を持ち、意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとしている。	平行線の性質、三角形の角の性質、三角形の合同条件などについての基礎・基本的な知識及び技能を活用しながら、事象を数学的な推論の方法を用いて論理的に考察し表現したり、その過程を振り返って考えを深めたりするなど、数学的な見方や考え方を身に付けている。	平行線の性質、三角形の角の性質、三角形の合同条件などを数学の用語や記号を用いて簡潔に表現するなど、技能を身に付けている。	平行線の性質、三角形の角の性質、三角形の合同条件、図形の証明の必要性和意味及びその方法などを理解し、知識を身に付けている。

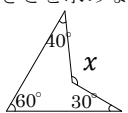
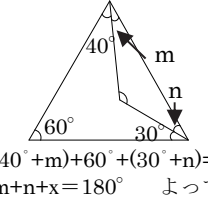
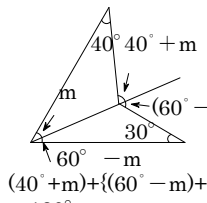
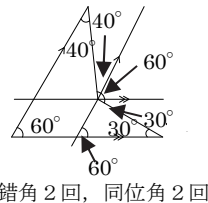
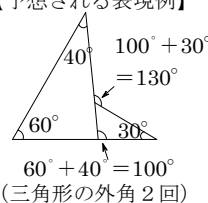
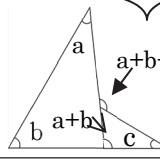
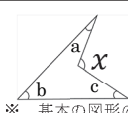
イ 単元の指導計画 ※本時に関する小単元のみを抜粋

小単元	時	主な学習内容	評価の観点				評価規準〔観点〕
			関	考	技	知	
多角形の角	1	- 三角形の内角や外角の性質を平行線の性質を使って論理的に確かめる。 - 三角形の角の性質を用いて、様々な角の大きさを求める。	○			○	- 三角形の内角の和が 180° であることを、実測によらない方法で説明することに関心を持ち、既習のことに帰着させて考えようとしている。〔関〕 - 三角形の角の性質を使って、角の大きさを求めることができる。〔技〕
	2	- 多角形の内角の和の公式を、三角形の角の性質を用いて求める。 - 公式を用いて、様々な多角形の内角の大きさを求める。		○			- 多角形の内角の和の性質を使って、角の大きさを求めることができる。〔技〕 - 多角形の内角の和の性質を見だし、それが正しいことを既習事項を用いて説明することができる。〔考〕
	3	多角形の外角の和の性質を予想し、どんな多角形でも成り立つことを確かめる。		○			多角形の外角の和が 360° であることを予想し、それが正しいことを既習のことに帰着させて考えることができる。〔考〕
	4	凹四角形の角の性質を基本の図形の性質を用いて、様々な方法で説明する。		○			凹四角形の角の性質を、既習のことに帰着させて考え説明することができる。〔考〕

【本時】

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	学習活動	指導上の留意点	主体的・協働的な学びの学習の工夫
導入 10分	1 課題①に取り組む。(個)	解決できない生徒には、今までにどのような図形の性質を学習したか確認させる。	
	$\angle X$の大きさを求めなさい。(m // n)  2 課題①の解法を発表する。(ペア→一斉)	答えだけでなく、どのような図形の性質を利用するために補助線を引いたかも説明させる。	考え方を言葉や図で表し、ペアで自分の解き方を説明させた後、一斉での発表に移る。
	3 本時のめあてを確認する。(一斉)	矢じりの図形の角には、どのような性質があるだろうか。	視聴覚機器で、m と n を動かして矢じりの形にし、課題①の図形との相違点を考えさせ、課題把握の自覚化を促す。

過程	学習活動	指導上の留意点	主体的・協働的な学びの学習の工夫																												
展開 35分	4 課題②に取り組む。(個) $\angle X$の大きさを求めなさい。 	- どのように考えたのか分かるように解答を書かせる。 - 問題が解決できた生徒には、他の考え方で解決できないか考えさせる。																													
	5 考え方を意見交換する。(グループ) 	- グループ内で自分の考えを説明し合い、様々な方法で問題を解決できることに気付かせる。 - 分からないところや疑問に思ったところなどは、積極的に質問するようにさせる。	「自分の考えを話したい」「友達の考えを聞きたい」という意欲を生かした意見交換の場を設定する。 - 自分が気付かなかった考えは、ノートにメモさせ、個人で再思考する場と時間を設定する。																												
尺度	判断基準																														
B	平行線の性質や三角形の性質を利用するために補助線を引き、凹四角形の角の性質を説明することができる。 【予想される表現例】  $\angle X = \angle a + \angle b + \angle c$ 																														
A	複数の考え方に気付き、それらを根拠を明らかにして説明したり、ほかの方法と比較検討したりすることができる。																														
	6 課題②の解法を発表する。(一斉) 7 見つけた性質を一般化する。(グループ) 8 まとめをする。(一斉)	 $\angle X = \angle a + \angle b + \angle c$ ※ 基本の図形の性質が利用できるように補助線を引くと、様々な角の大きさが求められる。	「友達の考えを聞いて新たな気があったか」という問い掛けをし、自己の考えの変容を意識させる。																												
終末 5分	9 「授業振り返りカード」に記入する。(個) 授業振り返りカード(4章) <table><tr><th>月/日</th><th>授業内容・分かったこと</th><th>感想・疑問・次はこんなことを</th><th colspan="4">自己評価</th></tr><tr><th></th><th></th><th></th><th>①</th><th>②</th><th>③</th><th>④</th></tr><tr><td>9/28</td><td>△ABCの角の性質</td><td>360°の説明や命題を「もしも...ならば...」で説明ができた。</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>9/28</td><td>△ABCの角の性質 $\angle A + \angle B + \angle C = 180^\circ$</td><td>「三角形の内角の和は180°」が、なぜか分かった。新しい発見があった。 「もしも...ならば...」で説明ができた。</td><td>A</td><td>B</td><td>A</td><td>A</td></tr></table>	月/日	授業内容・分かったこと	感想・疑問・次はこんなことを	自己評価							①	②	③	④	9/28	△ABCの角の性質	360°の説明や命題を「もしも...ならば...」で説明ができた。					9/28	△ABCの角の性質 $\angle A + \angle B + \angle C = 180^\circ$	「三角形の内角の和は180°」が、なぜか分かった。新しい発見があった。 「もしも...ならば...」で説明ができた。	A	B	A	A	本時の学習で分かったことや疑問点、友達の参考になった考えなどをワークシートに記入させる。	自らの学びを見つめて振り返る場を設定し、個々の学びのよさを取り上げて共有化する。
月/日	授業内容・分かったこと	感想・疑問・次はこんなことを	自己評価																												
			①	②	③	④																									
9/28	△ABCの角の性質	360°の説明や命題を「もしも...ならば...」で説明ができた。																													
9/28	△ABCの角の性質 $\angle A + \angle B + \angle C = 180^\circ$	「三角形の内角の和は180°」が、なぜか分かった。新しい発見があった。 「もしも...ならば...」で説明ができた。	A	B	A	A																									

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

「授業振り返りカード」に記入することで、授業内容を整理し、分かっていることや疑問に思っていることなどを自覚させることができた。また、「友達と学び合ってよかったこと」という視点で記述させることで、協働的に学ぶことのよさを自覚させることにもつながった。

イ 今後の課題

自分の考えをもてないままグループ活動に参加した生徒もあり、個々への支援が不十分だった。考えを比較分類する活動を充実させるために、見通しや自力解決とのバランスが必要である。

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

対象生徒であるアカデミア理系5人は、既習の知識や技能、数学に対する関心・意欲、思考力・表現力に課題がみられる。具体的には、学習課題を解決する際の糸口を探したり、解決の見通しを立てたりする力や、思考したことを筋道立てて説明する力が不十分である。そこで、個々に応じた資質・能力の育成のために、主体的・協働的に学ぶ授業改善を行った。生徒同士の協働的な学びの場面を積極的に取り入れるとともに、生徒自身で学びや資質・能力の伸長を自覚するための「振り返りシート」を導入した。

(2) 研究の実践（第3学年 単元名「いろいろな微分の応用」）

ア 単元の評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	数学的な技能	知識・理解
微分法を使って接線の方程式の求め方やグラフのかき方を考えようとする。	微分法を使って接線の方程式の求め方やグラフのかき方を考察する。	微分法を使って接線の方程式を求めたり、グラフをかいたりすることができる。	微分法を使って接線の方程式の求め方やグラフのかき方を理解している。

イ 単元の指導計画

小単元	時	主な学習内容	評価の観点				評価規準〔観点〕
			関	考	技	知	
媒介変数で表された関数の微分	1	曲線の媒介変数表示				○	・ 媒介変数表示の曲線の方程式を、幾つかの具体例によって理解する。〔知〕 ・ 媒介変数表示の曲線の方程式と、 x, y を用いた方程式とを関連させようとする。〔関〕
	2	媒介変数で表された関数の導関数			○		・ 媒介変数表示の関数の導関数を求められる。〔技〕
	3	媒介変数で表された関数のグラフ		○			・ 媒介変数で表された関数のグラフのかき方について考察することができる。〔考〕 【本時】

ウ 主体的・協働的に学ぶ授業の展開

課程	主な学習活動	指導上の留意点	主体的・協働的な学びの学習の工夫
導入 5分	1 「振り返りシート」と黒板の問題を用いて、接線の方程式の求め方を確認する。	・ 接線の方程式の求め方の基本を確認する。	・ 全員で声を出して確認する。
展開 40分	2 学習課題の提示 〔学習課題〕 媒介変数tで表された曲線 $\begin{cases} x=t^2-2t \\ y=-t^2+4t \end{cases} (t \geq 0)$ の概形をかけ。 3 具体的に t の値を代入し、点をとってグラフを予想する。	・ 発問「このグラフは今の知識でどうすればかけるか。」によって、課題意識をもたせる。 ・ 状況に応じて助言する。 ・ t の値の増加に対して (x, y) が変化することに気付かせ、 t の変化に対して (x, y) が変化することに注目することが大切だと見通しをもたせる。	・ 数学の事象から問題を見いだす力の育成を目的として、ペア活動、グループ活動の時間をとる。 ・ これまでの dy/dx を利用したグラフのかき方では、グラフを簡単にはかけないことを自覚させる。 ・ 自力解決の時間をとる。 ・ 全員で声を出して確認する。
媒介変数で表された関数のグラフのかき方について考察することができる。【数学的な見方や考え方】			
判断の要素			
媒介変数 t で表された曲線は、 x, y それぞれで増減を判断してグラフに表すという考え			
尺度		判断基準	
判断基準B		x の値が増加するときに、 y の値が増加したり減少したりするグラフを考え、概形をかける。	
C状況の生徒への指導		t に具体的な数値を代入した、 x, y それぞれの値に注目させ、座標から点をとらせる。	
判断基準A		x の値が減少するときに、 y の値が増加したり減少したりするグラフを考え、概形をかける。	
B状況の生徒への指導		x の値が減少するときに、 y の値が増加する場合、グラフはどのような方向に移動するかを考えさせる。	

課程	主な学習活動	指導上の留意点	主体的・協働的な学びの学習の工夫														
展開	4 微分を使ったグラフのかき方について考察する。	状況に応じて助言する。 	既習の内容を基にして発展的に考える力の育成を目的として、ペア活動、グループ活動の時間をとる。														
	5 x, y それぞれを t で微分することによってグラフをかく方法を考察する。	- 周囲との対話の中で、dy/dx の値ではなく、dx/dt や dy/dt の値を考えてグラフをかく方法について整理させる。 - 教師との対話に積極的に参加させる。															
	6 適用問題に取り組む。	状況に応じて助言する。  〔適用問題〕 媒介変数 t で表された曲線 $\begin{cases} x=3t^2-1 \\ y=t^3-3t \end{cases} (t \geq 0)$ の概形をかけ。	- 自力解決の時間をとる。 - 思考の過程を振り返り、その本質や既習事項との関係を統合的に考える力の育成を目的として、ペア活動、グループ活動の時間をとる。 - 解決の見通しを全員で声を出して確認する。 - 答え合わせの前に概形を示し、「自分の理解度を周囲と確認しよう」と促し、ペア活動やグループ活動を通して確認させる。														
媒介変数で表された関数のグラフのかき方について考察することができる。【数学的な見方や考え方】																	
<table><tr><th colspan="2">判断の要素</th></tr><tr><td colspan="2">媒介変数 t で表された曲線における x, y それぞれの増減は、dx/dt と dy/dt を用いて判断するという考え</td></tr><tr><th>尺度</th><th>判断基準</th></tr><tr><td>判断基準B</td><td>dx/dt と dy/dt の符号を判断した上で、増減表に表すことができる。</td></tr><tr><td>C 状況の生徒への指導</td><td>t の値が増加するとき、$dx/dt, dy/dt$ のそれぞれの符号の組合せにおいて、x 軸、y 軸それぞれの方向に、どのように変化するかを考えさせる。</td></tr><tr><td>判断基準A</td><td>dx/dt と dy/dt の符号を判断した上で、増減表に表し、グラフの概形をかくことができる。</td></tr><tr><td>B 状況の生徒への指導</td><td>増減表から、具体的な点の動きをイメージさせる。</td></tr></table>				判断の要素		媒介変数 t で表された曲線における x, y それぞれの増減は、 dx/dt と dy/dt を用いて判断するという考え		尺度	判断基準	判断基準B	dx/dt と dy/dt の符号を判断した上で、増減表に表すことができる。	C 状況の生徒への指導	t の値が増加するとき、 $dx/dt, dy/dt$ のそれぞれの符号の組合せにおいて、 x 軸、 y 軸それぞれの方向に、どのように変化するかを考えさせる。	判断基準A	dx/dt と dy/dt の符号を判断した上で、増減表に表し、グラフの概形をかくことができる。	B 状況の生徒への指導	増減表から、具体的な点の動きをイメージさせる。
判断の要素																	
媒介変数 t で表された曲線における x, y それぞれの増減は、 dx/dt と dy/dt を用いて判断するという考え																	
尺度	判断基準																
判断基準B	dx/dt と dy/dt の符号を判断した上で、増減表に表すことができる。																
C 状況の生徒への指導	t の値が増加するとき、 $dx/dt, dy/dt$ のそれぞれの符号の組合せにおいて、 x 軸、 y 軸それぞれの方向に、どのように変化するかを考えさせる。																
判断基準A	dx/dt と dy/dt の符号を判断した上で、増減表に表し、グラフの概形をかくことができる。																
B 状況の生徒への指導	増減表から、具体的な点の動きをイメージさせる。																
	7 適用問題の答え合わせをする。		周囲との対話で問題が解けるようになったことを自覚させる。														
まとめ 5分	8 「振り返りシート」を使い、振り返りをする。		「振り返りシート」を見返し、周囲との学び合いの時間を設定する。 - 授業で理解したことを自覚させつつ、理解が不十分な箇所がどこであるかを自覚させる。														

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

少人数授業のよさを生かし、「振り返りシート」や授業中の対話を通して、一人一人の生徒の理解度を把握できた。また、解決への見通しをもたせることで粘り強く思考することができるようになった。

イ 今後の課題

学習を通して育成された、数学的な見方・考え方、資質・能力の高まりに対する自覚が、どのように新たな数学的な見方・考え方の育成に結び付くか、新たな課題解決場面において見取る必要がある。

第5章 理科における考え方と実践例

1 理科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

理科の目標において、小・中学校では「科学的な見方や考え方」を養うことが、高等学校では「科学的な自然観」を育成することが示されている（資料5-1）。これらの理科の目標と学校教育法に規定された学力の三要素から、理科において課題を解決するために必要な資質・能力は、次の3点であると捉えられる。

- ① 自然事象についての知識・理解、技能
- ② 科学的に探究する能力（問題解決の能力）
- ③ 自然事象への関心・意欲・態度

児童生徒がこれらの資質・能力を身に付けていくイメージを、資料5-2のような自動車の模式図で捉えてみる。この図に見える「自然事象についての知識・理解、技能」と「科学的に探究する能力（問題解決の能力）」は、両輪として関連させながらバランスよく育成されることを表している。また、「自然事象への関心・意欲・態度」は、課題解決への原動力であるエンジンとして捉え、自然を愛する心情や科学的に探究する態度の育成も重視していることを表している。その際、児童生徒が自己の思考過程を客観視し、自分自身の高まりや修正点を自覚することは、より望ましい課題解決へ向けての方向付けを図ることが期待できるため、このことは、ハンドルのような役割を果たしていると捉えることができる。児童生徒を粘り強く課題解決に向かわせるためには、これらの資質・能力を一体的に捉え、児童生徒が見いだした課題を科学的に探究する過程を通して、バランスよく育成していくことが大切である。

そこで、指導に当たっては、どのような資質・能力をどのような場面で重点的に育成するのかを明確にして授業に臨む必要がある（資料5-3）。例えば、課題の設定の場面では、既存の知識や経験を基に、比較したり関係付けたりする能力が必要とされるため、主に「科学的に探究する能力（課題解決の能力）」の育成を重点化して捉えていることを示す。

資料5-1 理科の目標

【小学校】

自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。

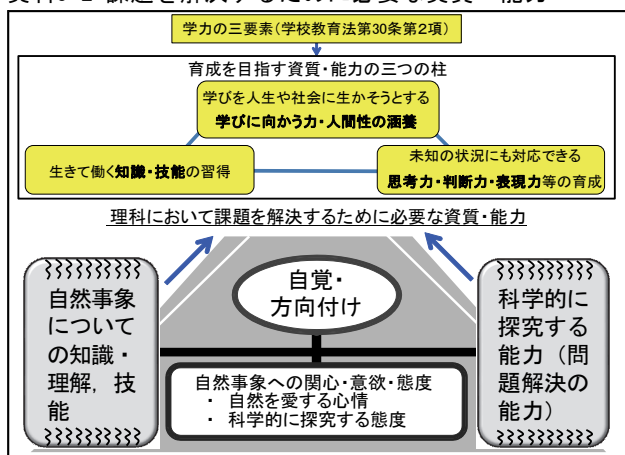
【中学校】

自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。

【高等学校】

自然の事物・現象に対する関心や探究心を高め、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な自然観を育成する。

資料5-2 課題を解決するために必要な資質・能力



資料5-3 科学的に探究する学習の過程における具体的な姿の例

過程 ^{*1}	具体的な児童生徒の姿の例	① ^{*2}	②	③
自然事象への働き掛け	・ 自然事象に働き掛けたり、情報を収集したりすることができる。	○ ^{*3}		○
課題の設定	・ 既存の知識や経験と照らし合わせて課題を見いだすことができる。 ・ 課題を自分と関係していることと捉え、学習する意義を見いだすことができる。		○	○
予想・仮説の設定	・ 課題に対して科学的な根拠を基に予想や仮説を立てることができる。	○	○	
計画の立案	・ 観察、実験の観点や対象を明確にすることができる。 ・ 観察、実験の検証方法を考えることができる。		○	
観察・実験の実施	・ 正しく安全に機器を操作することができる。 ・ 観察、実験の過程や結果を正確に記録することができる。	○		
結果の整理、考察	・ 目的に応じて図や表、グラフなどに整理・分析し、傾向を捉えることができる。		○	
結論の導出、振り返り	・ 学んだことの価値や自己の高まりに気付くことができる。 ・ 実生活や実社会へ適用して説明することができる。 ・ 観察、実験の結果を基に、予想や仮説を振り返りながら、自分の考えを表現することができる。	○		○

*1 過程は、「小学校理科観察・実験の手引き」（文部科学省）を参考としている。

*2 ①～③は、本文中で述べた理科において課題を解決するために必要な資質・能力①～③を示している。

*3 表中の○は、その過程において特に重視したい資質・能力を表している。

2 理科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

理科の学習では、児童生徒がもっている自然に対する既存の見方や考え方を、観察、実験を中核とした課題解決の過程を通して、「科学的な見方や考え方（科学的な自然観）」に変容させていくことが重要である。その実現を図るためには、授業において解決に取り組ませるべき課題はどうあるべきか考えなければならない。そこで、課題を設定する際の視点について資料5-4に、設定例を資料5-5に示した。視点A、Bは主に「自然事象についての知識・理解、技能」に重点を置いたものである。具体的には、解決すべき課題を児童生徒が自分の事として受け止め、その解決へ向けて、知識や技能を習得、活用しながら意欲的に取り組むような課題である。そこで、児童生徒には生活経験や既習事項を基に自分なりの考えをもたせ、解決へ向けた見通しを明確にさせる手立てが必要である。また、視点C、Dは主に「科学的に探究する能力（問題解決の能力）」に重点を置いたものである。具体的には、児童生徒が学び合うことの意義を感じ、協働して解決する力を高めることができる課題である。そこで、児童生徒に「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」といった科学の基本的な見方や概念に迫る「自然事象についての知識・理解」の深まりに加え、比較、関係付け、条件制御、推論、分析・解釈といった「科学的に探究する能力（問題解決の能力）」を発揮しながら論理的、批判的に思考させる手立てが必要である。

このような課題の解決を通して、児童生徒は科学的に探究する楽しさを味わいながら科学への関心を高め、理科を学ぶことの意義や有用性を感じ、課題を解決するために必要な資質・能力を身に付けていくことができる。

資料5-4 課題設定の視点

資質・能力	課題設定の視点	
自然事象についての知識・理解、技能	A	実生活や実社会との結び付きを感じさせる課題
	B	自然や科学の面白さを感じさせる課題
科学的に探究する能力（問題解決の能力）	C	既存の見方や考え方を生かして、解決への見通しをもたせる課題
	D	多様な解決方法や考察が導出される課題

資料5-5 視点を踏まえた課題の設定例

	課題	視点	主な学習活動
小学校	正体が分からない水溶液を見分けるには、どうしたらよいのだろうか。 (第6学年「水溶液の性質」)	B	・ 水溶液の性質や働きを適用し、正体が分からない水溶液を見分けようとする。
		C	・ 正体が分からない水溶液を見分ける方法を考え、見分けるための実験を企画し、検証する。
	物の燃え方に影響を与えているのは、酸素と二酸化炭素のどちらだろうか。 (第6学年「物の燃え方」)	A	・ 物の燃え方に影響を与えているのは酸素であることを理解する。
中学校		D	・ 酸素50％、二酸化炭素50％を含む集気瓶中で、ろうそくは燃えるか根拠を明確にして考える。
	酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせたとき、水溶液中ではどのような反応が起こっているのだろうか。 (第3学年「物質の変化とイオン」)	A	・ 酸性の水溶液とアルカリ性の水溶液を混ぜ合わせると、中和反応によって、水や塩と呼ばれる物質が生成されたり、反応熱が発生したりすることを身近なもので調べる。
		C	・ 塩酸と水酸化ナトリウム水溶液中に存在するイオンをモデルで表し、中和反応の各段階での反応の様子について見通しをもち、イオンのモデルを用いて表すことができる。
高等学校	だ液には、どのような働きがあるのだろうか。 (第2学年「動物の体のつくりと働き」)	A	・ ご飯を噛み続けると甘くなる事象について、だ液の働きと関連付けて考え、実験計画を立てる。
		D	・ ヨウ素液とベネジクト液を使用した対照実験の結果から、だ液の働きについて考察し、まとめることができる。
	物質はどのようにして、細胞膜を移動するのだろうか。 (生物「生体物質と細胞」)	B	・ なぜ、物質が細胞膜を移動しなければならないのか理由を考え、このような細胞膜の物質移動は、私たちの体のどのような場面で見られるか、例を挙げて説明する。
高等学校		D	・ 細胞膜のタンパク質の特徴を理解し、生体膜の働きについて輸送タンパク質という言葉を用いて考察する。
	炭酸水素ナトリウムと水酸化ナトリウムの混合溶液を塩酸で中和滴定すると、どのような反応が起こっているだろうか。 (化学基礎「酸と塩基の反応」)	A	・ 強アルカリと弱アルカリの混合溶液と強酸を中和させた場合の反応順について、きまりを見いだそうとする。
		C	・ 強アルカリと強酸、弱アルカリと強酸の中和反応についての知識や実験データを基に、二段階の中和反応をグラフで表すことができる。

3 理科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 目標を踏まえた具体的な学習活動の設定

理科の学習において資質・能力を育成するためには、観察、実験の充実はもちろん、その前後の活動である、問題を見だし、観察、実験を計画する学習活動や観察、実験の結果を整理し分析・解釈する学習活動を充実させなければならない。例えば、予想や仮説を検証するための方法を考えたり、結果を分析・解釈し妥当性を検討したりする活動では、児童生徒一人一人が、根拠を明確にしながら多面的・多角的に考え、合理的に判断することにより、課題に対し科学的に妥当な解を導き出すことが大切である。また、児童生徒が、自分なりの考えを新たに構築していく段階での深い思考は、他者の考えを深く理解することにもつながるため、一人一人が自らの考えをもち、それらを互いに吟味し合う活動が大切である。そこで、資料5-6に示すような視点から、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ学習の充実を図りたい。

(2) 意図的、計画的な指導と評価の一体化

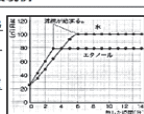
当センターではこれまで、児童生徒の思考や判断の結果が表現される「説明」や「論述」について、目標の達成状況を把握する具体的な尺度として、評価規準に基づいた「判断基準」の設定について提唱してきた。

この「判断基準」の設定は、授業を意図的に設計していく中で、対象となる事物・現象に関する内容の系統性と、児童生徒の科学的に探究する能力の高まりを関連付けて捉えることができるため、主体的・協働的に学ぶ学習においても、指導と評価の一体化を図る上で効果的であると考えられる（資料5-7）。また、「児童生徒に、思考・判断・表現させる指導は、具体的にどのように工夫すべきか」といった視点から、教材研究がより充実したものとなり、児童生徒に探究させるための指導と評価を焦点化して捉えることができる（資料5-8）。

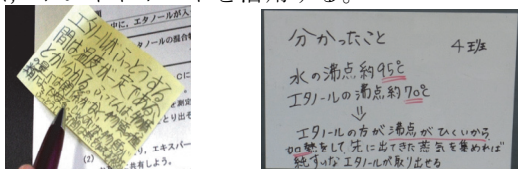
資料5-6 主体的・協働的に学ぶための工夫の視点

過 程	工 夫 の 視 点
自然事象への働き掛け	- 自然体験や科学的な体験の充実を図り、諸感覚の発揮を通して気付きを促す。 - 既存の見方や考え方では説明できない自然事象に出会わせ、興味・関心をもたせる。
課題の設定	- 問題となる背景を整理させ、問題の焦点化を図る。 - 出会わせる自然事象と実生活や学習経験とのつながりを把握させる。
予想・仮説の設定	- 図や表、モデルを用いて表現するように促し、根拠を引き出すなどして自らの考えを明確にさせる。 - 予想や仮説の相違点や共通点に着目させ、観察、実験の目的を明確にさせる。
計画の立案	予想や仮説を検証するための方法を考えさせ、結果とそこから得られる結論を明確にさせる。
観察、実験の実施	- 観察、実験の目的を意識させながら、役割分担と協力により、結果を記録させる。 - 条件を変えたり、複数回実験を行ったりして、納得するまで粘り強く実験を行わせる。
結果の整理、考察	- 結果を整理し、傾向を読み取らせる（実験データの処理、図、表、グラフの活用）。 - 分析・解釈したことを交流させ、妥当性を検討させる。
結論の導出、振り返り	- 実験結果に基づいて、説明に必要な言葉を適切に用いながら課題に対する結論について表現させる。 - 解決できなかったことや新たな疑問について整理させる。 - 実験前に立てた自分の予想や仮説を振り返らせ、自分の考え方の高まりを認識させる。

資料5-7 「判断基準」を設定した授業計画の例

中学校第1学年「物質の姿と状態変化」	
評価規準（科学的な思考・表現） 水とエタノールの沸点の違いを利用して、混合物から純物質を分離できることを説明できる。 評価の場面及び評価の対象（思考・判断に基づく表現内容） ホワイトボードを用いた生徒の説明やワークシートへの記述で評価する。 判断の要素 ア 水とエタノールの沸点の違い イ 蒸留による混合物の分離	
尺度	判断基準 予想される表現例 B ア 水とエタノールの沸点の違いをグラフから読み取ることができる。 イ 沸点の違いを利用した混合物の分離の方法について説明できる。 混合物を熱すると、水よりも沸点の低いエタノールが先に気体となって出てくるので、それぞれの気体を集め、冷やすことにより液体として取り出せる。 
【判断基準Bに加えて】 水とエタノールの混合物を加熱した時の温度変化について、グラフの形を予想できる。	
C状況の生徒への補充指導 B状況の生徒への深化指導 ・ グラフにして比較させ、エタノールの方が先に沸騰（状態変化）することに気付かせる。 ・ 冷却により気体が液体に戻ることを確認させる。 ・ 水とエタノールの温度変化のグラフから混合物の状態変化について考察させる。	
○ 評価規準 評価の観点の趣旨を踏まえ、単元の指導のねらい、教材、学習活動等に応じて設定する。 ○ 評価の場面及び評価の対象 どのような学習活動の場で、どのような資料や情報から、何を見取るのかについて明らかにする。 ○ 「判断基準」（児童生徒の表現例） どのような内容をどのような目安で評価するのかを具体化した「判断基準」を設定する。 ○ 補充・深化指導 B状況に達していない児童生徒には、どのような気付きを促すのか補充指導の例を示す。また、B状況に達した児童生徒には、学習内容が更に深まるよう、新たな視点を与える深化指導を行う。	

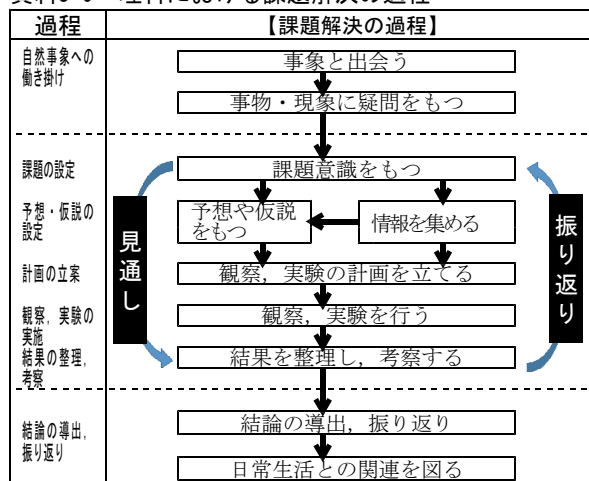
資料5-8 主体的・協働的に学ぶ学習の工夫と「判断基準」に基づく指導と評価の実践例（中学校第1学年「物質の姿と状態変化」）

過程	主な学習活動と生徒の表現例	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
課題の設定 予想・仮説 の設定	1 学習課題を設定する。 赤ワインの中にエタノールが入っていることを確かめるためにはどうすればよいだろうか。	○ 明確な根拠をもたせる工夫 ・ 赤ワインのラベルの表記からエタノールが含まれていることを確認する。 ・ 幾つかのキーワードを提示し、いずれかを必ず選ばせることで、自分なりの予想をもたせる。
計画の立案	2 学習課題を解決する見通しをもつ（ホームグループ）。	○ エキスパートグループでの活動を充実させる工夫 ① 課題解決の過程が捉えやすいようにワークシートにそれぞれの実験手順を記載しておくことで、結果から考察、まとめまで見通しをもった取組ができるようにする。
観察、実験 の実施	3 エキスパートグループによる活動を行う。 A：水の沸点の測定 B：エタノールの沸点の測定 C：蒸留の実験方法（食塩水）	② 実験時間を確保するために、ICT機器を用いて学習の進め方を効率よく説明する。また、事前に実験器具をグループ別に分けて準備する。
結果の整理、 考察	4 ホームグループによる活動を行う。 ① ホームグループに戻り、エキスパートグループによる活動で得た結果を説明し合う。 ② 課題の解答について、考えを出し合う。 ③ ホワイトボードを使い、他者に分かりやすくまとめる。	○ ホームグループでの活動を充実させる工夫 ① エキスパートグループで得た情報をホームグループで共有するために、ワークシートでまとめさせたり、付箋に記入させたりする。 ② 課題に対する解答をホームグループで話し合う際、ホワイトボードを活用する。
結論の導出、 振り返り	5 ホームグループで考えた方法を発表し合う。 6 発表を基に、まとめを行う。 沸点が異なることを利用して加熱し、先に出てきた気体を集め、においや火の付き方などを確かめるとよい。 7 学習を振り返る。	 【付箋を活用したまとめ】 【ホワイトボードの活用】 ○ 「判断基準」に基づく評価 ・ 水とエタノールの沸点の違いに着目して蒸留の方法を説明できているか（B状況）。 ○ 深化指導 ・ 水とエタノールの混合物の温度変化について、グラフの形を予想させる。

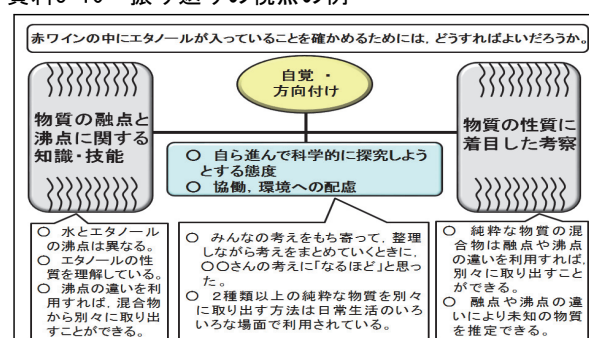
(3) 自覚・方向付けを促す振り返りの充実

見通しを基に課題解決に取り組んでいくと、課題解決の過程のそれぞれの場面やまとめの場面で、自らの考えの妥当性の検証・修正が必要となる（資料5-9）。この時、協働的に学ぶ学習を通して他者の意見や考えを取り入れ、「自分は何が分かっていたのか」を自覚し、「どのように修正すべきか」と、より望ましい考えの構築に向けた方向付けを促したい。その際、付箋やポートフォリオなどを活用して記録を残すようにすると、児童生徒が自らの考えについて、「いつ、どの場面で、何をきっかけに、どのように変わったのか」と課題解決の過程に沿って視点を明確にした振り返りを行うことができる（資料5-10）。このような振り返りを繰り返すことで児童生徒は課題を自分の事として受け止め、主体的な学びへ向かうことが期待される。

資料5-9 理科における課題解決の過程



資料5-10 振り返りの視点の例



4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、第6学年「水溶液の性質と働き」における主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を育成するものである。本単元で育成すべき資質・能力は、いろいろな水溶液の性質や金属を変化させる様子について追究しようとする関心・意欲・態度、水溶液の性質と働きについて推論する能力及び、それらに関する知識・技能である。そこで、このような資質・能力を育成するために、4種類の水溶液を見分ける学習活動を単元末に設定し、グループによる実験計画立案や実験結果に基づいた考察をさせた。その際、「判断基準」の設定を通して児童の表現例を想定することで、補充指導や深化指導の具体化を図るとともに、ねらいとする資質・能力が育成できたか検証を行った。なお、ここで取り扱う水溶液には、学習内容と実生活とのつながりを感じさせるとともに、習得した知識・技能の活用を促すために、第5学年「物の溶け方」において取り扱うミョウバン水を加えた。

(2) 研究の実践 [第6学年 単元名「水溶液の性質と働き」]

ア 単元の評価規準

自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての 知識・理解
① いろいろな水溶液の液性や溶けている物及び金属を変化させる様子に興味・関心をもち、自ら水溶液の性質や働きを調べようとしている。 ② 水溶液の性質や働きを適用し、身の回りにある水溶液を見直そうとしている。	① 水溶液の性質や働きについて予想や仮説をもち、推論しながら追究し、表現している。 ② 水溶液の性質や働きについて自ら行った実験の結果と予想や仮説を照らし合わせて推論し、自分の考えを表現している。	① 水溶液の性質を調べる工夫をし、リトマス紙や加熱器具などを適切に使って、安全に実験をしている。 ② 水溶液の性質を調べ、その過程や結果を記録している。	① 水溶液には、気体が溶けているものがあることを理解している。 ② 水溶液には、酸性、中性、アルカリ性のものがあることを理解している。 ③ 水溶液には、金属を変化させるものがあることを理解している。

イ 単元の指導計画 (全11時間)

※ 評価の観点の丸数字は、単元の評価規準と対応している。

次	主な学習内容 (時数)	評価の観点				評価規準
		関	思	技	知	
1	水溶液に溶けている物 (3時間)	①	①	①	①	5種類の水溶液には何が溶けているかに興味をもち、進んで調べる方法を考えたり、調べたりしようとしている。 - 水溶液を蒸発させるなどして、何が溶けているか調べることができる。 - 水溶液に何が溶けているか予想し、推論しながら追究し、表現している。 - 水溶液には、気体が溶けているものがあることを理解している。
2	水溶液の仲間分け (2時間)	②		①	②	- リトマス紙を正しく扱い、色の変化を整理して記録している。 - 水溶液には、酸性、中性、アルカリ性のものがあることを理解している。 - 身の回りにある水溶液についてリトマス紙による分類を通して、見直そうとしている。
3	水溶液の働き (4時間)		②	②	③	- 水溶液や加熱器具を安全に操作し、水溶液に溶けた物を取り出し、その性質を調べ、記録している。 - 実験結果から金属は水溶液によって別の物に変化したと推論し、自分の考えを表現している。 - 水溶液には、金属を変化させるものがあることを理解している。
4	単元のまとめ (2時間) 【本時】	②	②			- 水溶液の性質について習得した知識・技能を活用して進んで調べ、水溶液を見分けようとしている。 - 習得した知識・技能を活用して水溶液を見分ける実験の計画を立て、実験結果から判断することができる。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	主な学習活動と児童の表現例	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
つかむ	1 学習問題をつかむ。 〇〇先生からの挑戦状 ラベルのついていない試験管の中には、塩酸、石灰水、アンモニア水、ミョウバン水が入っています。この中で、ミョウバン水はどれか見分けられますか。 水溶液を見分けるには、どうしたらよいのだろうか。	○ 既習事項を活用し、課題を解決する学習活動の設定 日常生活におけるミョウバンの用途を紹介し、性質について予想させることで関心を高め、実験計画を立案させる。 ○ 既習事項の活用を促す工夫 既習事項の一覧表や実験器具のカードを手掛かりにして、主体的に追究できるようにする。
見通す・調べる	2 ミョウバン水の性質を調べるための実験計画を立て、実行する。 - においや様子、リトマス紙の反応、アルミニウム箔を溶かすかどうかを調べよう。 - 溶けている物を調べるために蒸発させよう。 3 4種類の水溶液からミョウバン水を見分けるための実験計画を立て、実験を通してグループで結論を出す。 - まず、リトマス紙で酸性の塩酸とミョウバン水を見付ける。次に、その二つを蒸発させ、白い固体が残った方がミョウバン水だ。	既習事項の一覧表（水溶液の性質） 今回使用する実験器具のカードを貼る欄 （6）年（2）組（5）班 実験器具カード
吟味する	4 グループの結論を発表し合い、検討する。 - まず、～をして、～となったので、～は～だと言える。 - 次に、～。	○ 「判断基準」の設定による思考力・判断力・表現力の評価と指導 「判断基準」に基づいて児童の表現例を想定し、根拠の明確さ等を判断して補充指導や深化指導に生かす。
まとめる振り返る	5 水溶液を見分ける際のポイントをまとめる。 水溶液を見分けるには、蒸発させたり、リトマス紙や金属の変化を調べたりして、水溶液の性質を明らかにするとよい。 6 学習への取組について振り返る。	まず、水溶液Aにおけるかいたら、水溶液Bだけがふんとしたにおいがしたので、水溶液Bはアンモニア水だということが分かる。 次に、二酸化炭素を入れてみると、水溶液Cだけが白くにごったので、水溶液Cは石灰水だということが分かる。 最後に、金属を入れたら、水溶液Dはあわを出したが

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- 本単元で習得した知識・技能の活用を図る学習活動を単元末に設定したことで、既習事項を振り返りながら水溶液の性質を調べたり、その結果を踏まえて水溶液を特定したりするなど、主体的に課題解決に取り組む姿が見られた。
- 特に、ミョウバン水という生活と関連が深く、性質については未習である水溶液を用いたことが、児童の関心・意欲・態度を高めるとともに、グループで推論したことの妥当性を検討し合うなど協働的に学ぶことを促すことにつながった。

イ 今後の課題

- 自分の考えをもつことができない児童に対して行った教師の助言が、同じグループの他の児童の考えにも影響を与え、児童の多様な考えを引き出す妨げとなることがあった。このような場合には、ノートや掲示物を参考にして自ら振り返るように促し、考えをもつことができるようにしていく必要がある。
- 実験計画の段階で役割分担まで行わせることで責任をもたせ、全ての児童が主体的・協働的に実験や考察ができるように働き掛ける必要がある。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、第3学年「化学変化とイオン」における主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を育成するものである。本単元で育成すべき資質・能力は、水溶液の電気的な性質や酸とアルカリの性質について探究しようとする関心・意欲・態度、水溶液の電気的な性質や酸とアルカリの性質についての観察、実験を行い、結果を分析して解釈する能力及び、それらに関する知識・技能である。そこで、中和反応について、イオンのモデルと関連付けて捉える学習活動を設定した。具体的には、塩酸に水酸化ナトリウム水溶液を加えることで起こる中和反応について、各段階ごとの水溶液中の様子をイオンのモデルを活用して説明する学習課題に取り組ませた。その際、「判断基準」を設定することにより、生徒の表現例を想定し、補充指導や深化指導の具体化を図るとともに、ねらいとする資質・能力が育成できたか検証を行った。また、付箋を活用して、生徒一人一人が「どこまで分かって」、「どこまで説明できるか」を自覚しながら取り組めるように工夫・実践を行った。

(2) 研究の実際〔第3学年 単元名「化学変化とイオン」〕

ア 単元の評価規準

関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	知識・理解
酸・アルカリ、中和と塩に関する事物・現象に興味・関心を持ち、それを科学的に探究しようとするとともに、事象を日常生活との関わりで捉えようとする。	酸・アルカリ、中和と塩に関する事象・現象の中に問題を見だし、目的意識をもって観察、実験などを行い、酸・アルカリの特性と水素イオン・水酸化物イオンとの関係、イオンのモデルと関連付けた中和反応による水と塩の生成などについて自らの考えをまとめ、表現している。	酸・アルカリの性質、中和反応に関する観察、実験の基本操作を習得するとともに観察、実験の計画的な実施、結果の記録や整理などの仕方を身に付けている。	酸・アルカリの特性が水素イオンと水酸化物イオンによること、中和反応によって水と塩が生成することなどについて基本的な概念を理解し、知識を身に付けている。

イ 単元の指導計画（全10時間計画の第8～10時のみ記載）

小単元	時	主な学習内容	評価の観点				評価規準
			関	思	技	知	
酸とアルカリを混ぜ合わせたときの変化	8 [本時]	中和		○	○	○	・ 酸とアルカリを混ぜ合わせると、水素イオンと水酸化物イオンが互いの性質を打ち消し合って水が生じる変化を、イオンのモデルを使って自らの考えをまとめ、説明している。
	9	中和と中性		○		○	・ 酸とアルカリの水溶液を混ぜ合わせると水と塩が生じることを説明している。 ・ 中和と中性の違いをイオンのモデルを使いながら説明している。
	10	塩	○	○		○	・ 身の回りの酸とアルカリの水溶液を取り上げて、中和反応が起こり、塩が生成されることについて説明している。 ・ 中和反応の実験を安全に行うことができる。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	主な学習活動と生徒の表現例	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
課題設定	1 中和滴定の実験を行う。	○ 明確な疑問をもたせる工夫 フェノールフタレイン溶液を加えた塩酸に水酸化ナトリウム水溶液を加える実験を行い、中和点を過ぎると混合物が赤色に変化するようにしておく。 ○ ワークシートの活用 実験から抱いた疑問をメモし、水溶液中で起こっている中和反応について自らの考えをまとめさせる。その考えを基に、グループでの話し合いを行う。 【自分の考えをまとめる】 【グループでの検討】
	2 学習課題を設定する。	
課題探究	酸とアルカリの水溶液を混ぜ合わせるとどうなるか、水溶液中のイオンを使って説明しよう。 3 イオンのモデルを使って考えることを確認する。 4 モデルを使って自分の考えをまとめる。 5 グループの意見をまとめる。	
	6 他のグループの説明を聞き、考えをまとめる。	
課題解決	7 他のグループの説明と自分たちのグループの説明を比較し、より望ましい説明になるよう検討し直す。	○ 付箋の活用 グループの考えをポスターセッション形式で他のグループの生徒に説明させる。発表を聞く生徒には、付箋に発表内容のメモをさせ、自分たちのグループの考えとの違いや新たな気づきについて明確にさせる。 【グループの考えを他者に説明】 【付箋を活用したまとめ直し】 ○ ホワイトボードの活用 元のグループに戻り、付箋のメモを参考に自分たちの考えをもう一度練り直し、ホワイトボードにまとめさせる。 【元のグループでの練り直し】 【ホワイトボードに最終的な考えをまとめる】
	8 グループで考えた説明を発表し合う。	
	9 学習を振り返り、まとめを行う。	
	H^+とOH^-が結びついてH_2Oをつくり、お互いの性質を打ち消し合うことが分かる。	○ 新しい気づきを促す手立て（深化指導） 水溶液中で中和反応していないイオンについて着目するように視点の焦点化を行う。

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- 主体的・協働的に学ぶ学習を取り入れたことにより、考察の場面で化学実験における考察の苦手意識を減らすことができ、実験に意欲的に取り組む姿が見られるようになった。
- 自分たちのグループの考えを他のグループへ説明する学習活動を生徒一人一人にさせたことで、生徒は解決しなければならない課題を意識しながら自分たちのグループの考えを表現することができた。
- 付箋を活用して自らの考えを見直したりまとめ直したりしたことで、生徒は自分が理解できていない部分を自覚し、修正しながら考えを深めていく姿が見られるようになった。

イ 今後の課題

生徒が解決しなければならない課題は何かを常に意識しながら学習を進めていくことができるような働き掛けについて、更に追究していく必要がある。

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践は、第2学年生物「生体物質と細胞」における主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、課題を解決するために必要な資質・能力を育成するものである。本単元で育成すべき資質・能力は、細胞膜の物質移動に働くタンパク質に関する事象について探究しようとする関心・意欲・態度、細胞膜の物質移動に働くタンパク質の特異性と生体における重要な機能を分析して解釈する能力及び、それらに関する知識・技能である。そこで、このような資質・能力を育成するために、情報収集や考えの交流を促すために、ジグソー学習に取り組ませた。具体的には、物質移動に関する4テーマについてエキスパートグループで資料から情報を読み取らせた後に、ホームグループで情報交換及び考察をさせ、全体で発表させた。その際、「判断基準」の設定を通して、生徒の表現例を想定し、補充指導や深化指導の具体化を図るとともに、ねらいとする資質・能力が育成できたか検証を行った。

(2) 研究の実践〔第2学年生物 単元名「生体物質と細胞」〕

ア 単元の評価規準

関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	知識・理解
細胞膜の物質移動に働くタンパク質に関する事象について関心をもち、意欲的に探究しようとするとともに、科学的な見方や考え方を身に付けようとしている。	細胞膜の物質移動に働くタンパク質の特異性と生体における重要な機能について説明している。また、問題を見いだし、探究する過程を通して、事象を科学的に考察し、自ら導き出した考えを的確に表現している。	生体物質と細胞に関する事象について観察、実験などを行い、基本操作を習得するとともに、それらの過程や結果を的確に記録、整理し、科学的に探究する技能を身に付けている。	生体物質と細胞に関する事象について、基本的な概念や原理・法則を理解し、知識を身に付けている。

イ 単元の指導計画（全4時間）

小単元	時	主な学習内容	評価の観点				評価規準
			関	思	技	知	
生体物質と細胞	1	生物の体をつくる細胞	○			○	・ 生物を構成する物質や元素について知ろうとし、細胞をつくる物質および細胞小器官について理解している。
	2	細胞小器官どうしの関わり				○	・ 細胞小器官どうしの関わり合いについて理解する。ホルモン→受容体（細胞膜）→DNAの活性化（核）→タンパク質合成（リボソーム）→分泌（ゴルジ体）の細胞小器官どうしが協調しながら働き合っていることを理解している。
	3 [本時]	生体膜の働きと構造		○		○	・ 細胞の機能とそこで働く細胞膜のタンパク質の特徴を理解し、生体膜の働きについて輸送タンパク質などを通して説明している。
	4	細胞骨格の働き			○	○	・ 細胞の形を維持したり、運動を起こしたりするタンパク質の特徴を理解し、細胞骨格の働きを理解している。

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

主体的・協働的に学ぶ工夫	
過程	主な学習活動と生徒の表現例
課題設定	1 課題解決への手掛かりをもたせる（学習の振り返り）。 【1問1答のフラッシュ問題例】 問い： DNAの正式名称は何か。 答え：デオキシリボ核酸
	2 学習課題を設定する。 物質はどのようにして、細胞膜を移動するのか。
課題探究	3 課題解決の見通しをもつ。 エキスパートグループのテーマ A：生体膜のつくり B：受動輸送、能動輸送 C：輸送タンパク質 D：エンドサイトーシス、エキソサイトーシス
	4 エキスパートグループ（A～D）に分かれ、資料を基に自分の考えをまとめる。 S1： 輸送タンパク質にはチャネル、担体、ポンプがあるね。 S2： 何が違うのかな。エネルギーが関係すると思うのだけど。
課題解決	5 ホームグループに戻り、エキスパートグループで得た情報を一人ずつ発表し、まとめる。 受動輸送は濃度勾配に従った物質輸送です。能動輸送は濃度の低い方から高い方へ輸送できますがエネルギーが必要です。
	6 ホームグループでまとめた考えを全体で発表し合う。 水分子の大部分はアควaporin、Na ⁺ はナトリウムチャネルやナトリウムポンプ、グルコースは担体と呼ばれるタンパク質を通して細胞膜を移動します。
	7 学習を振り返り、まとめを行う。

○ 学習内容の定着及び興味・関心の喚起を図る工夫 ICTを用いて問いと答えを投影し、2人1組の5問先取で回答させる。既習内容の定着を図るとともに、関連分野への興味・関心を高めるような出題を行う。	
○ 見通しをもたせる工夫 ワークシートと資料を配布する。4～5人のグループをつくらせ、学習課題を確認させることで、目的意識の明確化を図る。	
○ 本時の学習に関連する予習内容の確認	
○ ジグソー学習による個人の役割の焦点化 A～Dのエキスパートグループに分かれ、それぞれの追究テーマについて資料から情報を読み取らせる。自分で調べたことや疑問などを述べ合いながら、個人としての考えを明確にさせ、ホームグループでの交流を深めさせる。 【自分の考えをまとめる】 【グループ内での発表内容の検討】	
	
<エキスパートグループ>	<ホームグループ>
○ ICT活用による伝達場面の設定、自覚・方向付け 黒板にワークシートの図を投影し、各グループの考えを発表させる。発表を聞く生徒には、自分たちのグループの考えとの違いや気付いたこと、感想などについてまとめさせる。 【グループ発表】 【気付いたこと・感想】	
	自分が調べたことを発表し、グループのみんなで理解したことをつなげていくことがよかった。まだ疑問な点もあるけど、考えることがとても楽しく、説明することで理解が深まった。
○ 発表のポイントを板書することによる学びの焦点化	
○ 新たな気づきを促す手立て（深化指導） このような細胞膜の物質移動は、私たちの体のどのような場面で見られるか、考えさせる。	

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (7) 課題設定の場面で既習事項を想起させ、問題意識を焦点化したことで思考の手掛かりが明確になり、結論の導出や振り返りの場面での自覚・方向付けを促すことができた。
- (4) 本時の目標を具体的に捉えさせ個人の役割を決定させたことで、一人一人の主体的に学ぶ姿勢を引き出すことができた。
- (7) エキスパートグループで学んだことをホームグループで説明させたことにより、考察に深まりが見られ、休み時間に質問や学び合いが生まれた。このことは、生徒が新たな問いをもつことにつながったからであると考えられる。

イ 今後の課題

- (7) エキスパートグループで担当しなかった学習内容の定着を確実に図るために、まとめの場面では、要点やポイントの整理をICTを活用して行うなど、更に工夫する必要がある。
- (4) 発表後の意見交換を充実させることで理解の深化を図るために、解決が困難であった部分など生徒の問題意識をより焦点化させる必要がある。

第6章 外国語活動、外国語科における考え方と実践例

1 外国語活動、外国語科において課題を解決するために必要な資質・能力とは、どのようなものか

本教科等では、小・中・高を通じてコミュニケーション能力の育成を目指している(資料6-1)。そのため、外国語活動においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語への慣れ親しみ」、「言語や文化に関する気付き」を、外国語科においては、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現・理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」をバランスよく育むことが大切である。本教科等では、これらを「課題を解決するために必要な資質・能力」として捉え、学校教育法の示す学力の三要素との関連から資料6-2のように整理した。

課題解決に向けては、資料1-3に示す資質・能力の三つの柱を踏まえ、次の点に留意する。まず、「言語や文化に関する気付き」、「言語や文化についての知識・理解」については、単に習得を目指すものではなく、それらを用いて何ができるかが重要となる。また、「外国語への慣れ親しみ」、「外国語表現・理解の能力」については、必要な情報を把握するとともに知識・技能を活用しながら課題解決に向けて思考する力、課題解決に必要な情報や方法を選択したり、結論を出したりするために判断する力、伝える相手や状況に応じて表現する力として捉える必要がある。そして、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」については、主体的に学ぶ態度、学びに向かう力の育成に加えて、多様性を尊重し、互いのよさや考えを認め合う態度の育成に留意する必要がある。また、児童生徒が学習の意義を理解したり、その後の学びの方向付けを自ら行ったりすることができるようにするために、課題解決の過程を通して、自己の高まりや修正点を客観的に捉え、次の学びに生かす力を育むことも大切である。

資料6-3は、課題解決的な学習過程における児童生徒の姿と資質・能力との関連を例示したものである。指導に際しては、これを踏まえて指導計画の作成や、児童生徒への働き掛けを行いたい。

資料6-1 学習指導要領における外国語活動、外国語科の目標

【小学校学習指導要領（外国語活動）】

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

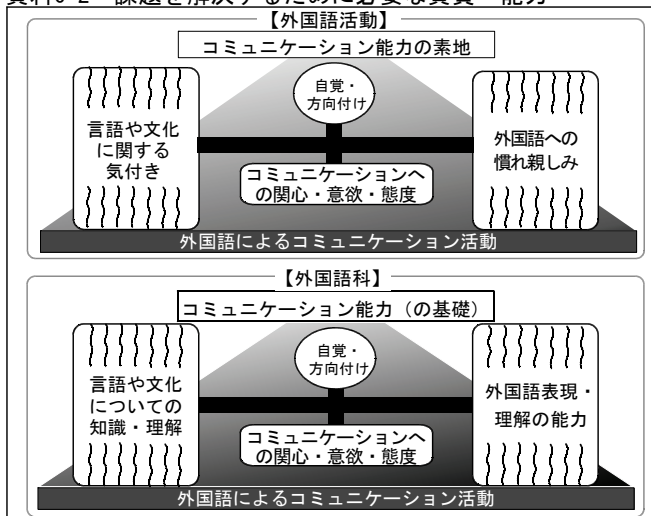
【中学校学習指導要領（外国語科）】

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

【高等学校学習指導要領（外国語科）】

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

資料6-2 課題を解決するために必要な資質・能力



資料6-3 課題解決的な学習の過程における具体的な児童生徒の姿の例

- ① 言語や文化についての知識・理解（言語や文化に関する気付き）
- ② 外国語表現の能力、外国語理解の能力（外国語への慣れ親しみ）
- ③ コミュニケーションへの関心・意欲・態度

学習過程	具体的な姿の例	①	②	③
課題把握	・ 目的意識や相手意識をもち、必要な情報を収集することができる。	○		◎
	・ 情報を整理、焦点化し、自ら課題を明確にすることができる。	○	◎	
	・ 課題解決に必要な知識・技能を明確にすることができる。	◎		
	・ 目標を自覚したり、学習する意義を見いだしたりすることができる。			◎
課題追究	・ 課題解決に向けて、主体的に取り組むことができる。			◎
	・ 課題解決に必要な新たな知識・技能を習得したり、既習の知識・技能とともに活用したりすることができる。	◎	◎	
	・ 収集した情報を基に、目的や相手に即して自分なりの考えをもつことができる。		◎	○
	・ 他者との意見交換等を通して、考えを広げたり、深めたりすることができる。		◎	◎
	・ 自分の考えが相手に伝わるように、適切な語彙や表現を選択して話したり、書いたりすることができる。		◎	○
課題解決	・ 自分の学習状況を振り返り、学んだことの価値や高まり、今後の努力点等に気付くことができる。			◎
	・ 学習して身に付けたことを実生活に生かそうとすることができる。	○	○	◎

◎ 主に育成する資質・能力 ○ 付随して育成される資質・能力

2 外国語活動、外国語科において解決に取り組ませるべき課題は、どうあるべきか

(1) 課題設定の視点

資料6-4は、必要な資質・能力を育成するための課題設定の視点を整理したものである。特に、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を育成する視点からは、児童生徒の興味・関心に即しており、解決したいという意欲を高め、主体的な取組を促す課題設定に努めたい。また、「外国語への慣れ親しみ」、「外国語表現・理解の能力」を育成する視点からは、慣れ親しんだ外国語の表現や、習得した言語材料を適切に用いた、ペアやグループによる活動や話し合いを通して、自分の考えを深めたり、修正したりできるような協働的な学びを促す課題設定に努めたい。さらに、「言語や文化に関する気付き」、「言語や文化についての知識・理解」を育む視点からは、英語と日本語の相違点を含んでいたりと、知識・技能の習得が活用を通して促されたりするような課題の設定に努めたい。

本教科等では、これまでもペア活動やグループ活動を積極的に取り入れているが、知識・技能の習得や個々の考えの一方的な表現にのみ焦点を当てたものにならないようにすることが重要である。課題設定の際は、発達の段階を考慮し、児童生徒が、課題解決に向かう過程で、満足感や成就感を味わいながら知識・技能を定着させることができるよう留意したい。

(2) 課題設定の手順

本教科等で育成を目指す資質・能力は、児童生徒がコミュニケーション場面で特定の表現を自ら適切に選択したり、活用したりする言語活動を通して高められる。したがって、課題設定に当たっては、資料6-5に示すように、単元の特性や、扱われる表現等に基づき評価規準を明確にした上で、単元終末時に目指す児童生徒の姿や活動を想定し、児童生徒が見いだす課題を設定することが大切である。このことにより、教師の働き掛けの視点が明確になり、指導を意図的、計画的に行うことができるからである。

資料6-4 課題解決のために必要な資質・能力の育成に資する課題設定の視点

資質・能力	課題設定の視点
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	- 児童生徒の興味・関心に即しており、解決したいという意欲を高めることができる。 - 児童生徒が自分と関係のあることとして捉えることができる。
外国語への慣れ親しみ (外国語活動)	- コミュニケーション活動を体験する中で、必要な語彙や表現を自然に繰り返して使う機会がある。 - 児童が慣れ親しんだ語彙や表現を、目的や相手に応じて適切に選択し発話することができる。 - ペアやグループでの活動や話し合いを通して、児童が自分の考えを広げたり、深めたり、修正したりすることができる。
外国語表現の能力 外国語理解の能力 (外国語科)	- 与えられた場面や情報を基に思考、判断したことを、英語で適切に話したり、書いたりするなどの、4技能を統合的に活用して課題を解決する過程を通して、思考力、判断力、表現力を総合的に向上させることができる。 - ペアやグループでの活動や話し合いを通して、生徒が自分の考えを広げたり、深めたり、修正したりすることができる。
言語や文化に関する気付き (外国語活動) 言語や文化についての知識・理解 (外国語科)	- 音声や基本的な表現、文化について、英語と日本語との類似点や相違点を含んでいる。 - 基礎的・基本的な知識・技能を活用する機会があり、課題を解決する過程を通してその習得が促進される。

資料6-5 単元における課題設定の手順例（外国語活動）

ねらいの把握

- 積極的に道を尋ねたり、道案内しようとしたりする。
- 目的地への行き方を尋ねたり説明したりする表現に慣れ親しむ。
- 英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付く。

表現や語彙、コミュニケーションの場面と働きの確認

（表現）Where is the school? Go straight. Turn right. など

（語彙）park, flower shop, hospital, bookstore など

（コミュニケーションの場面）道案内

（コミュニケーションの働き）相手の行動を促す

育成したい資質・能力に基づいた評価規準の確認

- 相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとしている。
- 建物の名前を言ったり、道案内のやり取りをしたりしている。
- 英語と日本語とでは、建物の表し方が違うことに気付いている。

目指す児童の姿の想定

慣れ親しんだ建物の語彙や道案内の表現を用いて、目的地に向かう場面のスキットを作成し、分かりやすく発表している。

児童に表現させたい発話例（モデルスキットとして提示）

A: Oh, it's 10:00! Time sale! Time sale! Today, potato is 20 yen.
Excuse me. Where is the vegetable section?
B: Go straight and turn right. It's on your right.
A: Thank you. (略)

教師による課題の提示と児童が見いだす課題

【教師】「場面や表現を工夫してスキットをつくろう」（5/5時間目）

【児童】どんな場面の対話にすればいいだろうか。

今の単元のどの表現をどのように使えばいいだろうか。

これまでに慣れ親しんだ他の表現で使えるものは何だろうか。

どのように表現すれば、見る人に理解してもらえるだろうか。

グループでの相互評価と児童が見いだす新たな課題

【児童】友達の発表のよいところは何だろうか。

友達の発表や意見の中で、自分たちに生かせることは何だろうか。

3 外国語活動、外国語科において児童生徒が主体的・協働的に学ぶためには、どのような工夫が効果的か

(1) 目標を踏まえた活動を設定する視点

主体的・協働的に学ぶ学習が資質・能力を育成するものとなるためには、資料6-6のような視点に立った授業を展開する必要がある。

まず、主体的な学びについては、児童生徒にとって実生活との結び付きが強く、切実感のある課題に取り組ませることが大事である。特に、課題解決に向けた見通しをもたせたり、活動後の振り返りの場面で自分の成長を感じさせたりすることを大切にしたい。

次に、協働的な学びについては、児童生徒が互いに協力したり、助言したりする必然性のある課題に取り組ませたい。また、ペアやグループで、理解したことや表現したいことを伝え合い、助言し合うことで、自己の理解が深まったり、表現が豊かになったりする経験を積ませ、協働的に学ぶよさや必然性を感じさせることも効果的である。

(2) 意図的、計画的な指導と評価の一体化

本教科等における主体的・協働的に学ぶ学習は、児童生徒がコミュニケーションの場面で相手の思いや考えを的確に理解し、思考・判断したものを適切に表現する活動において最も効果を発揮するものである。当センターでは、このような活動で児童生徒が思考・判断し、表現したものを適切に評価し指導に生かすものとして、「判断の要素」(外国語活動)や「判断基準」(外国語科)を設定し、指導と評価の一体化を図ることの大切さについて提唱している。資料6-7は、中学校における「判断基準」と、想定される生徒の表現の例である。ここでは、特に、「おおむね満足できる状況(B状況)」並びに「十分満足できる状況(A状況)」の表現例を想定することに留意したい。このことにより、資質・能力の育成を図るとともに、教材研究や授業での働き掛け、評価の充実が期待できる。

資料6-6 主体的・協働的な学びを成立させる視点(例)

視点	教師の手立ての工夫
主体的な学びに関わること	・ 実生活との結び付きが強いなど、自分にとって切実であると感じられる課題に取り組ませる。 ・ 聞いたり読んだりした内容について思考・判断したことを表現するまでの過程を示したり、児童生徒自身に考えさせたりする。 ・ 課題解決に必要な語彙、表現やその習得の方法について示したり、生徒自身に考えさせたりする。 ・ 個人で語彙や表現を習得したり、自分なりに活用したりする機会を与える。 ・ 課題解決過程や身に付けた知識・技能について振り返らせ、自分の成長を感じさせる。
協働的な学びに関わること	・ 多岐にわたる情報について思考・判断し、目的や相手に応じて表現することが求められるような、一人では解決が容易ではない課題に取り組ませる。 ・ 聞いたり読んだりしたことを理解し、考えや意見、感想を述べたり書いたりするような、他者の多様な意見を取り入れることでよりよい解決に近づくことができる課題に取り組ませる。 ・ ペアやグループで、理解したことや表現したいと思っていることについて伝え合い、互いに助言できる機会を与える。 ・ ペアやグループで話し合う際の視点を、児童生徒同士で共有させる。

資料6-7 「判断基準」の設定と生徒の表現の例(中学校)

ねらいの把握

- ・ 周りの生徒と協力して、自分の考えを話したり書いたりして、課題を解決しようとしている。
- ・ 日本文化を紹介する英文を書いたり、書いた内容を基に話したりすることができる。
- ・ 日本や外国の様々な家、自然環境やそこに住む人々の生活文化についての本文内容を理解することができる。
- ・ 関係代名詞の意味、用法及び表現形式について理解している。

表現、言語の使用場面と働きの確認

- (表現) 関係代名詞
- (言語の使用場面) 日本文化の紹介
- (言語の働き) 情報を伝える

育成したい資質・能力に基づいた評価規準の確認

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
・ 言語活動への取組	・ 適切な発話 ・ 正確な音読 ・ 適切な音読 ・ 適切な筆記	・ 正確な聞き取り ・ 適切な聞き取り ・ 正確な読み取り ・ 適切な読み取り	・ 言語についての知識 ・ 文化についての知識

※ 評価規準の詳述は省略

「判断の要素」の設定

ア 内容を基にした記述	イ 自分自身に関する記述
ウ これまでの経験を基にした記述	エ 既習事項の活用
オ 英文の量	

「判断基準」の設定

- ア 外国人に日本文化を知ってもらうための説明をしている。
- イ 自分自身のことについて述べている。
- ウ 自分のこれまでの経験を基に日本文化を紹介している。
- エ 自己紹介や日本文化紹介に使われる既習事項を活用している。
- オ 8文以上の英文で述べている。

目指す生徒の姿の想定

日本を訪れる予定のアメリカの知人のために、日本文化を説明するプレゼンテーションを作成し、ビデオレターで分かりやすく紹介している。

生徒の表現例の想定

【おおむね満足できる状況（B状況）】

Hello, I'm ○○. Thank you for your letter.
I'm going to talk about toshikoshi-soba. This is noodles which is made with buckwheat. We eat toshikoshi-soba on New Year's Eve.
Last year I made toshikoshi-soba. I enjoyed it very much.
I hope to see you soon.

【十分満足できる状況（A状況）】

Hello, I'm ○○. My hobby is watching movies. I like ○○ the best.
Thank you for your letter.
I'm going to talk about toshikoshi-soba which is made from buckwheat.
We eat toshikoshi-soba on New Year's Eve with our family.
Last year I made toshikoshi-soba with my mother. I enjoyed it very much.
Why don't you try to make and eat toshikoshi-soba this New Year's Eve?
I hope to see you soon.

(3) 自覚・方向付けを促す振り返りの工夫

主体的・協働的に学ぶ学習は、児童生徒が自己の学習状況を自覚し、課題解決の途中や解決後の自己の学びを方向付けるものである必要がある。このことを踏まえ、本教科等においては、(2)で述べた「判断の要素」(外国語活動)や「判断基準」(外国語科)を児童生徒と共有することが効果的であると考えられる。「判断の要素」や「判断基準」は、教師側から示したり、あるいは、児童生徒にペアやグループで考えさせたり気付かせたりすることで、課題解決に向けた見通しをもたせるようにする。また、共有された「判断の要素」や「判断基準」は、言語活動の充実にも資することから、資料6-8に示すような視点に留意しながら児童生徒の活動の状況を把握し、指導助言を行うことが大切である。

振り返りの活動は、自己の高まりや修正点とともに、自己の変容につながったきっかけに気付かせる活動である。したがって、振り返りの活動においても、児童生徒には、「判断の要素」や「判断基準」を基に、ペアやグループでの活動のどの場面で、自分や他者のどのような思考や判断が自分の考えを深め、自己の成長につながったかを振り返らせ、次の学びに生かすような働き掛けを行うことが大切である。

資料6-9は、高等学校における、読んで理解した内容を基に自分の意見を含めて英文を書く活動の例である。本実践においては、本文の内容理解並びに表現活動のそれぞれの場面でペアやグループでの活動を行い、最終的に各グループで一つの作品を仕上げ、発表する活動を行っている。特に、表現活動におけるグループでの話し合いでは、「判断基準」の各項目に関する意見交換がなされ、表現を修正したり、新しい内容を書き加えたりする様子が見られた。このように、課題解決の見通しをもたせた上で学び合いが行われる場面を設定したり、振り返りの場面で相互評価を行わせたりすることで、課題解決に必要な資質・能力を高めるための活動を充実させることができる。

資料6-8 言語活動充実の視点と課題解決に向けた活動の例

場面	言語活動充実の視点	課題解決に向けた活動の例
考えを深める場面	一人一人が自分の考えをもち、他者の考えと共通点や相違点を意識しながら考えを深めていくこと	(外国語活動) ・ 課題解決に向けて表現したいことについて、自分なりの思いをもつ。 (外国語科) ・ 筆者やコミュニケーションの相手の考え等に応じた適切な表現について自分なりの考えをもつ。
発表する場面	自分でまとめた事柄などについて説明したり、相手の立場や考えを互いに尊重して話し合ったりすること	(外国語活動) ・ ペアやグループの表現のよさや改善点を、「判断の要素」の各項目に照らして述べ合う。 (外国語科) ・ 個人やペア、グループの表現のよさや改善点を、「判断基準」の各項目に照らして述べ合う。
表現を完成させる場面	集めた情報を整理・分析し、論理的にまとめて表現すること	(外国語活動) ・ グループ等で出された意見を踏まえて表現を完成させ、表現の仕方も工夫しながら発表する。 (外国語科) ・ グループ等で出された意見を踏まえて加筆修正を行い、英文の表現を完成させる。

資料6-9 主体的・協働的に学ぶ学習と振り返りの様子(高等学校)

課題：二重被爆の経験をもつ方の思いや夢を読み取り、それについて自分の考えを述べる。

目指す生徒の姿の想定

山口さんの経験や平和に対する思いや夢について、4人グループでの話し合いを通して要点をまとめ、自分の考えを含めて英文で表現している。

教師と生徒、生徒同士で共有した「判断基準」

ア 山口さんの夢とは何かを述べている。
イ それについて賛成か反対かを述べている。
ウ そう思う理由や意見を述べている。
エ 5文以上の英文で書いている。

教師が想定した英文

I think his dream was to make a world without nuclear weapons. I agree with him. The suffering in Hiroshima and Nagasaki should never happen again. I want all the people around the world to live in a peaceful world. We need no nuclear weapons.

生徒が個人で表現した英文

I agree with him. I hope that we never use and have atomic bombs, too. I want the world to be peaceful. And I pass on his dream to young people.

ペア・グループ活動で交わされる意見や助言(例)

- ・ 山口さんの考えをもう少し詳しく述べた方がよい。
- ・ 賛成の理由がはっきり伝わるようにした方がよい。
- ・ これから自分たちがどのように行動するかについても述べた方がよい。

話し合いによりグループで表現した英文

I think his dream was to convey the importance of peace to young people. I agree with him. Not only Japanese people but also people around the world should know about Hiroshima and Nagasaki. I hope that we should never have or use atomic bombs. I want the world to be peaceful.

本活動における振り返りの例

- ・ 山口さんの思いを深く読み取っていた〇〇さんの意見は参考になった。自分も文中の人物の思いを意識しながら英文を読むようにしていきたい。
- ・ 自分の書いた英文がグループの表現に生かされたが、〇〇君は先日習った表現をうまく使っていたので、今後はこのことも意識していきたい。

4 小学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践においては、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫として、次の3点の工夫を行った。

一点目は、意欲を高める課題設定の工夫である。児童に単元の見通しをもたせるために、導入の段階で地域の身近な建物を取り上げて道案内のモデルスキットを提示することで、慣れ親しんだ英語を使って友達と協力しながらスキットを作ってみたいという意欲を高めた。

二点目は、指導と評価の一体化である。評価は、事前に想定した「判断の要素」に基づいて行った。そして、活動の中間評価として相互評価を行い、手本となる児童の活動を示し、よりよいコミュニケーションの図り方について気付かせ、再度活動に取り組ませた。また、中間評価の際は、児童の意見をホワイトボード等にまとめ、常に意識させるようにした。さらに、児童の困り感を把握して、個に応じた指導に生かすための手立てを行った。

三点目は、主体的・協働的な態度の育成である。ゲーム的な活動を計画的に行い、課題解決に必要な表現を繰り返し使う機会を確保した。そして、「自分の地図を完成させる」というタスクを与えることでコミュニケーションの必要性を感じさせ、相手意識をもって主体的に活動できるようにした。さらに、グループでロールプレイを行い、次時のスキットづくりにつなげた。

(2) 研究の実践（第6学年 単元名「道案内をしよう」）

ア 単元の評価規準

観点	ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語への慣れ親しみ	ウ 言語や文化に関する気付き
児童の姿	道案内の場面で相手意識を持ち、自分なりの表現方法で積極的に道を尋ねたり、道案内をしたりしようとしている。	道案内の場面のやり取りで、これまでに慣れ親しんできた語や表現を、状況に応じて自分の意思で選んで発話している。	英語が語源になっている外来語が身の回りにはたくさんあることや、外来語と英語の発音の違いに気付いている。
判断の要素	① 自分なりに表現方法を工夫しようとしている主体性 ② 友達と協力して交流活動に参加している協働性	① これまでに慣れ親しんできた語や表現の使用 ② “Where is the ~?” などの道案内に関する語や表現の使用	① 外来語と英語の発音の相違点への気付き ② 英語を語源とする外来語が身の回りにあることへの気付き

イ 単元の指導計画（全5時間） ※ 短学：短時間学習（朝の活動等で行う15分間の活動）

過程	次	活動内容	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫	評価の観点
わくわく	1	建物を表す英語を聞いたり話したりしよう。 チャンツ、カルタゲーム、マッチングゲーム	◎ 「道案内」をする場面のスキットを提示し、本単元の学習課題をつかませ、解決に向けた見通しをもたせる。 ○ チャンツでは建物を表す英語の語尾に着目させ、共通する音声ごとに分類し、言語への気付きを促す。	ア ウ
	短学	チャンツ、当てっこゲーム	○ 建物を表す英語を、自信をもって聞いたり話したりできるようにさせる。	イ
どきどき	2	方向を表す英語を聞いたり話したりしよう。 チャンツ、あっちむいてほいゲーム、プリーズゲーム、暗号ゲーム	○ プリーズゲームで、「相手の行動を促す」表現の“Go straight.”等に、体を動かしながら楽しく慣れ親しませる。 ○ 暗号ゲームでは、方向を表す表現を聞いて、具体物を操作しながら目的地にたどり着く活動を行い、必要な表現に十分に慣れ親しませる。	イ
	短学	チャンツ、ポイントゲーム	○ 方向を表す表現を、自信をもって聞いたり話したりできるようにさせる。	イ
	3 (本時)	友達に分かりやすく道案内をしよう。 チャンツ、ポイントゲーム、インタビューゲーム、ロールプレイ	◎ インタビューゲームでは、インフォメーションギャップを利用したシートを用いて、コミュニケーションを図る必要性を感じさせる。また、よりよくコミュニケーションを図る視点を意識させるために中間評価を行う。	ア イ
	短学	チャンツ、マッピングゲーム	○ 道案内の表現を、自信をもって聞いたり話したりできるようにさせる。	イ

いきいき	4	場面を工夫して道案内スキットを作ろう。 スキットづくり (1) 場面設定・役割分担・練習 (2) アドバイスタイム (3) アドバンスタイム	◎ グループで簡単な道案内の場面を設定し、これまでの学習を生かしてスキットづくりに挑戦させる。 ◎ 作ったスキットをグループで相互に視聴し、互いに助言をさせる（アドバイスタイム）。その後、助言を基にして再度スキットづくりに取り組み、達成感を味わわせる（アドバンスタイム）。	アイ
	短学	1 チャンツ 2 スキットづくり	◎ 前時に作ったスキットを練り上げたり、新たに場面を付け加えたりさせる。	
きらきら	5	場面や表現を工夫してスキットを作ろう。 スキットづくり (1) 場面設定・役割分担・練習 (2) アドバイスタイム (3) アドバンスタイム	◎ 多様な考えを持ってスキットづくりに取り組むことができるようにさせるために、学習形態を工夫する。 ◎ 相手に伝えるための表現方法として、言葉で伝えるだけでなく、「より分かりやすく」という視点を与え、ジェスチャー等を交えた表現ができるようにする。	アイ

ウ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	活動内容	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
わくわく (5)	1 挨拶 2 モデルスキット 3 めあて (Today's aim) 友達に分かりやすく道案内をしよう。	◎ 課題意識をもたせるために、うまく伝わっていない場面のモデルスキットを提示し、どうして伝わらなかったのかを考えさせ、課題の自覚化を図る。
どきどき (5)	4 チャンツ 建物を表す英語や道案内の表現を繰り返し聞いたり話したりしながら慣れ親しむ。	○ チャンツの形態を工夫し、建物を表す英語や道案内の表現に慣れ親しませる。 ○ 絵カードと文字を組み合わせて提示し、児童がコミュニケーション活動で困ったときに振り返る一つの手掛かりにさせる。
いきいき (30)	5 ポイントゲーム 建物の絵カードを用いて、建物までの道案内をしていく。 6 インタビューゲーム 自分のワークシートに載っていない建物や店の位置を友達にインタビューし、地図を完成させていく。 7 ロールプレイ グループで基本スキットの役割演技をする。	◎ ロールプレイに自信をもって取り組むことができるよう、ポイントゲームはグループ、インタビューゲームはペアで行うなど、学習形態を工夫する。 ◎ “Excuse me.” “Thank you.” などの表現を用い、「相手との関係を円滑にする」というコミュニケーションの働きを意識させるために、中間評価を行い、よりよいコミュニケーションの図り方に気付かせる。 ◎ 慣れ親しんだ道案内の表現を使って、グループで簡単な場面を設定してロールプレイをさせ、次時のスキットづくりにつなげる。
きんぎょ (5)	8 振り返り 9 挨拶	◎ 振り返りカードに感想を記入後、数名発表させ、互いの成長に気付かせる。また、チャレンジカードによる自己評価を行い、課題の自覚化を図る。

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 相手意識を高め、自分の考えや思いをよりよく伝えようとしたり、互いのよさを認め合う態度が育ってきた。
- (イ) 相互評価を通して、コミュニケーションの図り方に対して、友達に適切な助言を与えることができるようになってきた。
- (ウ) 中間評価や振り返りカードの実践により、自分のコミュニケーションの図り方に不足する点に気づき、ジェスチャーを入れたりするなど、質的向上を図ろうとする姿が見られた。

イ 今後の課題

これまで以上に指導と評価の一体化を図るとともに、学習課題や学習形態の工夫や、活動内容や教師の発問の精選等を通して、児童の活動時間を十分に確保する必要がある。

5 中学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

本実践においては、まず、課題設定の工夫として、自分のことについて一度作成した英文を生かして表現させる取組を行った。生徒は、1学期に「自分の将来の夢」についての英文を作成している。そこで、その英文に新出の表現を加えたり、友達の助言を盛り込ませることで、自分のことについてより詳しく述べる英文を作成させることとした。

次に、指導と評価の一体化の工夫としては、判断基準Aの英文を想定して指導計画を作成した上で、「判断基準」を生徒と共有し、グループでの話し合いを通してA状況への到達を目指させた。

最後に、主体的・協働的な態度の育成の工夫としては、グループでの話し合いの充実を図った。そのために、まず、習熟度を考慮してグループ編制を行った。また、活動に先立ち、「判断基準」の各項目について生徒と確認し、どのようなことをどの程度書けばよいか、そして、どの視点について助言し合えばよいかを把握させた。

(2) 研究の実践（第2学年 単元名「Unit 4 Homestay in the United States(NEW HORIZON 2)」）

ア 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての 知識・理解
① 学習した表現を用いて、積極的に言語活動に取り組もうとしている。	① グループ内での助言を基に、自分がすべきこと等を具体的な英文で書くことができる。	① ホームステイでの問題と解決方法についての英文を読み、理解することができる。	① 新出の助動詞を用いた文の形・意味・用法を理解している。
② グループ内で積極的にコミュニケーションを図り、自分の意見に反映させようとしている。	② 伝えたい内容を整理し、まとまりのある英文を話したり、書いたりすることができる。		② must と have to, will と be going to の違いを理解している。
③ 前単元の英文、教科書の本文や辞書等を用いて表現しようとしている。			

イ 「判断基準」

評価規準（外国語表現の能力）	
将来の夢について、その実現に向けて必要なことを英語で書くことができる。	
尺度	判断基準
B	ア 就きたい職業とその理由について述べている。 イ 夢に対する友達の感想や助言を述べている。 ウ 助言を踏まえて自分に必要なことを述べている。 エ 助動詞等の既習事項を活用している。 オ 7文以上の英文で述べている。 My dream is to be an English teacher. I have two reasons. First, I like children. Second, I like English. My friends said, "You have to learn many things." I want to go to America. I want to learn English there.
A	I want to be an English teacher in junior high school. I have two reasons. First, I like children. Second, I like to study English. So the job is perfect for me. My friends said, "You have to learn many other things." So I started to read books. And I want to go to America to study English.

ウ 単元の指導計画（全8時間）

次	主な学習活動	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫	評価の観点
1	単元の学習課題確認 スキーマ形成 表現活動	◎ 単元の学習課題の解決に向けた見通しをもたせる。 ◎ 本単元の内容と前単元とのつながりを意識させる。 ◎ グループ内で互いの将来の夢への感想を述べ合う。	アー① イー①
2	新出単語の確認、本文の内容理解(4-1) have to の形・意味・用法の確認 表現活動	◎ 第1時の内容に加えて、夢に到達するためには何をしなければならないかについて互いに助言する。	アー①③ ウー① エー①
3	新出単語の確認、本文の内容理解(4-2) will の形・意味・用法の確認 表現活動	第2時の助言を取り入れたらどのようなようになるのかを、will を用いて表現する。	アー② ウー① エー①②

4	新出単語の確認, 本文の内容理解(4-3) must の形・意味・用法の確認 表現活動	第2時で助言された英文を基に, 自分がしなければ ならないことを must を使い表現する。	アー② イー① ウー①
5	新出単語の確認, 本文の内容理解(4-4) must not の形・意味・用法の確認 表現活動	◎ 教師との英問英答やグループでの活動を通して, 前時までの内容の定着を図る。	アー③ イー② ウー①
6	表現活動	◎ 前時までの復習を基にして, グループで個々のま とまりのある英文を完成させる ・ 完成した英文の発表練習をする。	アー①③ イー②
7	復習テスト(発表, 作文) Activity 1(4-5), リスニング	◎ グループ同士で発表する。 ・ まとまりのある英文を書く。	イー②
8	Activity2(4-6), スピーキング ライティング	・ 家での決まりごとを伝え合う。	アー① エー①

エ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	学習活動	生徒の活動	分	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	1 挨拶	○ 英語で元気よく挨拶する。	2	
	2 タスクの確認	○ 本時のタスクを把握する。 自分の将来の夢とそれを実現する ために必要なことを書こう。	3	
展開	3 授業の流れの 確認	○ 本時の授業の流れを把握する。	3	◎ 前時までの内容とともに、「判断基準」 の各項目を想起させ、文章の完成に向 けて見通しをもたせる。 ○ B状況に到達していない生徒に補充 指導を行う。 ◎ グループ内で英文をA状況に近付け るような助言を行わせる。 ◎ B状況に到達していない生徒に対し てグループで助言を行わせる。 ○ 発表の際の留意点を確認し、聞き手 を意識した練習をさせる。 ○ 机間指導で発音やイントネーション等 を指導する。 ◎ 発表の仕方や英文の内容について助 言を行わせる。 ○ 各グループを巡回しながら、適切に 取り組んでいるかを観察する。
	4 個人での英文 作成	○ 前回までに作成した文を再構成し て完成する。	10	
	5 グループ活動	○ グループ内で英文を交換して互い に修正を行う。	10	
	6 個人での練習	○ 完成した文を暗唱する。	10	
	7 グループ活動	○ グループで発表練習を行う。	10	
終末	8 振り返り	○ 自己評価を行う。	2	◎ ワークシートに感想を記入させ、自 己の学習の状況を振り返らせる。 ○ 学習の見通しをもたせ、次時への学 習意欲を喚起する。
	9 挨拶	○ 次時の予告を聞く。		

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 既にかいた英文を活用する課題を設定したことにより、意欲的に学習に臨む態度の育成と基本的な表現の定着を図ることができた。
- (イ) 作成した英文に対して互いに助言を行わせたり、助言の内容を英文として盛り込ませたりする協働的な活動により、他者とのつながりを意識する生徒の姿が見られた。また、他者の考えを聞くことで、自分自身が気付いていなかったことに気付くことができた生徒もいた。

イ 今後の課題

将来の職業について述べる活動は、キャリア教育の一環として行うことが可能である。学び合いの質を高めるためには、題材の特性に応じて、他教科等との連携を図る必要がある。

6 高等学校における研究実践例

(1) 研究実践の目的

外国語教育において育成すべき資質・能力は、外国語によるコミュニケーション能力である。外国語でのコミュニケーションを通じて他者の意見を聞き、そして自分の意見や考えを伝えることができる生徒を育成するために、本研究では、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫を通して、4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する授業の実践について研究することを目的としている。

授業においては、まず、生徒が英語を使う必要性を感じる課題や活動を設定することが不可欠であり、ペアやグループなどの協働的な活動を通して互いの意見や考えを比較・検討することにより、思考力・判断力・表現力を高めることができる。そこで、生徒が習得した知識・技能を活用して、生徒の思考・表現がどのように変容したかについて、「判断基準」の設定による評価を通して検証する。

(2) 研究の実践（第1学年 単元名「Lesson 6 Living as a Carpenter (COMET English Communication I)」

ア 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての 知識・理解
授業において、自分の考えや意見を積極的に表現しようとする。また、他者の意見を聴こうとする。	① 本文の内容を簡潔にまとめて英語で表現することができる。 ② 職業に関するインタビューにおいて、場面や状況に応じた表現を使いながら、相手に尋ねたり、自分の意見を簡潔に話したり書いたりすることができる。	① 竹内さんが大工になった経緯や職業に対する考えや思いを読み取ることができる。 ② 職業に関するインタビューにおいて、相手の発言内容を理解することができる。	① 本文で使われている単語やその用法についての知識を身に付けている。 ② 受動態の文構造を理解している。 ③ 幾つかの職業において、就職する際に必要とされる資格等について理解している。

イ 「判断基準」

評価規準（外国語表現の能力）	
本文の内容を基にした職業に関するインタビューのための原稿を作成することができる。	
尺度	判断基準
B	ア 相手がその職業を選択した理由や必要とされる資格等について尋ねている。 イ 相手が答えやすいように質問する順序などの工夫をしている。 ウ 自己紹介などの始めの部分や結びの部分などの文章を書いている。 エ 教科書の内容を参考にして、5文以上の質問文を書いている。 Hello. My name is ○○. We want to ask you some questions about your job. Why did you decide to be a □□? What kind of qualification do you need? How was your job at first? What is important for □□? How do you like your job now? We are looking forward to receiving your email soon. Bye.
A	Hello, △△. My name is ○○ and we are Kirishima Senior High School students. We would like to ask some questions about your job. First, when did you decide to be a □□? We are now thinking about our job in the future. Second, how was your job at first? Did you do your work well? Lastly, when do you feel happy as a □□? We hope you will send us email as soon as possible. Good bye.

ウ 単元の指導計画（全9時間）

時間	主な学習活動	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫	評価の観点
1	Introduction, Signposting Questions and new words 課題の確認、単元及び Part 1の概要把握	竹内さんへのインタビューの概要を簡単な英語によるQ&Aで把握し、見通しをもたせる。	ア エー③
2	Comprehension 新出単語の確認、本文の内容理解(1)	◎ 精読・音読練習を行い、グループ活動を通して内容理解を深める。	ウー①② エー②
3	Review, Signposting Questions and new words Part 1の復習、Part 2の概要把握	◎ 本文についてペアでretelling活動を行う。 ・ 職業について竹内さんが思っていることの概要を簡単な英語によるQ&Aで把握し、見通しをもたせる。	イー①

7	Job Interview (1) A L Tの友人紹介, グループ活動での原稿作成	◎ A L Tの友人に関する情報を英語で聞き, 彼らの仕事に関するインタビューで質問したい事項をグループで話し合い, 原稿を作成する。	アイ②
8	Job Interview (2) 原稿作成, 相互評価による修正, ビデオ撮影	◎ グループごとに作成したインタビュー原稿を発表した後, 相互評価を基に改善し, 原稿を完成させる。 ・ ビデオに録画し, メールで送信する。	アイ③
9	Job Interview (3) 返信されたビデオの鑑賞, 振り返り	返信された映像を通して情報を聞き取りながら, Job Interview について振り返る。	アイ③

エ 主体的・協働的に学ぶ学習の展開

過程	学習活動	生徒の活動	分	主体的・協働的に学ぶ学習の工夫
導入	1 挨拶	○ 本時のタスクを把握する。 様々な職業を知るために Interview 映像を作成しよう。	2	
	2 タスクの確認		3	
展開	3 授業の流れの確認	○ 本時の授業の流れを把握する。	3	◎ 知りたい情報を得るために作成する原稿を「判断基準」を確認しながら, 完成に向けて見通しをもたせる。 ◎ C状況にある生徒に対してグループで助言を行わせる。 ◎ 相手が質問に答えやすくするための工夫を考えさせるなど, 英文をA状況に近付けるように助言を行う。 ◎ 相互評価を受けて, よりよいインタビューにするために必要なことをグループで考えさせる。 ○ 発表の際の留意点を確認し, 聞き手を意識した練習をさせる。 ○ 机間指導で発音やイントネーション等を指導する。 ○ 各グループを巡回しながら, 適切に評価を行う。
	4 リハーサル①	○ 前回までに作成した原稿をグループ内で共有し, インタビューする内容を確認, 練習する。	5	
	5 プレ発表	○ 各グループの質問事項を聞いて相互評価する。必要があれば英文を修正・改善する。	10	
	6 リハーサル②	○ 推敲した原稿を基に練習する。	5	
	7 ビデオ撮影	○ グループごとに撮影する。	12	
終末	8 振り返り	○ 自己評価シートで本時の活動を振り返る。 ○ 次時の予告を聞く。	8	◎ One Page Portfolio (以下, OPPシート) を使用し, 検討段階ごとに作成した英文を振り返らせる。 ○ 学習の見通しをもたせ, 次時への学習意欲を喚起する。
	9 挨拶		2	

(3) 成果と課題

ア 研究の成果

- (ア) 生徒の職業選択という身近な学習課題を設定できたことや, A L Tが来日前に就いていた実在する職業についてインタビューするという, 英語使用の必要性を感じさせることができたことで, 生徒が主体的に学習しようとする意欲を高めることができた。
- (イ) 判断基準Bを踏まえた上で, 「どのようにすれば, 自分の言いたいことが相手にもっと伝わりやすくなるか。」ということを考えさせたことにより, 相手意識をもった意見や話し方を考え, 表現しようとする生徒が増えた。
- (ウ) O P Pシートの活用により, 自らの英語での表現力の高まりに気付かせることができた。また, 相互評価により, グループ内の活動が活性化し, 「もっとうまくできるようになるにはどうしたらよいか」について一人一人が考えるようになった。

イ 今後の課題

身近な話題と結び付けながら, 生徒が主体的・協働的に解決に取り組める課題設定の在り方について研究を継続する必要がある。また, 中・長期的な視点から生徒が自らのコミュニケーション能力の高まりを段階的に自覚できるような指導の在り方についても工夫していく必要がある。

第7章 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 各教科等において課題を解決するために必要な資質・能力を学校教育法の規定や各教科等の目標に基づいて明確にしたことで、育成すべき資質・能力を踏まえた課題設定や効果的な学習活動の在り方を明確にすることができた。
- (2) 児童生徒が主体的・協働的に学ぶ必要性を感じる課題の在り方や主体的・協働的に学ぶための効果的な工夫について、研究協力員による検証授業を通して具体化することができた。検証授業では、特に、実生活や実社会とのつながりを意識した課題の解決に取り組む中で学習内容の価値を自覚したり、友達と協働的に学ぶことの意義に気付いたりする児童生徒の姿が多く見られ、参考となる事例を示すことができた。

2 今後の課題

- (1) 各教科等の特性に応じた「見方・考え方」を具体化し、児童生徒自らがその深まりを自覚することのできる学習指導の在り方について、研究を進める必要がある。
- (2) 教科横断的な資質・能力の育成の在り方について、研究を進める必要がある。

おわりに

本研究では、課題を解決するために必要な資質・能力を明確にするとともに、そのような資質・能力を育成する授業の在り方について、課題設定の工夫、主体的・協働的に学ぶ学習の工夫の側面から、理論の構築及び検証を進めてきた。中教審においても新しい時代に求められる資質・能力や授業改善の視点が示されたところであるが、本研究において得られた知見及び実践事例は、各教科等の本質を踏まえた指導法改善に寄与できるものと手応えを感じている。各学校で学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた授業実践を進めるための参考資料として、是非活用していただきたい。

最後に、本研究を進めるに当たり、貴重な実践事例を提供していただいた研究協力員の皆様方、御指導・御助言を頂いた鹿児島大学教育学系准教授 高谷哲也先生に、心からお礼を申し上げたい。

【引用・参考文献】

- | | | |
|----------------|--|-----------|
| ○ 中央教育審議会 | 『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）』 | 平成26年 |
| ○ 中央教育審議会 | 『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』 | 平成28年 |
| ○ 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説』総則編，各教科等編 | 平成20年 |
| ○ 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説』総則編，各教科等編 | 平成20年 |
| ○ 文部科学省 | 『高等学校学習指導要領解説』総則編，各教科等編 | 平成21年，22年 |
| ○ 国立教育政策研究所 | 『評価基準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料』小学校各教科等，中学校各教科等，高等学校各教科等 | 平成23年，24年 |
| ○ 鹿児島県教育委員会 | 『平成27年度全国学力・学習状況調査鹿児島県結果分析』 | 平成27年 |
| ○ 鹿児島県教育委員会 | 『平成28年度全国学力・学習状況調査鹿児島県結果分析』 | 平成28年 |
| ○ 鹿児島県総合教育センター | 『研究紀要第119号』 | 平成27年 |
| ○ 時事通信社 | 『内外教育第6407号』 | 平成27年 |
| ○ 小学館 | 『総合教育技術2015年5月号』 | 平成27年 |